

MIS 教材

# 聖 霊

---

マンミン国際神学校

# 目次

## 第1部 聖霊

### 第1章 聖霊とはどなたか

1. 神と一つである・6
2. 助け主・7
3. 神の賜物・8

### 第2章 聖霊のバプテスマと火のバプテスマ

1. 水のバプテスマの意味・10
2. 聖霊のバプテスマの重要性と意味・10
3. 火のバプテスマの意味と力・12
4. 火のバプテスマを受けるには・14

### 第3章 聖霊の働き

1. 聖霊が臨まれるとき、力を受ける・15
2. 初代教会に臨んだ聖霊の力あるわざ・15
3. 聖霊は具体的にどんな働きをなさるのか・16
  - 1) すべてのことを教え、すべてのことを思い起こさせてくださる
  - 2) イエスが救い主であると証しされる
  - 3) 真理に導き入れ、やがて起ろうとしていることを示される
  - 4) 私たちが神の子どもであることを証しされる
  - 5) 弱い私たちを助けてくださる
  - 6) 神のみこころのとおり求めるようにされる
  - 7) 御霊の実を結ぶように導いてくださる

## 第4章 聖霊を受けた証拠

1. 信じたとき、聖霊を受けましたか・19
2. 聖霊はどのように受けられるか・19
3. 聖霊を受けた者に現れる証拠・20
  - 1) 神の命令を守ろうと努力する
  - 2) 神のみことばに喜んで聞き従いたくなる
  - 3) きよい生き方をしようとする
  - 4) 信仰の兄弟を深く愛し始める
  - 5) 信仰によって世に打ち勝ちながら生きていくようになる
  - 6) 救いの確信が与えられる
  - 7) 祈りに答えられるという確信が与えられる
  - 8) 神第一主義で生きていくようになる

## 第5章 御霊の賜物

1. 御霊の現れであり、益となる御霊の賜物・24
2. いろいろな御霊の賜物・24
  - 1) 知恵のことば
  - 2) 知識のことば
  - 3) 信仰
  - 4) いやしの賜物
  - 5) 奇蹟を行う力
  - 6) 預言
  - 7) 霊を見分ける力
  - 8) 異言
  - 9) 異言を解き明かす力

## 第2部 聖霊の声を聞く方法

### 第1章 神との交わり

1. 神の子どもは、聖霊の声を聞かなければならない・29
  - 1) ダビデの例
  - 2) 神の子どもは聖霊の声を聞かなければならない
  - 3) 神と交わることの重要性
2. 神と交わる方法・32
  - 1) 直接声を聞く場合（神の声、主の声、御使いの声）
  - 2) 聖霊の声を聞く場合
  - 3) 御霊に感じて声を聞く場合

### 第2章 聖霊の声を聞くための心

1. 真理の心と真理に逆らう心・35
2. 心の割礼の過程・36
3. 心の霊的な戦いの絶頂・37
4. 御霊に属する心・38
5. 心の割礼の重要性・39
6. 聖潔への近道・40
7. 祈りの力・43
8. 最後まで努力しなさい・44

### 第3章 肉の思いを打ち砕け

1. 従順の障害物・46
2. 肉の思いと御霊による思い・48
3. 肉の思いによる不従順・49
4. 肉の思いが働く過程・50
5. 肉の思いの例・52
  - 1) さばいて罪に定める
  - 2) 義と粹
6. 肉の思いに関する聖書の例・55
7. 肉の思いを捨てれば聞き従える・59
8. 肉の思いなしに従えば、祝福と神の力を体験する・63

## 第4章 聖霊の声を聞く深さ

1. ふとよぎる思いまで顧みなければならない・66
2. 聖霊の声を明らかに聞く例・66
3. すべてのことに神に頼ってこそ聖霊の声を明らかに聞く・67
4. 人によって聖霊の声を聞く深さが違う・68

## 第3部 御霊の実

### 第1章 御霊の実の重要性

1. なぜ御霊の実のみことばを心の糧としなければならないのか・70
2. 御霊の実を結ぶまで・72
3. 御霊の実をどのように結ぶのか・73

### 第2章 御霊の九つの実

1. 愛・76
2. 喜び・77
3. 平安・79
4. 寛容・81
5. 親切・85
6. 善意・87
7. 誠実・90
8. 柔和・92
9. 自制・94

終わりに

# 第1部

## 聖霊

「そこでペテロは彼らに答えた。『悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。』（使徒 2:38)

### 第1章

#### 聖霊とはどなたか

##### 1. 神と一つである

聖霊は、聖なる神の摂理を成し遂げる三位一体の神のおひとりである御霊の神から分かれて働いているお方である。三位一体の神とは、御父、御子、御霊の神のことである。三位一体の神は、それぞれの働きは違うが、本質は一つであられる。したがって、御霊の神は御父の神の属性をそのまま持っておられ、聖なる神の摂理を成し遂げるために働かれるのである。

御霊の神は、御父の神とともに永遠の昔からおられた。旧約時代には、「【主】の霊」「神の霊」「霊」などの名前で現れて働かれた。新約時代には、助け主としてこの地上に来られ、「聖霊」という名前で働いておられる。そして、「とこしえの御霊」として私たちとともにおられる(ヘブル 9:14)。

それでは、御父の神と一つになって働かれる御霊の神の働きをいくつか調べてみよう。まず、〈創世記 1:1-2〉を見れば、初めに神が天と地を創造された後、地は形がなく、何もなく、やみが大いなる水の上にあったとき、「神の霊」は水の上を動いていた、と記されているので、創造の働きにあずかられたことがわかる。また、旧約時代の祭司長や預言者、王などに働かれて、神の摂理を成し遂げられ、イスラエルの歴史にも関与された。

〈創世記 41:38〉を見れば、ヨセフはエジプト王パロから「神の霊」の宿っている人と称賛されたので、イスラエルの先祖であるヤコブを助けることができた。〈出エジプト記 31:3-5〉を見れば、神がベツァルエルを名ざして召し、「神の霊」を満たしたので、天幕が立派に造られた。

御霊の神は士師時代にもさばきつかさたちを立てて「【主】の霊」が臨むようにして、イスラエルを救われた(士師記 3:7-10, 6:34)。最後のさばきつかさであり、預言者として召されたサムエル、イスラエルの初代王サウル、神の心にかない、サウルの後を継いだダビ

デ王にも「神の霊」が下り（第一サムエル 10:10, 16:13, 19:20）、イスラエルの歴史を導かれ、その他にも多くの預言者に臨み、預言するようにして、神の摂理を成し遂げるようにされた。

新約時代になると、救い主の誕生を待ち望んでいた敬虔な者たちの上にとどまっておられ、救い主としてこの地上に来られたイエスがわかるようにされた（ルカ 2:25-38）。また、聖霊によって宿り、神の御子としてこの地上に来られたイエスが、聖霊の力で神のみこころを成し遂げて、救いの摂理を完成するようにされた。

それによって、誰でもイエス・キリストを受け入れれば、聖霊を受けて、神の子どもとされる祝福が受けられるようになった。旧約時代は、人に罪があったので、御霊の神が心のうちに宿られなかったから、御霊に感じて神の助けを受けた。しかし、新約時代は、イエス・キリストによって罪が贖われたので、御霊の神が聖霊として私たちのうちに住んでおられるようになった。それで、直接神の助けが受けられるようになったのである。

したがって、〈ローマ 8:11〉に「もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださるのです。」とあるとおりである。

よみがえられたイエス・キリストは、天に上られる前に弟子たちに「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを受け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。」（マタイ 28:19-20）と言われて、神に祝福される道を教えてくださいました。私たちはここでも、聖霊は神と一つであることが悟れる。

一方、〈使徒 5:3-4〉を見れば、アナニヤと彼の妻サツピラが彼らの持ち物を売り、その代金の一部を残しておく、使徒ペテロが「アナニヤ。どうしてあなたはサタンに心を奪われ、聖霊を欺いて、地所の代金の一部を自分のために残しておいたのか。」と言い、これは人を欺いたのでなく、神を欺いたことだと厳しく責めた。この時、アナニヤは死んでしまった。聖霊を欺くことは神を欺くことだからである。

## 2. 助け主

「助け主」とは「共に歩む」「同行者」という意味である。〈ヨハネ 14:16-17〉を見れば「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちに住んでおられるからです。」とある。

神は、すべての人類が罪のために神を見ることができなくなると、神ご自身を現わして、人類の救いを完成しようとされた。そのために、ご自身に代わってひとり子イエスをこの地上に遣わされた。イエスは救いの道を完成して天に上られるので、もうひとりの助け主がいなければならなかった。したがって、イエスは父なる神にもうひとりの助け主を求め

られ、神はイエス・キリストの復活、昇天後に助け主を遣わされた。それが真理の御霊、すなわち、聖霊である。

イエス・キリストの御名によって遣わされた助け主聖霊は、イエス・キリストを受け入れた神の子どもたちとともにおられ、その心に住んで、真理に導き入れてくださる。それで、〈ヨハネ 14:26〉に「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。」と書いてあるのである。

〈第一コリント 3:16〉を見れば「あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。」とある。〈第二テモテ 1:14〉には「そして、あなたにゆだねられた良いものを、私たちのうちに宿る聖霊によって、守りなさい。」とある。これは、聖霊が神の子どもたちといつまでもともにおられて(ヨハネ 14:16-17)、神のみことばを教え、また思い起こさせながら(ヨハネ 14:26)、罪と義とさばきとについて悟らせてくださるので(ヨハネ 16:7-11)、すべての真理に導き入れるということである(ヨハネ 16:13)。

聖霊は人間の肉眼で見える形はないが、人格的な属性を持たれた方である。それで、私たちが御霊の願いに従って、神のみこころのとおり行えば、心に喜びを与えて、聖霊に満されるようにして、神が喜ばれていることを知らせてくださる。しかし、反対に、私たちが御霊の願いに従わないで、以前の生活に戻って罪を犯せば、聖霊が悲しまれ(エペソ 4:30)、喜びと平安が離れて心が苦しくなる。それによって、神が喜ばれていないことを知らせてくださる。

したがって、聖霊は人間の弱さを助けて、私たちのためにとりなして下さり(ローマ 8:26)、励まされ(使徒 9:31)、行うべきことを指導して(使徒 20:28)、神の愛を心に注いでくださる(ローマ 5:5)。そうすることによって、私たちが罪と戦って血を流すまで抵抗して捨て、神のみこころのとおり行う者になるよう導かれるのである。

### 3. 神の賜物

プレゼントをもらえば、贈られた物よりも、その中に込められている愛の心が感じられるのでうれしい。ところが、この世でやり取りするプレゼントは、いくら高いものであっても、少し後になれば価値がなくなり、大切に思われない。永遠ではないからだ。しかし、永遠に尊く思えるプレゼントがあるが、何だろうか？ それは、とこしえまでおられ、愛の豊かな神が下さる賜物であり、永遠のものである。また、この世のどんな高価な物とも比べられない貴重なもので、人としては与えることのできない尊い賜物である。

〈使徒 2:38〉に「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。」とある。神は、私たちにイエス・キリストを与えられることによって、誰でも信仰によって救われ、永遠のいのちに至ることができるようにされた。そして、十字架の苦しみを受けて救いの道を完成されたイエス様が復活、昇天したことによって、私たちに下さった賜物がある。それが「聖霊」である。



それでは、神が聖霊を「賜物」と言われる理由は何だろうか？ 神は最初の人アダムを創造した時に、神のかたちに造られた。すなわち、神と交われる「霊」と、霊に支配されて神のみこころにかなう働きをする「たましい」と、霊とたましいの幕屋である朽ちない「からだ」で造って、神の子どもとされた特権を思いきり味わうようにされた。霊である神と交わって、神のみこころのとおり生きるようにされ、すべてにおいて少しも欠けたところのない環境を作って、自由と豊かさを味わいながら万物を治めて生きるようにされた。

ところが、最初の人アダムが神の命令に背いたので、その不従順の罪による死が臨むと、人の主人である霊が死ぬようになった。この時から人間は神との交わりが途絶えたまま、神の子どもとされた特権を失い、神の愛と祝福が受けられない呪われた世で、敵である悪魔に支配されながら、涙、悲しみ、苦しみ、病気、貧困、死を味わって生きていくようになったのである。

このように人の主人である霊が死ぬと、死んだ霊を持つ人間の一生は惨めに変わってしまった。永遠のいのちが得られないからだになったので、死んで土に帰らなければならないし、汗を流して働かなければ食べて生きることができなくなった。また、女はみごもりの苦しみが大いに増し、苦しんでやっと子どもを得るようになった。そして、人間は永遠に神を見ることができなくなってしまったのである。

しかもアダムの子孫も、みな霊が死んだまま生まれるので、すべての人が神の子どもとされる祝福を失ったまま生きていくしかなかった。人間の死んでいた霊が生き返ることがない限り、すべての人は呪われた一生から解放されることができなかった。

それで、〈ヨハネ 3:6〉に「肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。」とあり、〈ヨハネ 6:63〉に「いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。」とあるのだ。これは、人間の死んだ霊を生かすのは御霊であり、御霊によって霊を生んでこそ死んでいた霊が生き返る、という意味である。いくら偉大な人でも、また、どんな手段と方法を使っても、人間の死んだ霊を生かして、呪われた人間の生を解放させることはできないのである。

このように、聖霊は、罪のゆえに人間がこの地上で経験しているすべての問題を根本的に解決する力があるので、すべての人類にとってまことに尊く、価値があるのだ。ところが、神は、イエス・キリストを受け入れて罪が赦された人なら誰でも、差別せずに、価なしに聖霊を賜物として下さり、神の子どもとされた特権を取り戻すようにされる。失った神の子どもを再び見つけたようなものだから、神も喜んで聖霊を賜物として下さり、全き神の子どもとして成長するように祝福されるのである。

したがって、神は聖書のあちこちで、聖霊が神の賜物であることを悟らせておられるのだ。〈使徒 5:32〉を見れば「神がご自分に従う者たちにお与えになった聖霊」とあり、〈使徒 10:45, 11:17, 15:8〉には「割礼を受けない異邦人にも臨む聖霊」とあるし、〈使徒 8:17-20〉には、サマリヤのシモンという人が聖霊を金を渡して買おうと思ったことをペテロがひどく叱る箇所がある。

聖霊は神と一つであり、イエス・キリストを受け入れて、罪が赦された神の子どもたちに賜物として臨んで、神の子どもたちのところに助け主として来られ、真理に導き入れる尊い方である。

## 第2章

### 聖霊のバプテスマと火のバプテスマ

#### 1. 水のバプテスマの意味

教会に来て、一定の期間、信仰生活をすれば、教団で定めた憲章により、学びをした後、バプテスマを受ける。ここで言う「バプテスマ」とは「水のバプテスマ」を指す。水のバプテスマは、すべての罪が赦されていのちを得て、聖なる神の子どもとされたことを外面的に証しする象徴的なしるしである。

行いによって救われた旧約時代には、神の民であるという証拠を表すために肉の割礼を受けた。新約時代には、イエス・キリストを救い主として受け入れた人々に、神は聖霊を賜物として下さり、内面的な心の割礼を受けるようにされた。また、水のバプテスマによって、神の子どもとされたことを外面的に証しするようにされたのである。

ところが、水のバプテスマを受けたからといって、それが救われた証拠にはなれない。水のバプテスマは、ただ聖霊を受けて神の子どもとされた人々に象徴的に施されるものである。だから、もし水のバプテスマを受けたとしても、実際に聖霊を受けていないなら、その人が受けた水のバプテスマは救いの保証にならないのである。

それで、〈使徒 8:14〉以下に、聖霊が来られた後も、サマリヤ地方にはまだ聖霊を知らなくて、水のバプテスマだけ受けた人々がいたことが記されている。それで、使徒たちがサマリヤに行って彼らに按手し、聖霊を受けるようにした。

したがって、信仰生活をしていくとき、まずは心の戸を開いてイエス様を救い主として受け入れ、聖霊を受けた後に水のバプテスマを受けることが望ましい。しかし、時には水のバプテスマを先に受けて、その次に心の戸を開いて主を受け入れて、聖霊を受けることもある。だが、重要なのは、何を先に受けるかでなく、神の子どもとして救いに至るためには、必ず聖霊を受けるべきだということである。

#### 2. 聖霊のバプテスマの重要性と意味

〈第二コリント 1:21-22〉には「私たちがあなたがたといっしょにキリストのうちに堅く保ち、私たちに油をそそがれた方は神です。神はまた、確認の印を私たちに押し、保証として、御霊を私たちの心に与えてくださいました。」とある。ところで、〈マタイ 3:11〉には、バプテスマには聖霊のバプテスマだけでなく、火のバプテスマもあることが記されている。「その方(イエス様)は、あなたがたに聖霊と火とのバプテスマをお授けになります。」とある。

それなら、まず「聖霊のバプテスマはどのように受けるのか」、また、「火のバプテスマとは何であり、どのように受けるのか」をみことばを通して調べてみよう。

イエス様がお生まれになる前、神は主の道を用意する使命を果たす人として、バプテスマのヨハネをこの地上にまず遣わされた。彼を用いて、イエス様が神の御子であり、キリストであることを宣べ伝えるようにされた。また、バプテスマのヨハネは「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」と叫んで、彼のところへ来て、自分の罪を告白する人々にヨルダン川で水によるバプテスマを授けた。

それとともに、バプテスマのヨハネはイエス様について証しして、「私は、あなたがたが悔い改めるために、水のバプテスマを授けていますが、私のあとから来られる方は、私よりもさらに力のある方です。私はその方のはきものを脱がせてあげる値うちもありません。その方は、あなたがたに聖霊と火とのバプテスマをお授けになります。」(マタイ 3:11)と言ったのである。

バプテスマのヨハネも、イエス様が「聖霊と火とのバプテスマをお授けになる」と言った。それでは、まず、聖霊のバプテスマとはどのように受けるものだろうか？ 聖霊を受けるには、まず「イエスがなぜ私たちの救い主であり、私たちがなぜ主イエスを信じてこそ救われるのか」を知らなければならない。そして、イエス・キリストを信じなかった自分が罪人であることを悟り、悔い改めなければならない。

もちろん、この世の中に生きていながら犯した他の罪もすべて悔い改めなければならないが、その中でもイエス・キリストを信じなかったことが最も大きい罪であることを悟り、悔い改めるべきである。それからは心の戸を開いて、イエスを自分の救い主と信じて受け入れなければならない。

その時、〈使徒 2:38〉に「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。」とあるとおり、神の賜物である聖霊が与えられるのである。

そして、〈ヨハネ 1:12〉に「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。」とあるとおり、神の子どもとされた特権を得て、救われるのである。

このように、聖霊のバプテスマは救いの確実な証拠であるから、教会にだけ通っているからといって、救われて天国に行くのではない。信じて聖霊を受けることで死んでいた霊が生き返ってこそ、その時から新生、すなわち、新しく生まれるようになるのであり、天国のいのちの書にもその名が記されるのである。そして、信仰が成長するにつれて神を「アバ、父」と呼べるようになり、祈っても心から信じられる祈りをするようになる。

祈りは必ず信仰によってしてこそ答えられるが、聖霊を受ける前はこのような信仰が与えられない。しかし、聖霊を受ければ、自分が神の子どもであり、全知全能の神が自分の父であることを知るようになる。それで、子どもとして父に求めるなら、答えられるという信仰が与えられるようになるのだ。

そして、聖霊を受ければ、その時から神のみことば、すなわち、真理のうちに生きようと努力するようになる。私たちが聖霊を受ければ、聖霊は「何が罪なのか」をわきまえるようにされるので、私たちが罪のうちに生きないで、神のみことばのうちに正しく生きられるように助けてくださる。それで、聖霊を受ける前に従っていた肉の願いを捨てて、御霊に従い、真理を行うようになる。だから、聖霊を受けてこそ、この暗やみの世に打ち

勝って、世の光としての生き方ができるので、ついに救われて、天国に行けるのである。

信仰生活をいくら長くしたとしても、聖霊を受けていない人には救いの確信がなく、みことばどおり生きることもできない。聖霊を受けてこそ救いの確信が与えられるのであり、聖霊に助けられて、毎日、罪を捨てて光の中に生きていくので、完全な救いに至ることができるのである。

したがって、永遠のいのちを得て、天国に行こうと教会に通う人ならば、当然、聖霊のバプテスマを受けて、世の光としての生き方をしなければならない。もし、新来者や初心の者のうちに、まだ聖霊を受けていない人がいるならば、すみやかに聖霊が受けられるように周りが助け、本人も、聖霊を受けるためにみことばを守り行って努力しなければならない。

### 3. 火のバプテスマの意味と力

聖霊を受ければ、すべての罪が赦されて神の子どもとされるが、かと言って、心の根にある罪の性質が捨てられるのではない。ひとまず聖霊を受けたので救われる資格は得たが、その後も相変わらず罪を犯して世と友になって生きるなら、そのような人は、世の人と変わらない。

こういう人は信仰生活をしながらも、いつか自分の思いと合わなかったり、自分の益に合わなかったりした時は、いつでも神を離れて、もう一度世へ向かうことがある。そうになると、たとえ一時、聖霊を受けたとしても、結局、救いとはかかわりがなくなる。

このような人々に向かって、〈ガラテヤ 3:3〉には「あなたがたはどこまで道理がわからないのですか。御霊で始まったあなたがたが、いま肉によって完成されるというのですか。」と論しているのだ。また、〈第一テサロニケ 5:19〉には「御霊を消してはなりません。」とあり、一度聖霊を受けたとしても消えることもあると書かれている。また、〈黙示録 3:5〉でも、いのちの書に一度記された名が消えることもあることを知らせている。

したがって、まことの神の子どもとして、罪を捨てて聖められ、神のみこころのとおり行う者になるには、聖霊のバプテスマを一度受けたことで終わってはいけない。聖霊に満され続けているうちに、御霊によって火のバプテスマを受けていかなければならないのである。

「火のバプテスマ」とは、聖霊の火が臨み、神の力が与えられることを言う。それで、このような火のバプテスマを受けるとき、私たちの心にある罪の性質が焼かれ、病気が焼かれて、家庭と事業の場、職場からも敵である悪魔・サタンが退くみわざが現れる。

聖霊は私たちに罪と義とさばきについて悟らせるので、私たちがみことばのうちに生きられように助けてくださる。しかし、聖霊を受けただけで根にある罪の性質まで捨てられるのではない。また、病気が離れて、様々な問題が解決されるのではない。

聖霊を受けることによって、以前に犯した罪は神がすべて赦してくださるが、相変わらずその心には罪の根がある。人にはこの罪の性質があるためにみことばどおり生きられない。それで、結局、敵である悪魔・サタンに訴えられて、病気にかかったり、家庭と職場

などに様々な問題も起こったりするである。

したがって、一度聖霊を受けて神の子どもにされたとしても、火のバプテスマを受け続けて、罪の根の根まで焼き尽くされ、聖められていつも光の中にとどまらなければならない。また、このように光の中にとどまりながら、火のバプテスマを受けていくと、家庭、職場、事業の場までも聖霊の炎の壁であまねく守られ、試練、患難が退いて神に祝福され、何をするにも栄えるようになるのである。

聖書には、このように火で罪と悪を焼く記述が出てくる。〈イザヤ 6:6-7〉に「すると、私のもとに、セラフィムのひとりが飛んで来たが、その手には、祭壇の上から火ばさみで取った燃えさかる炭があった。彼は、私の口に触れて言った。『見よ。これがあなたのくちびるに触れたので、あなたの不義は取り去られ、あなたの罪も贖われた。』」とある。

ここで「燃えさかる炭を口に触れた」とは、まさに火のバプテスマで口を焼いたという意味である。このように火のバプテスマが臨んだので、「あなたの不義は取り去られ、あなたの罪も贖われた。」と記されている。これは、火で罪と悪を焼いてしまったという意味である。

このように罪と悪を焼くには、罪と悪の根がある「心」に火が臨み、焼かなければならないのに、ここではなぜ「口」を焼いたので彼の不義が取り去られたと書いてあるのだろうか？

〈マタイ 12:34〉に「まむしのすえたち。おまえたち悪い者に、どうして良いことが言えましよう。心に満ちていることを口が話すのです。」とある。すなわち、心にあることが口を通して出てくるので、結局、人の口を通して出てくる悪はその心にある悪を表すのである。したがって、イザヤの「口」が火で焼かれたということは、霊的にその「心」の罪と悪が焼かれたという意味になる。

先に、火のバプテスマとは神の力が与えられることと述べたが、神はご自身の力をなぜ「火」と表現されたのだろうか？ 霊の目が開かれた人はこのみことばがよく理解できるだろう。肉的にも、火は何かを燃やしてなくす働きをする。同じように、霊の目が開かれれば、熱く祈っている時は天から火が降ってきたり、神の力を行う者が祈っているとき、その人から火が出て行って、人々に臨んだりするのが見える。それで、病気や心にある罪の性質が焼かれて、霊肉ともに様々な問題が解決されるのだ。

私たちが祈るとき、「聖霊の火で働いてください」と求めるのが、まさにこのような理由からなのである。また、「聖霊の炎の壁で守ってください」と祈ったりもするが、このように神が聖霊の炎の壁で取り巻いてくだされば、その時は敵である悪魔・サタンが恐れて近づけないし、逃げるしかなくなる。敵である悪魔・サタンが聖霊の炎に触れると、その力を失って、まるで死んだようになってしまうからである。〈創世記 3:24〉にも、アダムがエデンの園から追い出されたとき、神がエデンの園の東に、ケルビムと輪を描いて回る炎の剣で守るようにされた、とあるが、これも同じ理由からである。

したがって、このような神の力である火が臨むと、私たちの中にある暗やみ、すなわち、罪の性質や病気と病原菌が焼かれて、私たちがいる所はどこでも暗やみが退くのだ。また、特に具合の悪いところがなくても、このように火のバプテスマを受ければ、全身から疲労が退いて、もっと健康なからだになる。事業の場、職場からも暗やみが退くので、何をし

ても栄える祝福が臨むのである。

#### 4. 火のバプテスマを受けるには

それでは、火のバプテスマはどうすれば受けられるだろうか？

火のバプテスマは、聖霊に満される時に臨む。だから、火のバプテスマを受けるためには、何よりも、罪ゆえに神との間に隔てられた壁を打ち壊さなければならない。神との間に罪の壁があれば、いくら満されようとしても満されないからだ。したがって、罪の壁がある時は、悔い改めて立ち返り、この壁をまず壊してこそ、もう一度聖霊に満されるのである。

しばしばいやしの集会では、まず悔い改めの祈りをして、罪の壁を打ち壊して、聖霊に満たされるようにする。さらに御霊に感じて聖霊に動かされ、満されるために祈って、その後、いやしの祈りをする。このようにしてこそ、神の力を行う者が祈る時に病人に火が臨み、すべての病気と病原菌が焼かれ、罪と悪が捨てられ、心の願いに答えられるからである。

さらに霊の目が開かれて見れば、火だけでなく、いろいろな神の力の光によって働かれることがわかる。したがって、みことばに従って神との間にある罪の壁を打ち壊して満されさえすれば、答えられない問題はない。

罪を悔い改めて、罪の壁を壊すだけでなく、火のバプテスマを受けるためには、本当に神に喜ばれる祈りと賛美をささげなければならない。心と思いと最善を尽くして、天の御座をとどろかせる祈りと賛美の香を毎日積み上げなければならないのだ。

その時、聖霊の火が臨み、罪の性質が捨てられて、病気をはじめ様々な問題が解決されるのである。そして、ついには私たちがあれほど慕っている聖潔に至るのである。神を信じる子どもならば、聖霊のバプテスマだけでなく、毎日、火のバプテスマを受けて聖められていき、たましいが幸いを得ているので、すべての点でも幸いを得、また健康である祝福を受けていかなければならない。

そうする時、まことに麦のような聖徒になり、主が麦と殻を分けられる時に、皆が天国の倉に入ることができるのだ。ただ「信じます」と告白するからといって、救われるのではない。罪を血を流すまで戦って捨て、悪はどんな悪でも避けるために努力するとき、それがすなわち、行いのある生きた信仰であり、その信仰によって救われるのである。

しかし、それは私たちの力でできるものではないので、御霊によって火のバプテスマ、すなわち、神に助けられて力づけられなければならないのだ。そのためにはいつも神の御前に賛美して、心を尽くして主を呼び求めて祈り、聖霊に満たされていかなければならない。

<黙示録 3:16>に「このように、あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしの口からあなたを吐き出そう。」とある。だから、信仰はなまぬるくてもいけないし、冷たくてもならず、毎日もっと熱くなるべきである。

## 第3章

### 聖霊の働き

#### 1. 聖霊が臨まれるとき、力を受ける

聖霊は神の子どもたちに神が下さる賜物であり、神の子どもだという保証になる。それで、〈使徒 2:38〉に「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。」とあり、〈第二コリント 1:22〉に「神はまた、確認の印を私たちに押し、保証として、御霊を私たちの心に与えてくださいました。」とあるのだ。

〈ヨハネ 3:5-8〉を見ると、「人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることができません。肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。あなたがたは新しく生まれなければならない、とわたしが言ったことを不思議に思ってはなりません。風はその思いのままに吹き、あなたはその音を聞くが、それがどこから来てどこへ行くかを知らない。御霊によって生まれる者もみな、そのとおりです。」と主が言われた。

風は存在しているけれど見えないし、風の音は聞いてもその方向を知らないように、聖霊はおられるけれど見るができない。また、御霊によって生まれた人はその証拠があるが、これを見分けることができない場合がほとんどである。

しかし、風が目に見えなくても、風が吹く時に感じられるさわやかさ、冷たさなどで、風が吹いていることがわかるし、風が吹く時に動く木の葉や揺れる物を見て、風の吹く方向がわかる。

そのように、聖霊も目に見えないが、神のみことばと霊的な証拠によって、聖霊を受けたのかそうでないのか、または、どれほど満されるように受けたかが見分けられる。〈使徒 2:1-4〉を見れば、五旬節に天から下られた聖霊について詳しく記されている。イエス・キリストが天に上げられた後、弟子たちが主のことばに従って、エルサレムを離れないで(使徒 1:4)、泊まっている屋上の間でみな心を合わせ、祈りに専念していた(使徒 1:12-14)。

すると、イエス・キリストの復活以後、五十日過ぎた五旬節になると、天から、激しい風が吹いて来るような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡った。また、炎のような分かれた舌が現れて、ひとりひとりの上にとどまった。すると、みな聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話しだした。

#### 2. 初代教会に臨んだ聖霊の力あるわざ

聖霊が、激しい風が吹いて来るように、また、炎のように臨み、イエス様の弟子たちが聖霊のバプテスマを受けると、彼らに驚くべき異言の賜物が現れた。その時に天下のあらゆる国から集まった敬虔なユダヤ人たちがみな驚き怪しんだ(使徒 2:5-13)。イエス様の一番弟子だったペテロは十一人とともに立って、声を張り上げ、イエス・キリストを大胆

に証しする者になった(使徒 2:14-36)。彼の言葉を聞いて、悔い改めてバプテスマを受けた人が三千人にもなったし(使徒 2:37-41)、足のなえた男を立ち上がらせるなど、大いなる神の力が現れた(使徒 3:1-10)。ペテロは迫害にも屈しないでイエス・キリストを伝える者になり(使徒 4:1-22)、多くの不思議としるしを行ったのである(使徒 5:1-16)。

このように、聖霊が臨まれば、力を受けて、不思議としるしを行って、生ける神とイエス・キリストを証しする主の証人となれるのである。十字架の苦しみを受けて、よみがえられたイエス・キリストは四十日の間、ご自分が生きていることを証ししながら、「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。ヨハネは水でバプテスマを授けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。」と言われた(使徒 1:3-5)。この約束は五旬節に聖霊が臨まれて成就された。

また、イエス・キリストは<使徒 1:8>で「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」と言われた。五旬節に聖霊が下られたことにより、初代教会が形成され(使徒 2:42-47)、使徒たちによって伝えられ始めた福音は、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで伝えられ、今は異邦人も福音を知っている。

### 3. 聖霊は具体的にどんな働きをなさるのか

聖霊を受ければ、アダムの不従順により死んでいた霊が生き返り、いのちを得る。さらに御霊によって霊を生み、霊であられる神の子どもらしく、御霊に属する人に成長して、主の証人となる。では、聖霊は神の子どもたちにどんな働きをなさるのか、具体的に調べてみる。

#### 1) すべてのことを教え、すべてのことを思い起こさせてくださる

人は霊とたましいとからだできているが、頭の中にある脳細胞に入力されているものによって、たましいが活動する。脳細胞にある記憶装置は、あることを記憶して、必要な時に思い出させる。人によって記憶装置が違い、年を取るほど記憶装置に老化現象が現れるので、記憶力に違いが出てくる。

このように人の記憶装置が完全でないので、記憶力も完全でないが、聖霊を受ければ、聖霊の働きによって、すべてのことを正確に、完全に記憶できるようになる。それで<ヨハネ 14:26>に「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。」とあるのだ。

このような聖霊の働きを受けるには、<第二コリント 10:5>に記されているとおり、神の知識に逆らって立つあらゆる高ぶりを打ち砕き、すべてのはかりごとをとりこにして、キリストに服従させなければならない。それで、<第一コリント 3:18>には「だれも自分を欺いてはいけません。もしあなたがたの中で、自分は今の世の知者だと思ふ者がいたら、知者になるためには愚かになりなさい。」とあるのだ。

したがって、聖霊を受ければ、イエスが救い主であることを知るだけでなく、聖霊が真



理によってすべてのことを教え、すべてのことを思い起こさせてくださる。それで、すべての真理に導き入れ、御霊に属する人として成長するように導かれるのである。

## 2) イエスが救い主であると証しされる

聖霊は、神の御霊として、イエスが誰なのかがわかるようにして、永遠に変わらない真理であるイエス・キリストについて証しされる。それで、〈ヨハネ 15:26〉に「わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、その御霊がわたしについてあかしします。」とあるのだ。

〈マタイ 16:15-17〉で、イエス様が弟子たちに「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」と尋ねられたが、ペテロが「あなたは、生ける神の御子キリストです。」と答えた。すると、「このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。」とイエス様が言われた。すなわち、神の御霊でなければわからないということである。したがって、聖霊を受ければ、神の御霊がイエス・キリストが私たちを罪から救ってくださった救い主であることを証しするのであり、私たちはイエス・キリストを伝える主の証人となるのである。

## 3) 真理に導き入れ、やがて起ろうとしていることを示される

聖霊は真理の御霊であり、真理そのものであるから、ただ真理に導き入れてくださる。だから、聖霊、すなわち、神の御霊に満されると預言するようになり、信仰生活をするのに大いに助けになる。したがって、〈ヨハネ 16:13〉に「しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。」とあるのだ。

聖霊に満たされれば、神の御霊に導かれて語るべきことをそのまま語るのも、やがて起ろうとしていることを知るようになる。すると、試練や患難を賢く避けることができる。また、あらかじめ備えて、敵である悪魔・サタンのしわざを受けないので、いつも勝利の人生になり、何をしても栄える祝福が受けられる。

## 4) 私たちが神の子どもであることを証しされる

聖霊を受ける前は霊が死んでいるので、神を父として仕えることができないが、聖霊を受けると、御霊によって霊を生んでいくので、死んでいた霊が生き返るほど、霊である神を知るようになり、神を父として仕えるようになる。それで、〈ローマ 8:14-15〉に、神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもとしてくださる御霊を受けたので、神を「アバ、父、」と呼びます、とあるのだ。

このように、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、私たちが神の子どもであることを証しして下さり、神の子どもらしく生きていくようにつかきどって下さる(ローマ 8:16-17)。

## 5) 弱い私たちに助けてくださる

〈ローマ 8:26〉に「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。」とある。私たちの主がむちで打たれたので、私たちのすべての病気がいやされた。それだけでなく、主は私たちのわずらいを身に引き受けくださった。それで、霊肉ともに健康が与えられたので、聖霊を受けた神の子どもたちは健康に生きられるのである。

イエス様の一番弟子ペテロは、聖霊を受ける前は死を恐れて、キリストを知らないと言った弱い者だった。しかし、聖霊を受けた後は、死を恐れなくて福音を伝える、強くて雄々しい者になった。このように、聖霊が私たちの弱さを助けてくださるので、聖霊に満されると、強くて雄々しい者になる。何をするにも聖霊に助けられ、神の力に頼るので、飛び抜けた者になれるのである。

#### 6) 神のみこころのとおり求めるようにされる

〈第一コリント 2:10〉に「神はこれを、御霊によって私たちに啓示されたのです。御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばれるからです。」とある。それで、聖霊は神の心をすべて知っておられる方であり、何でも神のみこころのとおりなされることを望まれる。そして、神の子どもが祈る時に、神のみこころのとおり求めるように働いてくださる。

〈ローマ 8:27〉に「人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられません。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。」とある。すべては神のみこころに従ってなされるのが最善の道である。したがって、神の子どもたちは祈る時も御霊に導かれて祈り、御霊ご自身がとりなしてくださいますようにしなければならない。そうすれば、神はすべてのことを働かせて、益としてくださるのである。

#### 7) 御霊の実を結ぶように導いてくださる

御霊の願いに従って行うようになれば、肉の願いを求めないので、御霊の実である愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制の実を結ぶようになる。このようなものを禁ずる律法はないとある(ガラテヤ 5:22-23)。このように、聖霊は御霊の実を結ぶように導き、完全に神のみこころに従って行う御霊の人になるように導いてくださる。

## 第4章

### 聖霊を受けた証拠

#### 1. 信じたとき、聖霊を受けましたか

〈使徒 19:1-2〉を見れば、異邦人の使徒として福音宣教に努めたパウロが、エペソで幾人かの弟子に出会って、「信じたとき、聖霊を受けましたか」と尋ねた。すると弟子たちが「いいえ、聖霊の与えられることは、聞きもしませんでした」と答える場面がある。彼らはバプテスマのヨハネが授けている悔い改めの水のバプテスマは受けたが、イエス・キリストを心に信じて、聖霊を賜物として受けていなかった。

それで、使徒パウロがイエス・キリストを伝えたと、これを聞いたその人々は、主イエスの御名によってバプテスマを受けた。パウロが彼らの上に手を置いたとき、聖霊が彼らに臨まれ、彼らは異言を語ったり、預言をしたりした(使徒 19:4-7)。

神は終わりの日に神の霊をすべての人に注ぐと、預言し、夢を見、幻を見るとある(ヨエル 2:28)。それはそのまま成就し、神の霊、すなわち、聖霊を受けた人々が集まって、教会を形成するようになった。ところが、今日、神を信じていると言いながら、聖霊が何であり、聖霊のバプテスマが何か知らないで信仰生活をしている人々がいる。

聖霊は、イエス・キリストを受け入れて、神の子どもとされた特権を得た者に、保証として下さる神の賜物である。それなのに、聖霊が何か知らないならば、どうして神の子どもと言えるだろうか？ 今日のような教会時代には、聖霊のバプテスマを受けて、心に聖霊が住まれてこそ(第一コリント 6:19)、神の子どもと呼ばれるからである。

したがって、〈第二コリント 1:21-22〉に「私たちがあなたがたといっしょにキリストのうちに堅く保ち、私たちに油をそそがれた方は神です。神はまた、確認の印を私たちに押し、保証として、御霊を私たちの心に与えてくださいました。」とあるのだ。また、〈第一コリント 12:13〉には「なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。」とあるのだ。

#### 2. 聖霊はどのように受けられるか

〈使徒 2:38-39〉に「そこでペテロは彼らに答えた。『悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。なぜなら、この約束は、あなたがたと、その子どもたち、ならびにすべての遠くにいる人々、すなわち、私たちの神である主がお召しになる人々に与えられているからです。』」とある。すなわち、誰でも自分が罪人であることを告白して、へりくだった心で悔い改めて、イエスが救い主であることを信じれば、罪が赦されて、聖霊を賜物として受けるようになるということである。

また、〈ルカ 11:13〉に「してみると、あなたがたも、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さないことがあります。」とある。〈使徒 10 章〉を見れば、ユダヤ人が外国人の仲間にはいたり、訪問したりするのは、律法にかなわないことと思われている時に、使徒ペテロは異邦人コルネリオの家に行って、イエス・キリストを伝えた。コルネリオは外国人だったが、神を恐れかしこんでいたからである。

すると、コルネリオをはじめ、神のみことばを聞くのを慕っていたすべての人々に聖霊が臨んだと記されている(使徒 10:1-46)。これは、神はかたよったことをなさらず、誰でも神を父と信じて恐れかしこむ者に聖霊を与えるということである。

したがって、聖霊は神の子どもであることの保証であり、自分が罪人であることを悟って、イエス・キリストを受け入れて、その名を信じて罪が赦された人々の心に神が下さる賜物であることを確かに知ったなら、私たちが信じた時に聖霊を受けなければならない。

### 3. 聖霊を受けた者に現れる証拠

教会に通って、神を信じているという多くの人々の中には、自分が聖霊を受けたのか、受けていないのか、知らないまま信仰生活をしていることがよくある。これから聖霊を受けた神の子どもに現れる証拠について調べてみよう。

#### 1) 神の命令を守ろうと努力する

聖霊を受ける前は、罪のゆえに神と和解できないので、神を愛することができなかった。しかし、聖霊を受ければ、神を愛するようになる。〈第一ヨハネ 5:3〉に「神を愛するとは、神の命令を守ることです。」とある。神を愛するほど、神の命令を守るようになるということである。

聖霊を受けた人は、罪を赦してくださった神の愛と恵みに感謝して、神を愛するようになる。また、死んでいた霊が生き返るので、霊である神と交われるようになり、神のみこころを悟るようになる。また、神の命令は愛の神がご自分の子どもたちのために与えてくださったことを悟るようになる。

それで、水と御霊によって新しく生まれる前は、人間の理性で聖書を読んで、神のみことばを聞くので、神のみことばを理解するのが難しく、神のみこころがわからなかった。しかし、聖霊を受けると、御霊に感じて神のみことばを聞いて読むようになる。すると、神のみこころを悟って、霊の糧にするようになる。

それで、聖霊を受けた神の子どもたちは、道と真理といのちであり、永遠のいのちの道へと導く神の命令を守ろうと努力するようになるのだ。

#### 2) 神のみことばに喜んで聞き従いたくなる

神は、私たちが罪人であった時に、ひとり子イエス・キリスト、すなわち、ご自分の御子を惜しまず、すべての人のために十字架に渡してくださった。それにより、ご自身の愛を明らかにされた(ローマ 5:8)。このような神の愛を本当に悟ったら、神を愛さずにはい

られないし、神のみことばに聞き従わずにはいられない。

聖霊を受けて神の子どもとされた人々は、すべての罪を贖ってくださったその大きい愛に感謝して、神のみことばに聞き従おうとする。それで、神の愛を悟れば悟るほど、神に感謝するようになる。そして、まことの感謝を感じるほど、神のみことばに喜んで聞き従うようになるのだ。

神はこのような従順を喜んで受けられ、その人を愛してくださる。聖霊を受けたけれど、信仰が弱い人々の中には、聞き従おうとする心はあるものの、神を知る前に作られた自分のはかりごとや思弁が残っているので、行いで従えないことがある。このような時も、神は聞き従おうとする心は喜ばれる。このような人は、さらに祈り求めて霊的に成長することと合せて、真理にあって聞き従えるように努力しなければならない。

### 3) きよい生き方をしようとする

〈第一ヨハネ5:18〉に「神によって生まれた者はだれも罪を犯さないことを、私たちは知っています。神から生まれた方が彼を守っていてくださるので、悪い者は彼に触れることができないのです。」とある。聖霊を受けて新しく生まれた人は、聖霊が心のうちに住んでおられるので、罪を嫌って悪を憎み、善の中に、光の中にとどまろうと努力する。それで、主のきよい姿に似せられていくので、神は罪がないほど、悪い者、すなわち、敵である悪魔が触れることができないように守ってくださる。

それでは、「罪」とは何だろうか？ 〈第一ヨハネ3:4〉に「罪を犯している者はみな、不法を行っているのです。罪とは律法に逆らうことなのです。」とある。国にも法があり、霊である神にあっても霊の世界の法がある。それが律法である。その律法に逆らうことが罪である。永遠に変わらない神のみことば、すなわち、真理に逆らう行いをすれば、これは不法を行ったことで、罪を犯したことであるから、神は守ってくださらない。

罪は大きく、「肉的なこと」と「肉の行い」に分けられる。〈ローマ8:5〉に「肉に従う者は肉的なことをもっぱら考えますが、御霊に従う者は御霊に属することをひたすら考えます。」とある。「肉的なこと」とは、そねみ、ねたみ、憎しみ、情欲など、まだ罪を直接行ってはいないが、行いを引き起こす属性を意味する。

このような「肉的なこと」が行いとして現れるとき、これが「肉の行い」になる。〈ガラテヤ5:19-21〉を見れば、肉の行いとは、不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酪酊、遊興などであり、こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません、とある。このように肉の行いをすることが、つまり不法を行ったことであり、罪を犯したことである。心をご覧になる神は、直接行いとして現れる肉の行いだけでなく、自分の中に潜在している肉的なこともみな罪だと言われ、悪はどんな悪でも避けなさい(第一テサロニケ5:22)と言われている。

御霊によって新しく生まれる前は、御霊に導かれないので、肉の願いに従って罪の実、悪の実を結ぶ。しかし、御霊によって新しく生まれた人々は御霊の願いに従うので、不法を行うとき、御霊のうめきを聞いて悟り、真理を行ってきよい生き方をしようとするようになるのである。

#### 4) 信仰の兄弟を深く愛し始める

〈第一ヨハネ 4:20〉に「神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。」とある。御霊によって新しく生まれた人は、神から生まれた人々が兄弟姉妹であることがわかり、愛するようになる。神を愛するので、主のからだである教会を愛して、牧者と兄弟たちを愛して仕えることに努めるようになるのである。

#### 5) 信仰によって世に打ち勝ちながら生きていくようになる

〈第一ヨハネ 5:4〉に「なぜなら、神によって生まれた者はみな、世に勝つからです。私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です。」とある。聖霊を受けて、神の子どもとされる特権を得て、毎日御霊によって霊を生んでいくようになれば、霊の信仰を持つようになる。そして、聖霊に助けられて、天国を望みながら、罪と不法と不義を行うようにさせる世と友にならず、神のみこころに従って生きていくようになる。これがすなわち、世に勝たれたイエス・キリストを信じる信仰によって真理を行うことであり、信仰によって世に打ち勝って生きていくことである。そして、聖霊を受けた者の証拠になるのである。

#### 6) 救いの確信が与えられる

イエス・キリストが神の御子と信じる者は、このあかしを自分の心の中に持っている(第一ヨハネ 5:6、5:10)。これが聖霊を受けた証拠である。主の肉を食べて、その血を飲むことによって、神のみことばを守り行うようになると、信仰と天国への望みと確信を持つようになる。そして、主がともにおられる証拠が現れるのを見て、救いの確信を持つようになる。信仰生活をいくら長くしたとしても、聖霊を受けていない人は救いの確信がない。しかし、初心の者であっても、聖霊を心に証印として受ければ、救いの確信が与えられるのである。

#### 7) 祈りに答えられるという確信が与えられる

〈第一ヨハネ 5:15〉に「私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでになえられたと知るので。」とある。私たちが聖霊を受けて神の子どもとされれば、神が自分の父であることを知るので、子どもとして当然、父に求めるようになる。そして、それに答えてくださることを信じるようになる。兄弟を愛して、戒めを守りながら、救いの確信を持って、神に受け入れられるとおりに求めさえすれば、神はいつでも必要に応じてあふれるように答えてくださることを知っている。これは聖霊が悟らせてくださるからである。

#### 8) 神第一主義で生きていくようになる

私たちのためにひとり子を与えるまで愛してくださった神のみこころを悟ると、その時からは神のみこころに従って、神第一主義で生きていくようになる。すなわち、嘘をついていた人が嘘をつかない人に、愛せなかった人が愛する人に、平和をつくれなかった人が平和をつくる人になる。また、暗やみから光の中に出てきて、神が喜ばれる真理の道に従っ

て、神が願われる生き方に変えられるようになる。これが聖霊を受けた証拠になる。

## 第5章

### 御霊の賜物

#### 1. 御霊の現れであり、益となる御霊の賜物

聖霊を受けた神の子どもが熱心に祈って、御霊の願いに従っていくと、聖霊に満たされるだけでなく、御霊の賜物が現れるようになる。聖書で「賜物」とは、神の愛のうちになされる特別な働きを意味する。すなわち、神の恵みによって、信仰の聖徒たちに現れるいろいろな働きを賜物という。

〈第一コリント 12:4-7〉に「さて、賜物にはいろいろの種類がありますが、御霊は同じ御霊です。奉仕にはいろいろの種類がありますが、主は同じ主です。働きにはいろいろの種類がありますが、神はすべての人の中ですべての働きをなさる同じ神です。しかし、みなさんの益となるために、おのおのに御霊の現れが与えられているのです。」とある。だから、私たちは御霊の賜物が神の下さる賜物であることを知って、神の国にとって益となるために用いなければならない。

また、〈第一コリント 12:31〉では「あなたがたは、よりすぐれた賜物を熱心に求めなさい。また私は、さらにまさる道を示してあげましょう。」と勧め、〈第一コリント 7:7〉では「私の願うところは、すべての人が私のものであることです。しかし、ひとりひとり神から与えられたそれぞれの賜物を持っているので、人それぞれに行き方があります。」とある。

したがって、私たちはよりすぐれた賜物を熱心に求めるが、各自に神が与えられた賜物を発見して、良い管理者として、ただ神のみこころのとおり活用しなければならない。〈ローマ 12:6-8〉に「私たちは、与えられた恵みに従って、異なった賜物を持っているので、もしそれが預言であれば、その信仰に応じて預言しなさい。奉仕であれば奉仕し、教える人であれば教えなさい。勧めをする人であれば勧め、分け与える人は惜しまずに分け与え、指導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は喜んでそれをしなさい。」とあり、〈第一ペテロ 4:10〉には「それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。」とあるからである。

このように、御霊の賜物は益となり、神のみこころを成し遂げるために神の恵みによって施された神の賜物である。

#### 2. いろいろな御霊の賜物

〈第一コリント 12:7-11〉を見れば「しかし、みなさんの益となるために、おのおのに御霊の現れが与えられているのです。ある人には御霊によって知恵のことばが与えられ、ほかの人には同じ御霊にかなう知識のことばが与えられ、またある人には同じ御霊による信仰が与えられ、ある人には同一の御霊によって、いやしの賜物が与えられ、ある人には奇蹟を行う力、ある人には預言、ある人には霊を見分ける力、ある人には異言、ある人には異言



を解き明かす力が与えられています。しかし、同一の御霊がこれらすべてのことをなさるのであって、みこころのままに、おのおのにそれぞれの賜物を分け与えてくださるのです。」とある。

このように、同一の御霊がいろいろな賜物を現されるのは、私たちに益を与えるためである。それでは、いろいろな御霊の賜物のうち、特に賜物の章と呼ばれる〈第一コリント12章〉に記された賜物について、具体的に調べてみよう。

### 1) 知恵のことば

知恵のことばとは、神のみことばを聞いて賢く用いて、いのちを与えて信仰を植えつけ、永遠のいのちの道に導く賜物である。知恵のことばが与えられた人は、自分が話すのではなく、聖霊がされるので、相手の心を変えさせて力と希望を与え、また、喜びと感謝を与えて、世に打ち勝っていくように助ける。

したがって、教える務めを受けた人は、特に知恵のことばが与えられなければならない。心の中にある真理に逆らうものを捨てて聖められるほど、天から知恵が与えられる。したがって、熱心に罪と戦って捨て、霊の愛を実践しながら、知恵のことばで教えていけば、多くの魂を正しく顧みる者になれる。

### 2) 知識のことば

生まれたばかりの赤ちゃんには脳細胞があるだけで、知識というものがない。しかし、育ちながら両親と環境を通して見て、聞いて、学んだことが脳細胞に入力され、知識が形成される。だから、このような知識の中には、神がご覧になって正しいものもあるが、正しくないものもある。

知識のことばとは、文字で記された神のみことばを霊的に完全に理解してその意味を正しく把握し、霊の世界の法則を正しく悟り、父なる神の心を知って心に糧としたことそのものを言う。しかし、神のみことばは聖霊に動かされて記されたものである(第二ペテロ1:21)。だから、聖霊に助けられなければ、悟ることもできないし、糧とすることもできない。

したがって、私たちが知識のことばで武装するには、聖霊に助けられて霊の目が開かれなければならない。もし霊の目が開かれなければ、神のみことばを文字的に理解できただけで、霊的にはまことの意味が悟れないからだ。一方、霊の目が開かれて、神のみことばを霊的に武装すれば、御霊に導かれる次元に入るようになる。

したがって、神のみことばを聖霊に助けられて正しく悟って糧とし、そのまま行いながら教えると、これは生きていて力がある。これが、知識のことばが与えられたということである。

### 3) 信仰

信仰は自分では持てないものであり、神が与えられる賜物である。信仰には、神のみことばを聞いて知っている「知識的な信仰」があり、神が与えられる「霊の信仰」がある。霊の信仰があつてこそ神と交わり、答えられる。このような信仰が与えられるためには、

知識的に知っている神のみことばを続けて行いで表さなければならない。

そのためには祈って聖霊に満され、これまでに入力されたものの中から真理に逆らうものを一つ一つ引き抜いて捨てていくと同時に、真理を入力させて心に植えつけ、真理の中を歩んでいかなければならない。すると神がその分、上から下さる霊の信仰をいただくことができる。

#### 4) いやしの賜物

いやしの賜物とは、病原菌によってからだの機能がうまく働かなかったり苦しんだりしているとき、祈ってその病気が治るようにする賜物である。神のみことばを知っている人ならば、真理を取り違えて知っていて罪を犯したか、真理を知りながらも行えなかったから、病気が臨んだのである(出エジプト 15:26)。

こういう人は悔い改めて信仰で祈ったり、いやしの賜物を受けた人の祈りを受けたりすれば、病気が治る。その他にも、義人の祈りは働くと、大きな力があるので、愛の祈りによって病気が治ったりもする。

#### 5) 奇蹟を行う力

奇蹟を行う力とは、病気をいやす賜物とは違うものであり、人としてはできないことを行うことである。たとえば、医学的には治療不可能な先天的な病気やからだの不自由な人をいやしたり、性格や性分を変えたり、天気を動かす権勢がこれに属する。

聖書に出てくるモーセ、ヨハネ、ヤコブ、ペテロ、パウロが神の人として用いられる前は、火のような性格の持ち主だったが、結局、愛の使徒に変えられ、多くの魂を救いに導いた。これは、奇蹟を行う力が与えられたからである。

神を愛すれば魂を愛するようになり、魂を救うために力を受けて働きたいという熱い心になるので、火のように祈るようになる。このような祈りを積むと、奇蹟を行う力が与えられる。

#### 6) 預言

預言とは、神が人を御霊に感じさせて、今後の事を知らせるようにするものであり、それは徳を高めるためのものである。それで、〈第一コリント 14:1, 3〉に「愛を追い求めなさい。また、御霊の賜物、特に預言することを熱心に求めなさい。…ところが預言する者は、徳を高め、勧めをなし、慰めを与えるために、人に向かって話します。」と書いてあるのだ。

預言は、どうしても必要なとき、神が御霊に感じさせてするのであって、いつでも預言するように働かれない。また、みことばどおり生きて聖められ、祈りを多くする者に預言の賜物を与えて、預言するようにされる。

神はみことばどおり生きられない人に預言の賜物を与えて、今後の事を知らせることはないことを知って、決して惑わされてはならない。

## 7) 霊を見分ける力

霊は、神の霊と世の霊に分けられる。それで、霊を見分ける力とは、御霊に属することと肉に属すること、聖霊の声と肉の思い、善と悪、まことと偽り、義と不義などを神のみこころに従って見分ける力のことである。したがって、霊を見分けるには、神のみこころを知らなければならない。これは自分でするのではなく、神の力にあって神の御霊に導かれてこそ完全なものになるのである。

私たちが霊を見分ける力を受けるには、すべての真理に逆らう思いと思弁などを打ち砕き、すべてのはかりごとをとりこにしてキリストに服従させなければならない。服従が完全になされたとき、神のみこころを悟って、霊の世界の法則を知るようになり、霊を見分ける力が与えられるのである。

それでは、真理の霊と偽りの霊は、どのように見分けられるだろうか？ 主は終わりの時について、「人に惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名のる者が大ぜい現われ、『私こそキリストだ。』と言って、多くの人を惑わすでしょう。」(マタイ 24:4-5)と言われた。神の子どもは真理の霊と偽りの霊を見分けることによって惑わされないで、ただ真理の霊に従って、光の中を歩む者になるべきである。

〈第一ヨハネ 4:6〉に「私たちは神から出た者です。神を知っている者は、私たちの言うことに耳を傾け、神から出ていない者は、私たちの言うことに耳を貸しません。私たちはこれで真理の霊と偽りの霊とを見分けます。」とあるので、私たちは真理の霊と偽りの霊が簡単に見分けられる。

神から出た者は真理の言葉を聞くが、神から出ていない者は真理の言葉を聞かない。それゆえ、真理の言葉を聞けば真理の霊に属する者であり、真理の言葉を聞かなければ偽りの霊に属する者である。

偽りとは、本心を隠して何が真理かわからなくさせることである。偽りの霊がやってくると、自分の意志で勝てないほど、敵である悪魔が私たちを攻撃して妨げるようになる。だから、真理に堅く立ち、ただ真理の霊に従って、光の中を歩む者にならないといけない。

## 8) 異言

異言とは、聖霊を受けた人々に現れる賜物であり、霊の祈りである(第一コリント 14:14)。これは、神がすべての神の子どもに与えようと望まれる賜物であり、誰でも受けられる賜物である(第一コリント 14:5)。

それでは、異言はどのように受けられるだろうか？ 神のみことばどおり、主を呼び求めて祈れば、聖霊に満されるようになる。ほとんどこの時にいろいろな異言が与えられる。

祈りには、日常の言葉で祈る「知性の祈り」と、異言である「霊の祈り」がある。この二種類の祈りをかわるがわるするのがよい。異言は霊の祈りであり、私たちには理解できないが、たましいが幸いを得ているように霊的なことを求めるためのものであり、知性の祈りは心の願いに答えられ、実を結ぶためのものであるからだ(第一コリント 14:14-15)。

## 9) 異言を解き明かす力

異言は人に対して語るのではなく、神に向って語るものである。だから、理解できる者がいないので、異言を語る者は、それを解き明かすことができるように祈りなさい、と勧められているのである。

異言を解き明かす力は、聖霊に満されているうちに御霊に感じて、いろいろな異言を解き明かすことであり、簡単に与えられるものではない。主の心に似せられた聖潔の段階に入るか、特別な神のみこころのうちに思いを遮断できる者に与えられる賜物である。

---

以上調べたとおり、御霊の賜物は益になるものであるから、天国に国籍を持った神の民は御霊の賜物を求めなければならない。そして、神がおのおのに分け与えてくださった賜物を用いて神に栄光を帰し、多くの魂を救わなければならない。

## 第2部

### 聖霊の声を聞く方法

#### 第1章

##### 神との交わり

###### 1. 神の子どもは、聖霊の声を聞かなければならない

###### 1) ダビデの例

〈第二サムエル5:18〉以降を見ると、ダビデ王の時代にペリシテ人が来て、レファイムの谷間に展開し、イスラエルを攻撃する場面が記されている。ダビデは無計画に出て行って戦うのではなく、まず神である【主】に伺って言った。「ペリシテ人を攻めに上るべきでしょうか。彼らを私の手に渡してくださるでしょうか。」すると【主】はダビデに仰せられた。「上れ。わたしは必ず、ペリシテ人をあなたの手に渡すから。」それで、ダビデはそのおことばに頼って行き、ペリシテ人を打った。

ところが、ペリシテ人はなおもまた上って来て、レファイムの谷間に展開した。以前と同じ場所であり、一度戦ったことのある相手だが、ダビデは今回も【主】に伺った。今度は違う方法を教えてください。「上って行くな。彼らのうしろに回って行き、バルサム樹の林の前から彼らに向かえ。バルサム樹の林の上から行進の音が聞こえたら、そのとき、あなたは攻め上れ。そのとき、【主】はすでに、ペリシテ人の陣営を打つために、あなたより先に出ているから。」と仰せられたのだ。すなわち、正面から立ち向かって上っていかないで、敵軍の後に待ち伏せして奇襲すれば勝利できる、ということである。

そのおことばを聞いてそのまま従ったダビデは、今回も大きい勝利を得た。ダビデは、このペリシテとの戦いだけでそうしたのではなく、何をしようか、「これはどうなるでしょうか？ 今度は私がどうしたらよろしいでしょうか？」と【主】に伺って、それに従っていった。だから、たとえ、死の陰の谷を歩くことがあっても、彼はわざわざを恐れなかったし、いつも栄える道に導かれたのだ。

私たちも、ダビデ王のように何をすることも神に伺って、その答を聞いて行えるなら、どれほど良いだろう。そうできるなら、毎日信仰がすみやかに成長して、家庭の幸せと平和、事業の場と職場の成功も実現できないわけがない。

しかも主のしもべや働き人であるなら、よりいっそう神のみこころを聞いて従って行ってこそ、悪い霊どもに立ち向かう霊の戦いにおいて勝利できる。それでこそ神の御霊に導かれて、数えきれない魂を救い、すべてのことに豊かな実を結び、神に栄光をお帰しすることができる。

## 2) 神の子どもは聖霊の声を聞かなければならない

ある人は、神のみこころに導かれることを信仰がとても立派な人に与えられた特権のように誤解したりする。しかし、その方法を悟って聞き従えさえすれば、初心の者にとっても非常にやさしいことなのだ。

もちろん、私たちの信仰が成長するほど、もっと正確で細やかに聖霊の声が深く聞けるのであり、神と顔と顔を合わせてその御声を聞くことは、アブラハムやモーセのように、全き信仰に至って初めてできることである。しかし、神に直接お目にかかって御声が聞けなくても、救われた子どもたちの心の中には、神の御霊である聖霊がおられて、この聖霊の声は、たとえ初心の者であっても、十分に聞ける。

〈第一コリント2:10-11〉に「神はこれを、御霊によって私たちに啓示されたのです。御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばれるからです。いったい、人の心のことは、その人のうちにある霊のほかには、だれが知っているでしょう。同じように、神のみこころのことは、神の御霊のほかにはだれも知りません。」とある。

ところが、あまりにも多くの人が聖霊を受けた後も、「どうすれば聖霊の声が聞けるでしょうか?」と質問して、聖霊の声を聞いて御霊に導かれる方法について知りたがる。聖書の教えを通してその方法を悟って、従って行いさえすれば、聖霊の声を聞けない人はひとりもないだろう。また、その声に従っていきさえすれば、神の御霊に導かれて、祝福されなかったり、栄えなかったりする人もひとりもないだろう。

私たちが神を信じる子どもとして、神と交わることはあまりにも自然であり、当然すべきことである。子どもたちが父親と交わることはおかしいのではなく、交われないことがむしろおかしい。神と交われないなら、すべてのことに自分の思い、自分の知識と力に頼ってせざるを得ない。

事業をしても、自分の知恵に頼ってする人は、自分の能力以上は得にくいし、時には予想しなかった災いに遭ったり、悪い人の策略にはまって損をしたりする。

しかし、神と交わる人は、すべてを知っておられ、守ってくださる神に導かれて、豊かに祝福されることが出来る。悪い人がだまそうとしても、すでに心に働きかけられているので、だまされることもない。個人のことだけでなく、神の国を実現することは、霊的な働きなので、さらに神と交わりながら進められなければならない。

神と交わる人が結ぶ実と交われない人が結ぶ実とは、天と地のような差がある。たとえば、聖徒を訪問しても、神と交わる人は「この家庭にふさわしいメッセージはこれだろう」と働きかけられてする。一方、神と交われない人は自分が知っている状況に合わせてメッセージを考え出す。「この家は夫婦仲が良くないので、愛し合いなさいというメッセージを伝えよう。」「この人は熱心な働き人なので、ただ祝福のメッセージでいいだろう。」このように、自分が知っている範囲でメッセージを伝える。

しかし、人間の思いで「愛し合いなさい」というメッセージを伝えるからといって、憎み合っていた夫婦が愛するようになるのでもなく、うわべでは熱心な働き人であっても、その人に本当に必要なメッセージは神だけがご存じである。神と交わる時でこそ、それぞ

れに必要なメッセージを知るようになり、それを伝えてこそみことばの権威が伴って、たましいを砕いて罪を告白する恵みとともに、相手の霊とたましいを変えさせて、祝福が臨むようにするなど、霊的な訪問ができる。

このように御霊に導かれてこそ任された分野に実を結んで、リバイバルすることができる。もちろん、神と交われない人も、相手を良い言葉で慰めて、肉の方法でよくしてあげ、しばらくはリバイバルしているように見えることはある。しかし、このように肉の方法で顧みられた人は、後で何かの試練にあったり、あるいは自分によくしてくれた人が他に移ったりすると、まるで嵐に遭って腐った果物が落ちてしまうように、ばらばらと離れて行く。これは、神の御前で何の報いにもならない。

したがって、神を信じる子どもなら、また、神の働きをする主のしもべや働き人なら、切に神と交わることを求めるべきであろう。〈ローマ8:14-15〉に「神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです。あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、「アバ、父」と呼びます。」とある。神を「アバ、父」と呼べる子どもとは、まさに神の御霊に導かれる人なのである。聖書を読んでも、昔の信仰の人々はみな神と深く交わって、神の御霊に導かれたことがわかる。

### 3) 神と交わることの重要性

聖霊の声を聞いて御霊に導かれることは、聖霊を受けた人ならば、いくら初心の者でも当然できて、すべきことである。もちろん、聖霊を受けたからといって、みな聖霊の声を聞くのではない。聖霊の声を聞くためには、まず自分の心を聖霊が働くことがおできになる心に変えなければならない。「聖霊が働くことがおできになる心」とは、「真理の心」のことである。神は光であり、善と愛であり、真理そのものであるので、神の御霊である聖霊も、真理の心を通してだけ働くことがおできになる。

人の心の中に真理に逆らうものがぎっしりあって、真理がない時は、聖霊の声が聞けない。したがって、心から聖霊の声を聞くためには、まず心を真理で満たさなければならない。心に真理が臨んだほど、聖霊の声を聞くことができるからだ。

反対に、心に真理がなく、代わりに真理に逆らうものがぎっしりある時は、どんな声を聞くだろうか？ 思いを通して真理に逆らう心が動くようにさせるのは、神に立ち向かうサタンである。心に不正と不法があって、真理に逆らうものでぎっしり満ちているほど、その人は聖霊の声ではなく、サタンの声を聞いて働きかけられて、悪い行いをするようになり、栄える道でなく、死の道に向かうようになる。

ここで悟るべきことは、聖霊の声を聞くためには二つの作業が同時に行われなければならないということだ。その第一は、聖霊の声が聞けるように心に真理を満たさなければならないこと、第二は、聖霊の声が聞けないようにしてサタンのしわざを受ける真理に逆らう思い、すなわち、肉の思いを捨てなければならないことである。

また、この肉の思いが働く原因は、心の中に真理に逆らう要素があるからなので、肉の思いを捨てるためには、心にある真理に逆らうもの自体を捨てなければならない。

もし子どもの耳が聞こえなくて、親が「愛している」と言ってもわからないし、子どもが危険な状況に置かれたとき、大声で呼んでも振り返ることができないならば、どれほどもどかしいだろうか。耳の聞けない子を持った親は何としてでも子どもの耳を治療しようと努力するが、医学的な限界にぶつかって良い結果が得られないと、親にはそれが一生の重荷になるのが見られる。

父なる神も同じである。神を信じていると言っても、聖霊の声が聞けないなら、その人は霊的に耳の聞けない子である。父なる神がいくら「愛している」と言われ、祝福の道を教えられても聞けないのだから、神はどれほどもどかしく思われるだろうか。だから、本当に神を愛するなら、何としてでも聖霊の声を聞いて御霊に導かれ、神と明らかに交わり、愛を分かち合わなければならない。

## 2. 神と交わる方法

それでは、神と交わる方法には、どんなものがあるだろうか？

### 1) 直接声を聞く場合（神の声、主の声、御使いの声）

これには、神の声、主の声を直接聞く場合があり、御使いの声を聞く場合もある。聖書には、アブラハムやモーセ、預言者サムエルが直接神の声を聞いて、答える場面がある。また、使徒パウロはダマスコの近くまで来たとき、主の声を聞いて回心する体験をした。そして、使徒ヨハネは黙示録を記しながら主の声を聞いて、「大水の音のよう」と表現した。おとめマリヤが聖霊によってイエス様をみごもった時は、直接御使いに会って、御使いの声を聞いた。その他にも、聖書のあちこちには神の人々が霊の世界の声を聞く場面が数えきれないほどある。

ここで筆者の証しを紹介する。

私にも数回、神の声を聞かせてくださったことがある。たとえば、私を主のしもべとして召された時も、直接澄んでとどろきわたる神の声を聞かせてくださった。また、心を尽くして主を呼び求めて祈ることが神のみこころだということを教えてくださった時は、「ルカ 22 章 44 節を見なさい」という主の声を聞かせてくださった。

このような神の声、主の声や御使いの声は、心の中から聞こえてくるのではなく、外部から聞こえてくる。この時、注意することがある。ある人は、悪い霊のしわざを受けているのに、神の言われる内容が自分の耳元でささやかれるように聞こえてくると言ったりする。神は声を聞かせてくださるとき、ささやかれる方ではない。神の声は澄んでとどろきわたり、大水のようである。耳にささやくのは悪い霊どもがすることだ。こういう悪い霊の声と神に属する霊の世界の声はよく聞き分けなければならない。

神の声や主の声、御使いの声を聞くのは、聖徒によくあることではない。特に神の声や主の声は誰でも聞けるのではなく、それだけ神の御前にふさわしい人に、時に応じて聞かせてくださるものだからだ。



ある人は聖霊の声を聞いても、「神の声を聞いた」、あるいは「主の声を聞いた」と言う。しかし、こういう表現は正確ではない。神が私たちと交わるために最も一般的に使われる方法は、まさに聖霊の声を通して神のみこころを悟らせることである。

神の声や主の声などが外部から聞こえてくるとすれば、聖霊の声は心の中から聞こえてくる。私たちの心を聖殿として住まわれる聖霊が心の中から語られるのである。神の声や主の声のように、何かの声として聞こえてくるのではないが、正確に聞くことさえできるなら、聖霊の声のように細やかで確かな声もないのだ。

## 2) 聖霊の声を聞く場合

このような聖霊の声は、大きく二つに分けられる。

### 第一は、神のみことばをもって悟りを与えてくださる。

たとえば、誰かとぶつかって憎む心になったなら、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」というみことばを思い起こさせてくださる。このように、みことばをもって兄弟を憎むことが過ちであると悟らせて、神のみこころのとおり愛するように導かれるのが、まさに聖霊の声である。

### 第二、聖霊が心に働きかけられる。

ある事をすべきかすべきでないか、どんな方法で、いつすべきなのか、心に働きかけられるのだ。

イエス様がこの地上に来られて福音を伝えられたとき、時にはユダヤ人の前に現れて、時には現れないで隠れてなされた。これらのことも、イエス様は神の御霊に 100 パーセント導かれて行われたので、それによって神の摂理を全うすることがおできになったのだ。

聖霊に働きかけられた証しはたびたび聞く。たとえば、バス停で、待っていたバスが来たのに、突然どうしてもそのバスに乗りたくなくなって乗らなかった。それから、次に来たバスに乗って行ったが、しばらくして見たら、前のバスが大きい事故に遭っていたというのだ。

聖霊は全知全能の神の御霊なので、前のバスがどうなるのかをあらかじめ知っておられ、愛する子どもがそのバスに乗らないように、心に働きかけてくださったのである。このように、すべてを知っておられる聖霊が将来起きる事故や困難を避けて、栄える道に行けるように心に働きかけられるのである。

## 3) 御霊に感じて声を聞く場合

その他にも、神と交わる方法には、御霊に感じて声を聞く場合がある。これは直接聞こえてくる場合とはちょっと違う。しかし、その内容がまるで声を直接聞いているように、はっきり心に伝えられるので、「声」と表現するのだ。

御霊に感じて声によって示される内容は非常に多様である。イザヤ、エゼキエル、ホセアなど、神の預言者が啓示を受けて記した内容も、【主】の御霊によって声を聞いたものである。

以下は筆者の証しである。

私が体験したことのいくつかを申し上げるなら、韓国で1987年にあった6.29宣言など、将来のことについて神様が教えてくださるとき、御霊に感じているうちにその内容を教えてくださった。ある時は、翌週の献金の総額を教えてください、また、ある人が来て教会に登録することを前もって知らせてくださったりしたこともある。そのたびに私が講壇で伝えたり、周りの働き人に言ったら、必ずそのとおりになるのが見られた。

## 第2章

### 聖霊の声を聞くための心

#### 1. 真理の心と真理に逆らう心

これから、聖霊の声が聞けるように、心に真理を満たす方法と、真理に逆らうものを捨てて肉の思いを遮る方法について、具体的に調べてみよう。

聖霊の声は耳で聞く物理的な声でなく、心で聞く声である。心の中におられる聖霊が私たちの心に働きかけて、神のみこころを悟らせるのだ。〈第一コリント 3:16〉に「あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。」とある。

私たちが悔い改めて、イエス・キリストを救い主として受け入れれば、神は神の御霊である聖霊を私たちの心の中に賜物として下さる。ところが、私たちが聖霊を受けても、聖霊は私たちの心の中に真理がある分だけ働くことがおできになる。つまり、心に 50%ぐらい真理に変えられた人は 50%ぐらい聖霊の声が聞けて、主に完全に似せられて、完全な真理の人になったとすれば、聖霊の声も 100%聞けるのだ。

したがって、私たちが心で聖霊の声を聞くには、まず心から真理に逆らうものを捨てて、真理で満たさなければならない。心に真理に逆らうものが多い人は、聖霊の声を聞く前に肉の思いが働いて、サタンの声を聞いてサタンのしわざに従うので、御霊に導かれることができない。

たとえば、誰かが自分を誤解して、ののしったとしよう。もし、心の憎しみを捨てて、「理解しなさい、赦しなさい、愛しなさい」このような神のみことばを心に満たしておいたなら、聖霊はその真理を通して声を聞かせてくださる。「あの人には、それほどの理由があるだろう。」または「やわらかく話をして、誤解を解こう。」このように声を聞かせてくださり、それに従って行えるように助けてくださる。このように聖霊の働きに従って善を行う時は、相手も感動して誤解が解け、互いに平和をつくることができる。

しかし、もしまだ心に真理に逆らうもののほうが多くて、愛で満たされているより、憎しみや傷つきやすい感情、憤りなどのほうがはるかに多い人は、聖霊の声がほとんど聞けない。聖霊の声を聞くよりは、「こんなに礼儀に反することをするのか。赦せない」と思ったり、「放っておけば私を見下げるはずだから、二度とこうしないようにきっぱり言っておこう」という悪い思いが先に働く。

ひょっとして真理をもって教える聖霊の声を聞いても、悪い思いが聖霊の声を圧倒してしまうので、聞き従えない。心に真理と真理に逆らうものが 50 対 50 ぐらいの割合の時は、二つの声をほとんど同じ強さで聞く。「愛して赦しなさい。理解しなさい」という聖霊の声と、争って立ち向かわせるサタンのしわざを同時に受けるのだ。

こういう人は二つの声の間で葛藤して、ある時は聖霊の声に聞き従ったりするが、ある時はサタンのしわざを受けてしまったりもする。だから、聖霊の声を聞いたのに、これが聖霊の声なのか、でなければ自分の思いなのか、よく聞き分けられない場合がある。

## 2. 心の割礼の過程

サタンの声を遮断して聖霊の声を聞くためには、まず心に真理を満たして、真理に逆らうものを捨てていかなければならない、と述べた。そのためにはどうしたらよいだろうか？この作業はとても簡単だ。私たちが聞いて学ぶ神のみことばを心に留めて、それに聞き従えばよい。

聖書を読むと、何々を「しなさい」「守りなさい」という数多くのみことばがある。このみことばを守り行うことがすなわち、真理で心を満たす作業である。また、何々を「してはならない」「捨てなさい」というみことばを守り行うことが、真理に逆らうものを捨てていく方法である。つまり、「愛しなさい」とあるので、憎んで気まずく思ってたんでいた心を変えて、愛で満たし、「へりくだりなさい」とあるので、高ぶって高められたがっていた心を、低くなって人に仕えて献身する心に変えればよい。

憤りと姦淫と欲などがあっても、「悪はどんな悪でも避けなさい」と書いてあるので、それに従って捨てればよい。そして、「祈りなさい、感謝しなさい、喜びなさい」このようなみことばを聞いて学び、すぐ心に留めて従うなら、心にあった真理に逆らうものが捨てられて、その代わりに真理で満たされる。

ところが、ここで大切なのは、真理をいくらたくさん知っていて、みことばをすらすら暗唱するからといって、それだけで真理が満たされるのではないということである。そのみことばを実際に行わなければならないのである。いくら長い間信仰生活をして、務めを持って使命を果たして、神のみことばをたくさん知っていても、そのみことばを守り行わなかった人の心には、相変わらず真理が満たされていないのだし、当然聖霊の声が聞けない。反対に、初心の者であっても、神を愛するので、熱心に真理を行おうと努力する時は、聖霊の声も確かに聞いて、霊的な体験をしていける。

たとえを挙げるなら、10年間あらゆる音楽理論を勉強したが、実際はピアノを演奏したことがない人よりは、理論的にはよく知らないけれど、たった1年でもピアノを直接引いたことのある人のほうが、実際の演奏は上手なのだ。

神のみことばを心に留めて、真理で行えば行うほど、その心からは真理に逆らうものが捨てられて、真理で満たされていき、それだけ霊の信仰が大きくなっていく。ところが、このように学んだみことばに従って真理で心を満たそうとすると、ある瞬間から心で葛藤が始まる。

真理を聞いて学んだとおりに従いさえすればよいのに、ある瞬間、従えずに悩むようになる。肉の行い、肉的なことを考える真理に逆らう心が簡単に捨てられずに、御霊の願い

に従おうとする心と戦うので、悩むようになるのだ。

初めて聖霊を受けて神の愛を体験した頃は、まるで乳飲み子に必要なすべてを親が前もって備えてくれるように、ただ神の恵みで満たされているので、求めるものは何でもすぐいただけるし、つらさは知らない。罪と戦って捨てるべきという概念もまだなく、ひたすら満たされているだけだ。

しかし、幼子が育つにつれて教育を受けて、自分がすべきことをしなければならないように、ある瞬間からは、神の恵みが自然に臨むのではなく、自分の努力と行いをもって神の恵みを引き下ろさなければならない時期が来る。そうしてはじめて神によって強くされて、十分に信仰の戦士になれるのだ。

親が子どもを愛するからといって、指一本動かさないように過保護に育てれば、かえってその子にとって悪いように、信仰にあっても、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためには、自分で越えなければならない段階がある。それで、それからは自分の努力で真理をわきまえ知って、真理に逆らうものとの戦いが始まるので、信仰生活が難しいと感じる。

たとえば憤りをまだ捨てなかった人が、何かのことで怒りそうな状況でも、御霊の願いに従おうとギュッと抑えて我慢するなら、どれほど大変だろうか？ はらわたが煮えくり返るのを我慢するが、結局、カッと怒ってしまうと、少しはすっきりする。けれども、心の中からすぐ御霊のうめきが聞こえてくる。

「もうちょっと我慢したらよかったのに、どうしてあんなことをしたんだろう」と神の御前で申し訳ないので、恵みに満たされなくなり、しばらく悩んだあげく、たましいを砕いて罪を告白してから、また満たされるようになる。このようにたましいを砕いて罪を告白するなら、次はそうしてはならないのに、似た状況になれば再びはらわたが煮えくり返って憤ってしまう。すると前よりもっと悩むようになり、心が痛むのである。

### 3. 心の霊的な戦いの絶頂

このような戦いが絶頂に達して、心が一番悩む時期は、まさに真理の心と真理に逆らう心が同じくらいの勢力になっている時だ。人が戦う時も、力の差が大きいふたりが戦う時は、力の強いほうの一方的な勝利ですぐ終わってしまう。

しかし、力が同じくらいのふたりが戦えば、激しく打っては打ち返される乱闘劇になる。このように、真理と真理に逆らうものうち、どちらか一方の心が確かな時は、心の葛藤もそんなに大きくない。二つの勢力が同じくらいだから、聖霊の声のとおり真理に従おうか、サタンがしわざするとおり肉の願いに従おうかと、ひどく葛藤するのである。

<ローマ 7:24>に「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」というみことばが、まさにこのように心の戦いが激しい状態を表している。この水準にいる人は聖霊の声を聞いても「これが聖霊の声なのか、でなければ自分の思いなのか」よく聞き分けられない時が多い。

もちろん、自分をつらくさせる人に対するとき、「愛しなさい、赦しなさい」このような声が聞こえてくるなら、確かな真理のみことばなので、混同することはない。しかし、これよりわかりにくい状況では、自分が聞いたのが聖霊の声だと思ったのに、結果を見ると自分の思いだったとか、自分の思いと思っていたのに、実は聖霊の声だったとか、このように混同することがよくある。

たとえば、ある区域長が、自分の区域の会員を訪問しなければならない、という声が何度も聞こえてくるのに、「その人は熱心に奉仕もして、ちゃんと教会に来ているから」と無視した。しかし、ある日からその会員の姿が突然見えなくなった。うわべでは表わさなかったけれど、ずっと恵みに満たされなくなっていて、ついにそれが現れてしまったのに、区域長が聖霊の声を自分の思いと誤解して、訪問すべき時期をのがしたのである。

反対に、ある人は「聖霊の声を聞いた」と言うけれど、その人の話を聞いてみると、全然真理でないことを言う人もいる。自分の思いを聖霊の声だと思ったのである。いろいろな体験を通して聞き分ける力を得て、心に真理を満たし続ければ、だんだん正確に聖霊の声を聞き分けるようになり、これ以上混乱しないようになる。

ある人は、このように心の中で真理に逆らうものと真理が対等な状態の苦しみに勝てなくて、そのままあきらめてしまう人もいる。礼拝時間には、いつも講壇で「罪を捨てなければならない」「光の中を歩まなければならない」と教えているので、みことばに心を刺されるのがいやで教会を離れてしまったりする。気楽に信仰生活できる所を探して行ったり、あるいは完全に世に向かって、全く神を離れてしまう。

しかし、いくらつらく感じられても、真理に逆らうものを捨てる努力をあきらめてはならない。難しいからといって、真理に逆らうものを捨てるのをあきらめてしまうなら、その人は今後も聖霊の声が聞けないし、御霊に導かれることもできない。

長い間信仰生活をして、御霊の歩みに入れなくて、聖霊のみわざを現せないし、教会でかしらになって聖徒を教えても、肉の方法で導くしかないのも、霊的な実を結ぶこともできない。自分がまず真理に従って生きて、神と確かに交わって、聖霊の声を聞いて御霊に導かれる人でこそ、他の人を教える時も霊的な権威が伴って、まことのいのちを得るよう導くことができる。

#### 4. 御霊に属する心

私たちが真理に逆らうものとの戦いを続けて、心を真理で満たしたほど、信仰が成長する。それで信仰の岩に立っている人は、真理を守り行うことがそんなに難しくない。少しは真理に逆らうものが残っていても、直ちに御霊の願いに従って行うので、簡単に勝てる。

さらに、神を愛する信仰の四段階以上の人には、むしろ戒めを破ることが難しいのである。こういう段階に至るまでは、ちょっとつらくても、熱心に戦って勝ち抜いていかなければならない。このように熱心に心を真理で満たすほど、肉の思いがなくなり、聖霊の声ももっと細やかに聞くことができ、聞いた聖霊の声に従うほど、すべてのことに御霊に導

かれて栄えるようになる。

それでは、私たちが正確に聖霊の声を聞いて御霊に導かれるためには、完全に聖められて、主のように心が100%真理で満たされるまで待たなければならないだろうか？ そうではない。たとえ真理に逆らうものが少し残っていても、その心に真理のほうが多く満たされているならば、聖霊の声を聞いていくのがそんなに難しくない。真理に逆らうものが残っているほど、サタンが働こうとするが、聖霊の声を聞くと直ちに従うので、サタンの声が無視されるからだ。

たとえば、二つの放送が同時に流れている中で、一方は音が大きく、もう一方は小さいとしよう。この時、音の大きいほうの内容を聴こうと集中しているならば、小さいほうは、たとえ放送されていても、全く聞こえないはずだろう。

このように、真理が多い人には、真理が多いほど、サタンの声よりは聖霊の声がより大きく聞こえてくる。この時、聖霊の声を聞こうと努力する人ならば、かすかに残っているサタンの声にあえて耳を傾けようもしないはずなので、簡単に御霊に導かれることができる。

心をさらに真理で満たし続けていくほど、聖霊の声をもっと正確に聞くようになり、サタンのしわざはますます弱くなって結局、なくなるのである。

## 5. 心の割礼の重要性

心から真理に逆らうものを捨てて、真理を満たすことが神のみこころだと教えれば、ある者はまるでそれが間違っているように質問する。〈ローマ 3:28〉に「人が義と認められるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によるというのが、私たちの考えです。」とあるのに、「どうして罪を捨てなければならないと教えるのか？」と反問する。また、罪との戦いで苦しんでいた人の中には、このようなことを聞けば、すぐその言葉を受け入れて、それ以上罪を捨てようとする努力をしない人もいる。

しかし、よく悟らなければならない。信仰がなくて行いだけで救われる人は決していない。同じように、行いのない信仰を持った人もやはり救われず、神ともかかわりもなく、聖霊の声を聞くこともできない。

〈ヤコブ 2:26〉に「たましいを離れたからだが、死んだものであるのと同様に、行いのない信仰は、死んでいるのです。」とあり、〈ガラテヤ 5:21〉には、肉の行いをする者について、「こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。」とはっきり記されている。〈ローマ 8:13〉にも、「もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御霊によって、からだの行いを殺すなら、あなたがたは生きるのです。」とあり、〈ヘブル 12:4〉には「あなたがたはまだ、罪と戦って、血を流すまで抵抗したことがあります。」という聖徒を責めるみことばがある。その他にも、聖書のあちこちには、聖徒が必ず戒めを守って、真理を守り行わなければならないことが記されている。

ところが、多くの人がこのような神のみことばを学んで、真理のとおり生きたいと願っ

ているのに、「心は燃えていても、肉体は弱いのです」と言ったり、「いくら努力しても真理に逆らうものが捨てられない」とじれったく思ったりもする。実際、いくら願っていくら努力しても、人の力だけでは聖められることはできない。

しかし、神の力ではできるのである。主が十字架で注ぎ出された尊い血の力によって、罪人だった私たちに真理に逆らうものが捨てられる神の恵みが臨み、神の力が臨み、そして聖霊に助けられるようになった。だから、神のみこころのとおり聖められたいと心から願って、信仰によって行う人々は、十分に真理に逆らうものを捨てて聖められて、真理の人になれる。

<ヨハネ14:16-17>で、イエス様はこの地上を離れる前、弟子たちに「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。」と約束された。

父なる神のみもとに帰られたイエス様の代わりに、神は助け主の聖霊を遣わしてくださいました。聖霊はいつまでも私たちとともにおられるが、ただ真理を通してだけ働かれる、真理の御霊である。したがって、私たちが真理にとどまっている時にはじめて、聖霊に働きかけられて、力ある生き方をすることができ、多くの実を結んで神に栄光をお帰しすることができる。

このように、心から罪と悪と不正と不法など、すべての真理に逆らうものを捨てることは、人の力でできるのではない。いくら意志が強くて、心の地の良い人であっても、自分の力と努力で完全に聖められることはできない。自由意志によって自分で努力すべきだけでなく、必ず神の恵みと力、そして聖霊に助けられてこそ、罪を捨てて聖められることができるのである。

## 6. 聖潔への近道

これからこの四つが一つになって、真理に逆らうものを全部捨てて聖められる、その具体的な過程を説明しよう。

まず、神の恵みとは、全く代価なしに下さる神の賜物である。悔い改めて、罪が赦されて救われる過程も、ただ神の恵みによるものであり、祈ろうとする心や自分の中の罪を悟って捨てようとする心も、新しいエルサレムを望む心も、ただ神の恵みが臨む時にはじめて生じるのだ。恵みがあってこそ自分を発見することもでき、真理に逆らうものを捨てる心が持てて、真理に逆らうものを捨てる力も受けられる。

たいてい、信仰の初めの段階にいる人には、神が全的に恵みを注がれ、祈る力も与えて、また、罪を犯さないように聖霊に満たされるようにされる。それで、初心の者は特に難しいことなく、満たされた信仰生活をして、証しも満ちあふれる。



しかし、ある程度時が経つと、それからは自分が努力して、神によって強くされなければならない時期が来る。人としてはできないことをできるようにするのはまさに神の力なのに、もし神がただで私たちを強くしてくださるなら、サタンが訴えるようになる。「神様がそんなふうにならなくて強くなるなら、人間耕作に何の意味があって、どうしてこれが正しいと言えるのですか？」と訴えるのだ。

したがって、蒔けばその刈り取りもする霊の世界の法則に従って、人が自分を捨てて、祈りと断食など努力して、罪を捨てる力を引き下ろさなければならない。

このように努力して、神によって強くされるように助けてくださる方が、まさに聖霊である。〈ローマ 8:26〉に「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてください。」とあるように、弱い私たちが強くされるように助けてくださる。時には、自分で努力すべき量を全部満たさなかった場合にも、必要によっては、私たちがもっと頑張るべくよくやれるように力づけようと、御霊に感じて、聖霊に動かされ満たされるようにして、予測もしなかった恵みを体験させることもある。

このように自分の努力とともに、神の恵みと力、聖霊の助けが一つになり、聖められていくのだ。そのために、まずは自分の努力がとても大切である。神にすべてを任せるのではなく、自分が本当に聖められようと、努力に努力を重ねることが必要だ。

「憎しみを捨てるようにしてください。憤りを捨てるようにしてください」と口ではいくら祈っても、いざという自分には努力もしないで、相変わらず人を憎んで憤っているなら、その祈りもやはり真実ではない。本当に聖められたいと求める心で、罪を捨てようと決断して、火のように祈ると同時に、行いと真実をもって自分のからだを打ちたたいて従わせていかなければならない。

このように自分の努力と神の恵みと力、聖霊の助けが合わさって真理に逆らうものを捨てる過程は、私たちがいる城を包囲して、敵軍を全滅させる過程にたとえられる。この真理に逆らう城を攻撃しようと決心したら、まず城の中の敵軍を助けにくる支援軍を遮断しなければならない。支援軍が城の中に必要な物資と兵士を供給し続けるなら、外から包囲して攻撃する労苦が無駄になるので、まず支援軍を遮断して、城の中にいる敵軍を攻撃して、せん滅しなければならない。

この支援軍を防ぐ作業が、まさに目の欲を遮ることだ。〈第一ヨハネ 2:15-16〉に「世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。」とある。

ここで「目の欲」とは、目で見、耳で聞いたことを通して心が揺れ動き、肉の性質を追い求めるようにさせる属性のことだ。人が生まれて成長する過程で、何かを見て、聞いて、また感じる過程を通して、その心に目の欲が生じるようになる。

たとえば、憎んで争う場面がずっと出てくるドラマを楽しんで見る人がいるなら、このように見て聞くことが感じとともに、憎しみ、争いのような悪い心が入力される。それで、自分も知らないうちに人を憎んで争う人になる。

このようなドラマを見て聞いて楽しむこと自体が目の欲を受け入れることになり、憎しみや争いなどが心に入ってきて、もともと心の中にあった罪の属性を刺激して、さらに悪を行うように助長するのだ。

また、人に憎しみや争いがある時は、テレビを見ても、自分にある肉の性質を刺激するように人を憎んで争う番組を楽しむようになる。もし、憎しみと争いを捨てようとしながらこういうドラマを見続けるなら、憎んで争おうとする真理に逆らう心に力を吹き込み続けるような愚かなことである。

神のみことばを聞いて恵みを受ければ、すぐにでも罪を捨ててしまえそうなのに、目の欲を遮らないで受け入れ続けるなら、再び恵みがなくなって、罪を捨てるのが難しく感じられる。

たとえば、酒を断ち切れなかった初心の者が、ある日、神のみことばに恵みを受けて、「きょうから酒をやめよう」と決心したとしよう。その人が本当に酒を断ち切ろうとするならば、何よりも酒に対する欲を刺激する、あらゆる支援軍を遮断してしまわなければならない。もし、その人が好きだった酒のビンを近くに置いてながめながら、においもかいでみて、以前、この酒がどれほどおいしかったか思い出したりするなら、心を守るのがどれほど難しくなるだろうか。

このような姿がまさに目の欲を受け入れることであり、酒を飲もうとする肉の欲に支援軍を供給するので、御霊の願うことに従おうとする真理の心が戦いで押され始めるのである。そのうち「たった一杯だけ飲んでからやめよう」と妥協でもするなら、その一杯が二杯、三杯になり、その人は再び酒を飲む人になってしまう。

また、テレビが好きで、おもしろい番組を見ていると、聖徒を訪問したり伝道しようとしていた心が移り変わって、人との約束も度々破る人がいるとしよう。その人が「これからは変わらずに、まっすぐな心で約束を守る人になろう」と決心するなら、どうしたらよいだろう。自分の心を制する力ができる時までは、テレビを全く見ないほうがよい。

また、「これからは人をさばいて罪に定め、陰口を言う真理に逆らう話はしないぞ」と決心したなら、他の人々が真理に逆らうことを言っているとき、聞いてはいけない。他人の過ちや悪いことを伝える人が来て話をしているのに、心が弱くてきっぱりやめさせられない人は、そのまま一緒に聞くようになる。そうすると自分の心も恵みに満たされなくなり、自分の口からも真理に逆らうことが出てくるようになる。

したがって、目の欲を遮るためには、このような真理に逆らう話を聞いてはいけない。だからといって、無礼な態度をとりなさいというのではなく、話題を変えて、真理の話をしようと努力し続ければよい。そうすると相手も悟り、真理の話に変えるはずである。そうでなくて、相手が最後まで真理に逆らう話をしたいなら、自分の話を聞いてくれる他の人を探して離れるようになるので、聞かなくてもよくなる。

もし汚い水が入ったコップにきれいな水を注ぎ続けるなら、結局はコップの中にきれいな水だけが残るだろう。ところが、もしきれいな水を注ぎながら、それに汚い水も一緒に注ぐなら、どうなるだろう？ 汚い水を注ぐことをやめない限り、いくら時間が経っても、完全にきれいな水にはなれない。

このように真理をいくら満たしていこうとしても、目の欲を通して真理に逆らうものを受け入れ続けるなら、長い間祈って断食して、「神様、助けてください」といくら祈り求めても、相変わらず罪との戦いが終わらないので、惨めな信仰生活をするのである。したがって、真理で満たすためには、この目の欲を自分の努力で断ち切ってしまわなければならない。

筆者が初心の者だった時は、この目の欲を遮るために、映画も見なくて、家族とも話し合っただけでテレビもなくしてしまった。悪いことは見ず、聞かずに、悪いところには行きもしなかったのである。肉の欲を起しそうな通路自体を全部塞いでしまったのだ。

このように目の欲を遮って、真理で満たしていくと、神の恵みと力が臨んで、聖霊に助けられて、真理に逆らうものはすべて捨てられて、真理だけが残る。〈ローマ8:12-13〉に「ですから、兄弟たち。私たちは、肉に従って歩む責任を、肉に対して負ってはいません。もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御霊によって、からだの行いを殺すなら、あなたがたは生きるのです。」とある。

罪を犯そうとする肉の属性が願うまま罪を犯し続けていく人は、いくら「信じます」と告白しても救われない。その人は私たちの罪を赦されたイエス様の尊い血を辱めて、その恵みを侮る人なので、みことばどおり必ず死ぬようになる。

御霊によって、すなわち、御霊の願うことに従って、真理を追い求め、悪い事をしてきた以前の姿を変えて、からだの行いを殺す時に、はじめて永遠のいのちが得られる。このように目の欲を遮って努力することが、まことに大切な作業である。しかし、だからといって、自分の努力だけで真理に逆らうものが捨てられるのでは決してない。

人を殴ることや、汚い言葉を使うこと、憤ることなどは、自分が努力してそうしないようになることもある。しかし、その元の属性は相変わらず残っているものであり、このように本性と結びついている罪の性質、すなわち、ねたみ、そねみ、高ぶり、欲、姦淫などは神が恵みと力を下さって、聖霊に助けられてこそ捨てられる。

## 7. 祈りの力

このように神の恵みと力と聖霊の助けをいただくためにどうしても必要なものが、火のような祈りである。祈らない人には神の恵みが臨まない。神によって強くされることも、聖霊に助けられることもできない。ただ火のような、心を込めた祈りを絶えずささげる時こそ、神の恵みが臨んで、神によって強くされ、本性に結びついた真理に逆らうものでも捨てられるのである。

ところで、この時覚えておくことは、まことに神が受け入れて答えられる、ふさわしい

祈りをささげなければならないということだ。ゲツセマネでイエス様が祈りの手本をどのように見せられたらどうか？

汗が血のしずくのように地に落ちるまで、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。預言者エリヤが日照りを終わらせる答えを引き下ろした時は、どれほど心から【主】に呼びかけたのか、「自分の顔をひざの間にうずめた。」とある。このように、全霊全力を尽くした祈りがある時にはじめて、気の中の罪の性質まで捨てられて、聖霊の火を受けて罪の性質が焼き尽くされるのである。

また、火のような祈りによってだけ、御霊に感じて、聖霊に動かされ満たされるようになり、神のみことばを聞くとき、知識として聞いて終わるのではなく、心から自分に対するみことばとして悟れる。自分が御霊の歩みに入るのに障害になる枠とさまざまの思弁が何かを悟ることができ、それらを取り除いて、聖霊の声を聞いて御霊に導かれて、すみやかに御霊の歩みに入るのである。

聖霊の声を聞くために最も基本的にならなければならないことが、今まで述べたように、心に真理に逆らうものを捨てて、真理で満たすことである。本当に聖められるために決断して目の欲を遮って、真理に逆らう支援軍を防ぎ、火のような祈りを積み上げていくなら、神の恵みと力をいただき、聖霊に助けられて、すみやかに真理の心に変えられるのである。

## 8. 最後まで努力しなさい

このように心に満たされた真理を通して聖霊の声を聞くことができるが、次に御霊に導かれるためには、聖霊の声を聞いたら、それに従わなければならない。聖霊の声に聞き従う時でこそ、御霊に導かれることができ、神のみわざを体験することもできる。

ある人々は聖霊の声を聞いても、それに聞き従わない。聖霊の声に聞き従うより、自分が見てより良い他の道に行ったり、あるいはそれに聞き従うことが難しく感じられるので、聞き従わないのだ。

ここまで、真理に逆らうものがあるほど聖霊の声が聞けなくて、御霊に導かれないと説明した。これをもっと具体的に説明するなら、真理に逆らう知識から出てくる肉の思いが、聖霊の声が聞けないように、また、聞いても聞き従わないようにするのである。したがって、真理に逆らうものを捨てるだけでなく、肉の思いが何か、その正体を把握して、自分にある肉の思いを発見して打ち砕くなら、さらに簡単に聖霊に働きかけられる。

ひょっとして「こんなに長い間信仰生活をしたのに、私はこのくらいにしかならなかった。どうしたらいいのか？」と思ったり、「こんなにたくさんの悪をいつ全部捨てて聖められるのだろうか」と気を落としている方がいるだろうか？ しかし、決して気を落とすことはない。

〈ガラテヤ 6:9〉に「善を行うのに飽いてはいけません。失望せずにいれば、時期が来て、刈り取ることとなります。」とあるように、神は聖められたいと願う聖徒の祈りに御顔を背けられる方では決してない。完成者である主から目を離さないでいて、最後まで信仰によって行えば、必ず蒔いたとおりに豊かな実を結ぶようになる。

また、いくら心に悪が多いようでも、その中から一番大きいものを捨てようと集中的に祈って努力すればよい。

木の大きい根を引き抜けば、それにつながっている小さい根も簡単に抜けるように、真理に逆らうものも、自分にとって最も大きいものを捨ててしまうなら、小さいものを捨てることはそんなに難しくないからだ。それで、罪と悪を捨てて、完全に聖霊の声に聞き従う真理の人になりさえすれば、その時からは行く手が塞がれることはない。

ソロモンの心は神の御前に完全ではなかったが、一千頭の全焼のいけにえをささげて神に喜ばれると、神がご自身でその夢に現れて、「あなたに何を与えようか、願え」と仰せられた。それで、彼が願ったとおり、ソロモンの先にも、また、ソロモンのあとにも、ソロモンのような者は起こらない知恵を与えて祝福されただけでなく、〈第一列王 3:13〉を見ると、「そのうえ、あなたの願わなかったもの、富と誉れとをあなたに与える。あなたの生きているかぎり、王たちの中であなたに並ぶ者はひとりもないであろう。」と仰せられた。

ところで、いけにえよりも神がもっと喜ばれるのは、神のみことばを聞いて、それに従うまことの子どもである。私たちが神のみこころにかなう子どもに変えられさえすれば、心の願いをお聞きになるのはもちろん、求めなかったことまでも祝福されるのだ。この地上だけでなく、天でも父なる神の御座の近くとどまって、愛を分かち合いながら、大きい栄華を味わうことができるのである。だから、気落ちせず、最後まで努力しなければならない。

## 第3章

### 肉の思いを打ち砕け

#### 1. 従順の障害物

聖霊の声を聞いて御霊に導かれるためには、まず心の中にある真理に逆らうものを捨てて、心を真理で満たさなければならない。このために目の欲を遮って火のように祈り、自分の意志で努力していきながら、神の恵みと力をいただいて、聖霊に助けられなければならない。

こうして心が真理で満たされるなら、聖霊の声が聞こえてくる。だが、初めからその声をはっきりと聞くのではない。初めて聞く時は、これが聖霊の声なのか、そうではないのか混乱したりするが、その声に聞き従うほど御霊に導かれて、神のみわざを体験するようになる。そのうちだんだん聖霊の声を明らかに聞き分けるようになる。

つまり、聖霊の声をもっと明らかに聞いて御霊に導かれるためには、すでに聞いた聖霊の声に聞き従わなければならない。私たちが聞き従う時でこそ、神はだんだん明らかな声を聞かせてくださり、さらに細やかに導かれて、栄えるようにされる。

そんなにしばしばあることではないが、時々、筆者がある方に諭すことがある。「こうしなさい、ああしなさい」と直接指示するのではないけれど、わかるように柔らかく遠まわしに話をする。

ところが、多くの方がそのようなことを聞けば、私が言っている意味を考えてみようともせず、まず自分の立場から理由と弁解をしようとする。もちろん、それぞれの事情があることは私も知っている。

しかし、私が知っていながら、あえて諭している理由をその方が考えてみるなら、神にさらにふさわしいように変えられるだろう。そうではなく、言い訳に汲々として、諭したことを受け入れられなかったり、言い訳はしなくても、相変わらず変えられないでいたりするなら、私もそれ以上言わない。時には、二、三度まで言うが、それ以上は言わないのである。ひょっとして私が強いることになって、相手を苦しめることになるのか心配するからでもあり、まだ受け入れる器になっていないだろうと思って、時が来ることだけを祈って待っているのだ。

神も同じである。聖霊の声を何度か聞かせてくださっても、私たちがその声を無視して聞き従わないなら、神がそれ以上言われる意味がなくなる。神は私たちに自由意志を下さったので、聞き従わない人に強いられることではないが、その代わり聖霊の声はだんだんかすかになる。

たとえを一つ挙げてみよう。偽りをよく言う人がメッセージに恵みを受けて、「これから偽りは言わない」と決心して、神に助けけてくださるようにと祈った。それから、ある瞬間、

自分の利益のために、また偽りを言うような状況にぶつかった。初めは「そうしてはいけない」という聖霊の声が聞こえてくるので、心が刺された。

ところが、聖霊の声に聞き従おうとする心と、自分の利益を求めようとする心が葛藤して、この人は、結局、偽りを言ってしまった。すると、次は偽りを言おうとするとき、聖霊の声が前より弱くなる。それでも偽りを言い続けるなら、聖霊の声はますます弱くなり、ついには全く聞こえなくなるので、心に葛藤もなくなる。〈第一テサロニケ 5:19〉には「御霊を消してはなりません。」とあるのに、この人は「偽りを言ってはならない」と教えてくださる聖霊の声を消してしまったのだ。

こういう過程はすべてにおいて同じである。神が何か聖霊の声を聞かせてくださるとき、あるいはある道に導こうとされるとき、何度働かれても聞き従わないなら、神はただ放っておかれるしかない。時には死に向かっている子どもを懲らしめても、罪から立ち返るようにされることもあるが、このようにまでしなければならぬならば、すでに聖霊の声がほとんど聞けない場合である。

このように真理で教える聖霊の声に続けて聞き従わないなら、だんだんかすかになって、聖霊の声がついには完全に聞こえなくなる。このように聖霊の声を聞いても従わない理由は、御霊の願うことに従おうとする心より、肉の願うことに従おうとする真理に逆らう心のほうが多いからだ。

聖霊の声は「憎んではならない」と言っても、自分の思いに合わない人は憎みたくて、「高ぶりを捨てなさい」と言っても、高くなりたいため、肉の願うことに従って聞き従わないのである。しかし、目の欲を遮って火のように祈っていけば、だんだん真理に逆らうものを捨てて、真理の心に変えられる。その分、聖霊の声を聞いて従うことももっとやさしくなるのである。

ところが、問題は、自分なりに神を愛していると熱心に走っている人の中にも、聖霊の声が明らかに聞けなくて、御霊に導かれない人がいることである。こういう人は、自分が学んで知っている限り熱心に真理に従って努力するので、講壇からのメッセージを聞いても、自分に特にひっかかることがないように思える。すなわち、「私はみことばを守り行っている」と思うのである。

しかし、本当に神のみこころのとおり生きて、神の御前に認められる人ならば、必ず愛される証拠が現れるはずである。ところが、そうでもなくて、何か霊的に行き詰ってもどかしいものがある。何かをするとき、聖霊に働きかけられてしたと思ったが、実際に結果を見ると、豊かな実を結べない。長い間信仰生活をしてきたのに、ある限界以上は霊的な世界へ突き抜けて入れないままとどまっているのだ。いったいなぜそうなのだろうか？ こういう人は自分でも知らないうちに、肉の思いに堅く縛られているからである。

したがって、聖霊の声を明らかに聞いて御霊に導かれるためには、熱心に祈って努力することと同時に、肉の思いが何かを正確に知らなければならない。また、実際に暮らしの中で、自分がどういう思いをしているのかを発見して、なぜそんな思いをするようになるのか」を悟らなければならない。

「知っていることは力になる」という言葉もあるように、自分にある肉の思いを悟るこ

とは、聖霊の声を明らかに聞いて、御霊に導かれるのに大きい力になる。まるで濃い霧が晴れて、行く先がはっきり見えてくるように、御霊に導かれて祝福される道が目の前に明らかにされるのである。

## 2. 肉の思いと御霊による思い

私たちは毎日毎日何かを思いながら生きているので、思うということは、まるで息をしているように自然なことである。ところで、神のみことば(ローマ 8:6)を見ると、「肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。」とある。それでは、「肉の思い」とは何で、「御霊による思い」とは何だろうか？

しかも、続く<7 節>には「というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。」とある。肉の思いというのが、神に対して反抗するもので、しかも死であるなら、当然してはいけないただろう。

そのためには、肉の思いが何かを知らなければならないし、思い、知識、さまざまな思弁、粹など、いろいろな概念をまず知らなければならない。しかし、このような概念については、すでに『霊、たましい、からだ』をはじめ、多くの説教で詳しく説明したので、ここでは簡略に説明しよう。

まず、思いとは、脳の記憶装置に入力された知識をたましいの働きによって引き出すことである。人は生まれてから数多くの知識を得る。これには学校で学ぶ世の学問だけでなく、各人が世を生きていきながら得た处世術や価値観に関することなど、脳の記憶装置の中に入力されたすべてが含まれる。

このように感じとともに入力させた知識は、脳の記憶装置に入っていて、何かのきっかけがあれば、頭の中に思い浮かぶ。たとえば、「唐辛子は辛い」という知識のある人は、唐辛子を見ると「あれを食べれば辛いだろう」という思いが浮ぶだろう。あるいは、唐辛子を食べている人を見ると、「辛くて、あの人は水が必要だろう」という思いを浮かばせるようになる。

このように脳の記憶装置の中に一度入力された知識が頭の中に再生されることが思いである。思いには、二つの種類がある。一つは「御霊による思い」で、もう一つは「肉の思い」である。言いかえれば、御霊による思いは真理の思いで、肉の思いは真理に逆らう思いだ。どうして思いがこのように二つに分けられるかというと、人が生きていきながら入力させた知識には、真理の知識と真理に逆らう知識が混ざっているからである。真理の知識を引き出すなら、御霊による思いが出てきて、真理に逆らう知識を引き出すなら、肉の思いが出てくる。

ところで、世の人々が真理だと堅く信じている知識のうち、あまりにも多くが神のほうからは全く真理でなく、間違っている知識である。

たとえば、英雄小説には「怨みを晴らすのは当然のことであり、怨みを晴らさなければ



卑怯で無能力だ」という価値観が込められている。こういう小説を楽しんで読んで感動する人は、怨みを晴らすことが正しいという価値観が自分の中に一つの知識として強く入力される。そして、それがまことだと思う。

しかし、神のみことばに照らしてみると、これは真理ではない。「敵をも愛して、七度を七十倍するまでも赦すこと」が真理の知識なのだ。このような真理の知識がある人は、自分をいくら苦しめる人を見ても、何としてでも「赦さなければ、愛さなければ」と思って、真理の思い、御霊による思いをしようと努力する。すると「御霊による思いは、いのちと平安です。」とあるように、聖霊に満たされて、心の奥底から平安がわき出て、その人は神が喜ばれるいのちの道に向かうのである。

しかし、すでに真理に逆らう知識を持っている人は、神が「敵をも愛しなさい」と言われると、自分の知識から言い訳が出てきて、従えなくなる。「あの人はこうこう悪い人ですが、どうして愛することのできない悪を行ったんです」と言って、相変わらずその人を憎むのだ。このように間違った知識、真理に逆らう知識を再生して出てきた思いが、まさに真理に逆らう思いであり、肉の思いである。

このように真理に逆らうものから出てくる思いは、すべてのことに神のみこころに立ち向かって従わないようにするので、「神に対して反抗するものだからです。」と書いてあるのだ。神に対して反抗する肉の思いだけに従っていき続けるなら、結局は死の道へとそれてしまうのである。

### 3. 肉の思いによる不従順

〈第一サムエル 15 章〉のサウル王が、まさに肉の思いによって神に対して反抗する代表的なケースである。神はサウル王にアマレクを打てと言われ、「そのすべてのものを聖絶せよ。容赦してはならない。男も女も、子どもも乳飲み子も、牛も羊も、らくだもろばも殺せ。」と言われた。これは、アマレク部族が神にひどく立ち向かったことに対する報いであり、呪いであって、正確に神の命令のとおり行われなければならないことだった。

ところが、サウルは実際に行って戦って見たら、家畜を全部殺すのがあまりにも惜しくなった。どうせ殺すなら、いっそ連れて行って神にもささげて、その他にも必要に応じて使えばよさそうだった。人の思いではどれほど効率的で賢いだろうか。また、アマレクの王を連れて行って多くの人に見せるなら、自分の勝利がもっと輝くはずなので、ただ殺すよりは生けどりにしたくなった。それで、家畜の中で最も良いものは生かして連れてきて、アマレクの王も連れてきた。こうして、サウルは神のみことばのうち、自分の思いに合わないことを除いてはすべて聞き従った。

それでは、神は何と言われただろうか？ 「あなたは賢い。あなたの思いに合うことはわたしに従ったので、よくやった」と言われただろうか？ そうではない。神はサウルが神のみこころに聞き従わないので、【主】のことばを退けたと言われ、それゆえ【主】はサウルをイスラエルの王位から退けたと宣言される。

サウルが「こうすればもっといい」という思いが、結局はすべて自分の欲と高ぶりから

出た肉の思いだったのである。神がサウルより愚かで知恵がないから、アマレクを聖別せよと言われたのだろうか？ 人にはわからない神の摂理と霊の世界の法則に従って、最もかなうように命じられたのだ。

それでもサウルは自分の思いに従って、もっと賢くて良く見えるほうを選んだのである。これは自分が神より優れているということと同じだ。高ぶりで目がくらんだサウルは、従わなかったのに、相変わらず自分は従ったとっていて、預言者サムエルが来て諭しても、自分の過ちを認めて悔い改めようとしなかった。それからサウルは肉の思いを働かせて、続けて神に聞き従わなくなり、結局、神に対して反抗して、悲惨な死を迎えた。

サウルが生きていた旧約時代は、神がみこころにかなう人に直接声を聞かせてくださって、民に伝えるようにされたが、今日は聖霊が各人の心におられ、神のみこころを知らせてくださる。私たちが聖霊の声を聞いても逆らうなら、これは旧約時代にサウルが神の命令に逆らったのと変わらない。

ところが、今日、自分なりに信仰があるという多くの人が聖霊の声に聞き従わないことが見られる。「聖霊の声に聞き従って行うことはあまりにも難しい」とか、「聖霊の声はこうするように聞かせてくださるけれど、私が見るにはああしたほうがよい」という思いが働くのだ。

しかし、神は自分で思うに良いものをささげながら聞き従わない人よりは、神のみことばを信頼するので全力を尽くして従う人のほうを喜ばれる。〈第一サムエル 15:22〉にも「聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。」とある。

私たちの中に真理に逆らう知識が全く入力されていなかったなら、真理に逆らう思いが出てくることはありえない。もし、私たちが生まれた時から悪が全くないエデンの園のような空間で、真理そのものである神に養育されて教えられたなら、真理に逆らうものが全く入力されないこともありえるだろう。しかし、〈ローマ 3:10〉に「義人はいない。ひとりもない。」とあるように、この世に生まれて育った人には、自分でも知らないうちに真理に逆らう知識が入力されるものである。

このように真理に逆らう知識を入力させたとしても、これから神のみことばを学びながら、発見され次第、熱心に捨てていくなれば、肉の思いがだんだんなくなる。自分ではそこまで悟れなかったものも、両刃の剣のように鋭いみことばで明らかにしてくださると、発見して捨てるようになる。

それで、肉の思いが全く働かないなら、聖霊の声が聞こえるままに聞き従うようになり、そのような人は神にこの上なく愛されるようになる。はいるときも、出て行くときにも祝福され、神がその人をかしらとならせ、尾とはならせない、そして、心にいただいたことまでも答えてくださる、神の細やかな愛をいつも体験して生きるようになる。何より聖霊の声を明らかに聞いて、御霊に導かれて、神の豊かな愛の中で生きていくようになる。

#### 4. 肉の思いが働く過程

主を初めて信じて、恵みを受けて聖霊に満たされるなら、他の人に伝道したいと思うようになる。ところが、実際にはからだに従わないと言う人もいる。路傍伝道に行って、チラシを渡そうとしても、「あの人は私をどう思うだろうか」「おかしく見えるのではないのか」という気がする。恥ずかしくて口がよく動かないのだ。また、誰に伝道するのか考えながら、通り過ぎる人を見ても、「あの人は印象があまりにも強くてだめだ」とか、「あの人はあまりにも世的な服を着てるから、受け入れそうもない」、あるいは「あの人は近寄りがたそうでだめだ」と思うなど、ずっと自分で思うばかりで伝道をためらう。いったい誰に伝道すべきかわからなくて、もじもじして時間だけが流れてしまう。

これらはすべて肉の思いである。余計な肉の思いがなければ、このように迷わないで大胆に伝道ができる。

〈ルカ 9:26〉には「もしだれでも、わたしとわたしのことばとを恥と思うなら、人の子も、自分と父と聖なる御使いとの栄光を帯びて来るときには、そのような人のことを恥とします。」とある。主の福音を伝えることは、まさにいのちを伝えることであり、自分にいのちを与えられた主がこの上なく喜ばれることなのに、伝道が恥ずかしい理由がどこにあるだろうか。

また、主は心をご覧になるので、自分のほうから、うわべを見て「あの人はだめだ」と決めてしまう必要は全くない。このような肉の思いをみな捨ててしまった人は、伝道方法まで正確に働きかけられる。誰にどういう言葉で伝道すべきなのかも、聖霊の声を聞くので、正確にわかるのだ。表で見えてはわからない心の問題であっても、聖霊が知らせてくださる時は、正確に把握できるので、伝道しやすいのである。このように、聖霊の声を聞いて従いさえできるなら、伝道だけでなく、人生のあらゆる分野において豊かな実を結ぶようになる。

ところで、聖霊の声を聞くことを妨げるものが、この肉の思いである。〈ローマ 8:7〉に「というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。」とある。

先に述べたように、思いとは、脳の記憶装置に入力された知識をたましいの働きによって引き出すことである。特に、その中からも真理でない、間違った知識を脳の中から思い出させるとき、その時の思いがまさに肉の思いになる。

最もわかりやすい例を挙げれば、伝道するとき、「イエス様は聖霊によって宿られて、おとめからお生まれになりました。キリストは死からよみがえられました」と言ったとしよう。万物を創造された神の力では十分に可能なことである。しかし、肉の世で学んだ人の知識だけでは、おとめが、すなわち男を知らない女性がみごもることは決してありえないことである。また、死んだ人がよみがえったというのも納得できない。だから、自分が知っているこの世の知識による肉の思いを働かせると、「偽りだ」「信じられない」とさばくようになる。

「神の力によって目の見えない人が見えるようになり、話せない人が話して、不治の病

がいやされました」と言っても同じである。決してそのようなことは起こりえない、という自分なりの知識と理論を持っているので、このような証しを聞いても信じない。「祈りを受けたからといって、どうやっていやされるだろうか？」という肉の思いが強くなるようにする。

しかし、このような人も、ずっと伝道するなら、また、実際に神の力が現れるのを見るなら、自分の知識が合わないことが悟れる。三次元の世界では不可能なことでも、神にはできないことがないということを知るようになる。

あるいは、困難にあつて心が貧しくなり、肉の思いを働かさないで、条件をつけずに心の戸をあければ、聖霊に働きかけられることができる。すなわち、この地上で学んだ自分の知識と合わないことであっても、信じられる信仰を上からいただくようになる。

したがって、ひょっとして「私にはまだ信仰がありません」という人は、何よりも自分の中に神のみことばと反対になる、世の知識が間違っていることを悟らなければならない。

## 5. 肉の思いの例

### 1) さばいて罪に定める

ひとまず主を信じて救い主として受け入れたとしても、私たちの救いはそれで終わるのではない。その次の課題は、神のみことばを守り行うことだ。神を信じてると言いながら、聖書のとおりに行わないならば、それはまことの信仰ではない。

〈第一テサロニケ 5:23〉に「平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエス・キリストの来臨のとき、責められるところのないように、あなたがたの霊、たましい、からだは完全に守られますように。」とある。このみことばのように、神を信じる人は、あらゆる罪と悪を捨ててしまい、全く聖なるものとされるだけでなく、最後まで霊、たましい、からだは完全に守られなければならない。

ところで、このように聖められていく過程でも、聖徒たちの足を引っ張るのが、まさに肉の思いである。たとえば、〈マタイ 7:1〉には「さばいてはいけません。さばかれたいからです。」とある。人の心は神だけが知っておられるのに、他人の表の姿だけを見てさばくなら、それ自体が神との間に罪の隔ての壁になる。

しかし、さばく人はほとんどの場合、「私がさばくのではなく、実際そうなんだ」と言ったり、「私は雰囲気を感じることが得意なので、見ればすぐわかる」と言いながら、神のみことばに逆らっていることも知らない。

たとえば、ふだんから知っている男女がベンチに座って仲良く話をしているのを見たら、人によってそれぞれその感じが違いうだろう。真理に逆らう人は、直ちに肉の思いを働かせる。「雰囲気からすると、あのふたりは他人の目を避けて会う、悪い関係のようだ」と言う。

しかし、真理の人はうわべだけを見て、真理に逆らう思いでさばくのではない。「ふたりには何か会う理由があるのだろう」と思うのである。ただし、自分がそのふたりを指導する立場だったり、何かの理由であえてそのふたりについて知る必要があるなら、「神様、あれはどういうことでしょうか？」と祈ればよい。その人が本当に真理に逆らってさばくの

でなく、必要によって祈るなら、神も聖霊の声を通して知らせてくださる。

しかし、ほとんどはこのように聖霊に働きかけられないのに、先に肉の思いを働かせて、さばいて罪に定めたり、ひどい時は偽りの噂までまき散らし、神との間に罪の隔ての壁を作るのだ。

あるいは、道を通っているうちに、目を合わせたが、相手が避けてしまったり、挨拶しなかったりすることが何度かあれば、どう思うだろうか？ 多くの人は「私に何かわだかまりでもあるのか」とさばいて、気を悪くする。

実際は、相手が視力が悪くて、自分のことがわからなかったり、深く考えごとをしていて、見えなくて通り過ぎたのに、そうするのだ。この時も、自分の心にある真理に逆らうものを通して肉の思いが先に働くので、さばいて気を悪くするのである。

説教を聞いている時も、肉の思いの中でさばく人がたくさん見られる。ある人をたとえに挙げて説教したら、「私が知っている誰々さんについてのことだ」と思うことがあるが、実際は全く思い違いのことが多い。あるいは説教中、一般的なたとえを挙げたのに、ある人は「私のことを責めている」と気を悪くする。

自分についてのことと思われるなら、神が下さったみことばだと受け入れて、悔い改めればよいのに、そうせずに、説教者が何かわだかまりを持って話したように肉の思いを働かすので、気を悪くするのである。これらのすべてが、肉の思いのゆえに真理である神のみことばに従えない例である。

このようにさばくだけではない。「絶えず祈りなさい」と言われると、「私は会社があまりにも忙しくて時間もないし、疲れているからできない」と思う人もいる。「すべてのことに感謝しなさい」というみことばを聞いても、感謝できることは感謝するけれど、いつも感謝することはできない。「こんなに貧しくて、こんなに病気があるのに」、あるいは「家庭がこんなに経済的に困っていて、私はこんなにつらいので感謝できないのは当たり前だ」と思うのである。

「十分の一献金を完全にささげなさい」と言われると、ある人は感謝献金、施し、セルグループの会費のようなものも全部含めて、自分勝手にささげる。たとえば、1万円を十分の一献金としてしなければならないなら、「どうせ神様にささげるものなので」と思い、その中から5000円ぐらいは感謝献金、3000円ぐらいは施し献金にして、その残りで十分の一献金をする。自分が見て良い方法で神にささげたつもりだが、神がご覧になると、この人は聞き従ったのではない。

## 2) 義と粹

今まで紹介した例は、肉の思いの中でも非常に初歩的なものである。信仰生活を長くしてきて、信仰がある程度成長すると、このように確かに神のみことばだと知っていながら、思いを働かせて従わないことはあまりない。

しかし、自分でも知らないうちに「義と粹」があるので、自分なりにみことばどおり従

おうとする人も、相変わらず肉の思いが働くことが見られる。人は生きていながら、身に染みて固まってしまった自分だけの思いや行動様式が作られる。

その中で間違った「枠」が固く作られている場合は、信仰を持つようになって真理を学んでも、その枠の中で、すなわち、自分の限界の中で適用されるだけであり、まことの神のみこころを悟るのに邪魔になるのだ。

それほど聖霊の声も深く聞けないので、長く信仰生活をして働き人として忠実に仕えてきたとしても、満足するほどの信仰の発展がなく、霊的な実も足りないことが見られる。したがって、聖霊の声を明らかに聞くためには、自分も悟れないうちに自ら神のみこころから遠ざかるようにする、自分のさまざまな理論と枠を発見しなければならない。

#### a) 性格による枠

ある人は悲しみと恨みを持っていて、世を暗い目で見て生きてきたので、信仰生活でも否定的な見解という枠をもって、その枠を通して肉の思いがいつも働く。この人は自分なりに祈って努力していきながらも、自分が願っている祝福を他の人が受けた時や、他の人が自分より先んじていると感じると、焦ったり思わず気を落としたりしてしまう。

真理のみことばの中を歩んでいる人なら、「真理を喜ぶのが愛」なので、恵みを受けた人のことを喜んで、自分も挑戦を受けて、もっと恵みに満たされて信仰生活をしなければならない。ところが、この人は「私も一生懸命していることはしているのに、あの人だけ祝福されて、私はなぜこうなのか」「私はもともと心の地が良くないようだ」と思って、力が抜けてしまう。否定的な枠からこのような肉の思いが出てきて、そのため気を落としながらも、自分が肉の思いをしていることがわからない。

また、ある人は、自分で自分を罪に定めて責める枠があって、神についても、愛の神よりは律法の神、さばきの神として感じるようになる。神を愛するので喜びと幸せな心で真理を行うのではなく、懲らしめられないように、恐れながら行う。ちょっと間違っただけがあれば、自分をひどく責めながら、神の御前に行くこともできず、祈る力でさえ失ってしまう。

#### b) 真理で作った枠

また、このような性格による枠を持っている人は他の人に対する時も、相手の信仰に合わせて理解して受け入れるのではなく、真理で作った枠に合わせて相手の欠けているところを罪に定めて、無理に引っ張っていきこうとしがちである。

たとえば、ある宣教会の会長が毎日、祈り会をすればいいだろうと思って、祈り会を作ったとしよう。自分自身は祈りを楽しみしていて、神の働きを一番大切に思う熱い心なので、その時間には他のことは後にしてでも祈りに出てくる。これは良いことである。

しかし問題は、自分についてくることができない多数のことが考慮できないということだ。もし、毎日ある祈祷会以外に、どうしても必要なこの祈り会を聖霊が働きかけて作るようにされたなら、神がその結果についても責任を負われる。すべての聖徒に同じように働かれる聖霊なので、他の会員にも働きかけて人を集めてくださるはずであり、神が

計画されたとおりに祝福してくださるだろう。

しかし、自分の思いの中で、自分の信仰に合わせて計画したものなら、引続き雑音が生じて、平和がつかれないし、多くの人々の心が一つにならない。もちろん、集まって祈った分は神が受け入れられるだろうが、本当に神がつかさどられた方法でないので、火のような聖霊のみわぎが起きたり、大きい実を結んだりすることは難しいのである。

このような時も、相変わらず自分の枠の中に縛られている人は、その枠の中で肉の思いによってしたことを顧みることができない。むしろ「祈りは神のみこころで、リバイバルのためにとっても大切なことなのに、なぜこんなに集まらないのか」と残念に思ったり、あるいは他の人たちに対して気を悪くしたりする。

この人が聖霊の声を明らかに聞いて、御霊に導かれて神の働きをするためには、まず自分の基準に従って押し進める枠を打ち砕かなければならない。いろいろな試行錯誤を通して訓練を受けて、この枠を打ち砕くようになれば、その時はじめて肉の思いがなくなって、聖霊の声を明らかに聞いて、御霊に導かれて行えるのである。

〈第二コリント 10:5〉に「私たちは、さまざまの思弁と、神の知識に逆らって立つあらゆる高ぶりを打ち砕き、すべてのはかりごとをとりこにしてキリストに服従させ、」とある。また、〈ヘブル 4:12〉には「神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。」とある。

人はそれぞれ何が正しいと思う基準が違う。だから、互いに弁論して争うのを見ても、自分が正しいという主張を一步も譲らないのである。しかし、神のみことばに照らしてみれば、各人の間違った知識と理論、枠などが発見できる。

もちろん、時には霊的な悟りが鈍くて、熱心にみことばを聞いて祈りながらも、自分の欠けていることが何か悟れないこともある。しかし、このような場合も、神はいろいろな方法で機会を与えられる。何かの出来事があったり、それなりの訓練を受けるようにされ、極めてへりくだって貧しい心になるようにされる。

それで、自分を捨てて、切なる心から神のみこころを悟ろうと努力すれば、その時から悟る深さと広さが変わって、以前とは違う姿にすみやかに変えられる。神の御前で自分の実ははたしてどうなのか、自分にはどんな枠と理論があって、どんな肉の思いがあるのか、徹底的に低くなった心で父の御前に耳を傾けて、自分を顧みなければならない。そうすると、他の人の訓練であっても、それを自分が肉の思いと枠を砕いて祝福される、良いきっかけにすることができるのである。

このように、毎瞬、へりくだった心で自分を顧みて、徹底的に肉の思いを捨てて、聖霊の声を聞いて御霊に導かれなければならない。

## 6. 肉の思いに関する聖書の例

〈エレミヤ 32:27〉に「見よ。わたしは、すべての肉なる者の神、【主】である。わたしにとってできないことが一つでもあろうか。」とある。このみことばのように、宇宙万物

を創造された、すべての人生の生死禍福をつかさどられる私たちの神には、おできにならないことが一つもない。人としてはできないこと、この三次元の世界では想像さえできないことを、全能なる神は十分に行われるのである。

これらが信じられる霊の信仰を持つためにも、心の真理に逆らうものを捨てて、肉の思いを打ち砕くことがとても重要だ。肉の思いが残っている限り、人が見て不可能なこと、難しいことを信じて従うことはできないからである。

したがって、本当に答えられて祝福されたいなら、まず自分にある肉の思いを発見して、徹底的に捨てなければならない。肉の思いを発見して捨てるために、聖書の中からいくつかたとえを挙げてみよう。

#### a) モーセの例

〈出エジプト記〉3章と4章に、本当に興味深い場面がある。神が荒野で羊を飼っているモーセを召される場面だ。当時、イスラエル人はエジプトの王パロの奴隷になって、つらい労働をしながらしいたげられていた。それで、彼らは長い間、神に救ってくださるようにと祈っていた。

神はモーセをパロのもとに遣わして、イスラエル人を連れ出すと仰せられるのである。このおことばを聞いたモーセは「私はいったい何者なのでしょう。パロのもとに行つてイスラエル人をエジプトから連れ出さなければならないとは。」と申し上げた。自分にはできないということだ。若い時、強大国エジプトの王子として育つたモーセは、エジプト王パロとその軍隊がどんなに強いのか、誰よりもよく知っていた。自分にはパロに立ち向かうほどの強い軍隊もなく、民が自分に従うだろうという保障もないのである。

しかし、神は「わたしはあなたとともにいる。」すなわち、モーセの力でなく、神の力によってすることだから、ただ従って行きさえすればよいと言われる。モーセは相変わらず従わず、もう一度言い訳する。「今、私はイスラエル人のところに行きます。私が彼らに『あなたがたの父祖の神が、私をあなたがたのもとに遣わされました』と言えば、彼らは、『その名は何ですか』と私に聞くでしょう。私は、何と答えたらよいのでしょうか。」モーセは、いったい自分がエジプトに行つて誰に会つて、何を言つてどのように連れ出すのか、先も見えないし、どのように従うのかもわからなかった。

このようなモーセの心を知つておられる神は、それも詳しく教えてくださる。神の御名を何と言うのか、イスラエルの民の中で誰に会つて、どう話をするのか、モーセがパロのもとに行つて話す内容は何か、するとパロがどうするのか、また、彼らがエジプトから出て来る時はどのように出て来るだろうということまで、みな詳しく教えてくださったのである。

それでは、モーセが何と答えただろうか？「アーメン、行つてそうします」と答えただろうか？モーセはそうできなかった。〈出エジプト 4:1〉に「ですが、彼らは私を信ぜず、また私の声に耳を傾けないでしょう。『【主】はあなたに現れなかった』と言うでしょうから。」と答えている。いくら神ができると言われても、モーセが考えるにはどうてい民が自分を信じそうもなかったのである。

すると、神はモーセにもっと確信を与えようと、モーセの杖を地に投げよと仰せられる。



地に杖を投げると、杖は蛇になった。そしてその尾を握ったとき、それは手の中で杖になった。それだけでなく、モーセが手をふところに入れて出したら、なんと、彼の手は、ツアラアトに冒され、雪のようになっていた。ところが、彼がもう一度手をふところに入れて、またふところから出したら、それは再び彼の肉のようになっているしるしを見せてくださった。

それでも、民が信じないなら、ナイルから水を汲んで、それをかわいた土に注がなければならぬと言われた。モーセがナイルから汲んだその水は、かわいた土の上で血となるだろうから、それで、神がモーセを遣わされたという証拠にきなさいということである。これぐらい説明して下さって、しるしまで下さったので、それから従うべきだろう。

ところが、モーセはまた別の言い訳をする。「ああ主よ。私はことばの人ではありません。」すなわち、話が上手ではないので、民や王を説得する自信がないということである。本当にじれったいことだ。神は今回も寛容をもって、人に口をつけられた神が、モーセの口とともにおられ、彼の言うべきことを教えてくださると言われる。ところが、モーセはいくら考えても自信がなかった。結局、これにも「ああ主よ。どうかほかの人を遣わして下さい。」と申し上げたのだ。

まことに多くの場合、人々の姿がこうなのである。従いさえすれば神の力ですべてを導くといくら神が言われても、そして、その証拠を見せて下さっても、自分の思いでできそうもないなら、従わないのである。

もちろん、モーセは、肉の思いが多い人なので神にこのように言い訳したのではない。初めて神に出会ったので、神についてよく知らなくて、神の力を直接体験したこともなく、自分があまりにも欠けた者だというへりくだった心のゆえだった。しかし、モーセがひとまず従おうと決断して、エジプトに向かって出発してからは、肉の思いを徹底的に打ち砕いて従ったので、驚くべき神の力を現したことが見られる。

このようなモーセとは違って、ほとんどの人は簡単に肉の思いが捨てられない。神のみことばを数えきれないほど聞いて、力あるわざを見ても、相変わらず肉の思いを働かす。従いさえすれば神が働かれると言っても、相変わらずためらっていて、自分の思いと知恵に従って行く。

以下は筆者の証しである。

多くの方が私のところに来て言う。「堂会長先生は完全に聖霊に働きかけられていると信じてます。」あるいは「何か言われさえすれば、それに従います。」何かの事について決裁を受けたり、私の意見を尋ねたりする時も、それなりに神に認められている牧者を信頼する心で、私が聖霊の声を聞いてそのまま答えてくれることを期待してそうするのである。

ところが、実際、私の話を聞いてからの行いを見れば、本当に私の話を信頼して従うのではなく、自分の思いを働かして行くことがよくある。ある方は「教会で解決すべき多くのことの中で優先順位をどうしたらいいのでしょうか？」と聞いたので、私が答えたことがある。後で結果を見ると、全然違う処理をしたのである。本当はその方は私の言葉に従おうとしたが、後になると他のことがもっと緊急に見えて、私が言ったとおりに従えなかった

ということだった。

私が聖霊に働きかけられたなら、聖霊がこれから迫ってくる状況を知らないで、優先順位を教えてくださいませんか？ 私が聞いた聖霊の声より現実を見て行ったそのほうが正しかったなら、初めから私のところに来て聞く必要もないのである。

数えきれない神のわざを見ながら、神が牧者とともに歩まれていることを信じるとは言っても、いざ現実に直面すると、相変わらず残っている肉の思いが従わないように遮るのである。

#### b) エリシャの言葉に聞き従わなかったある侍従

いくら神の力を見ても、心がかたくなで相変わらず信じられなくて従わない人は、その肉の思いのゆえ不従順だけを生み続けて、結局、死に向かうことが見られる。エリシャの時代にもこのような人がいた。

アラムの王がサマリヤに上って来て、これを包囲したので、サマリヤの人々は飢え死になりそうになった。はなはだしきは女たちが自分の子どもを食べるほどだった。こういう中でエリシャがイスラエルの王のもとに来て、【主】が、あすの今ごろ、この飢饉がなくなり、食べ物が多くなるようにされるだろうと宣言するのだった（第二列王7章）。

ところが、王の侍従のひとりにはこれがどうも信じられなかった。殺気立っているアラム軍が町を包囲しているのに、自分たちにはアラム軍を退ける力もなく、助けてくれる支援軍も期待できない。外部から食糧を持ってくる方法も全くなかった。こういう状況で、どうしたら一日で食糧が豊かになるというのだろうか？

このような思いのゆえ、侍従は「たとい、【主】が天に窓を作られるにしても、そんなことがあるだろうか。」と否定する言葉を口に出してしまった。ところが、これはまことに怖い結果をもたらした。エリシャが宣言した神のおことばに正面から立ち向かうことだったからである。

侍従の言葉を聞いたエリシャは、彼に向かって言った。「確かに、あなたは自分の目でそれを見るが、それを食べることはできない。」そして、翌日、神のおことばはそのとおりになった。神が町を包囲していたアラムの陣営に戦車の響き、馬のいななき、大軍勢の騒ぎを聞かせられたのだ。大軍勢が実際にやって来たのではなく、全能の神の力によって軍勢の騒ぎが聞こえてくるようにされたのである。

アラム軍は大軍勢の騒ぎを聞いて、イスラエルの支援軍がやって来て、自分たちを攻撃していると思った。それで、あわてて包囲を解いて行ってしまった。すべての武器と食糧、あらゆる物資をそのまま置き去りにして、逃げ去ったのであった。このようにアラム軍が置き去りにした物資のおかげでサマリヤの町のききんは直ちに解決され、その日から豊かに食べられた。ところが、これと同時に、肉の思いのため神のおことばに立ち向かった侍従にも、呪いがそのまま臨んでしまった。

侍従は門の管理に当たっていて、食糧を求めるために出て行く民を制しようとしたが、民に踏みつけられて死んだ。神のみわざを見てはいたが、食べられなかったのである。

私たちの神も、私たちが肉の思いを打ち砕かないと、何が何でも責められるのではない。

まず神を信じることができる証拠を見せて、少しずつ従うよう体験するように導かれ、思いを打ち砕くように助けてくださる。しかし、数えきれないほど神のわざを見ながらも、最後まで心をかたくなにして、肉の思いにこだわり、神に立ち向かった人は、敵である悪魔に属していて、結局、死の道に向かうのだ。

エリシャに呪われて死んだイスラエルの侍従も、やはり同じだった。イスラエルでは、全国にエリシャを通して無数に現れる神の力を聞かなかった人がほとんどいないほどだった。イスラエルの王も、人々からエリシャが行った数多くの神の力あるわざをよく聞いていて、自分が直接その力を体験したこともあった。

一例として、アラムの王がイスラエルと戦っていたとき、彼が家来たちと相談して決めた軍事機密でさえ、神はエリシャにあらかじめ知らせてくださった。それで、エリシャがイスラエルの王に知らせると、イスラエルの王はアラムの王が攻撃しようとする場所に軍隊を送って警戒した。エリシャの言葉に従ったので、国家的な危機を免れることができたのだ。

これを知ったアラムの王は、自分が勝つためには、まずエリシャを捕らえるべきと思って、エリシャがとどまっている町を包囲した。しかし、神がエリシャのためにアラム軍を打って盲目にされたので、かえってアラム軍がイスラエル軍にみな捕われてしまった。

このように、エリシャが神に認められていることは王が直接体験したことだけでもすでに数回なのに、王の側近にいる侍従がエリシャに現れる神の力を知らないはずがない。それでもこの侍従は相変わらず肉の思いによって、神のみわざを否定することを言って、結局、死に至ったのだ。

## 7. 肉の思いを捨てれば聞き従える

〈イザヤ55:8-9〉に「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。——【主】の御告げ——天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。」とある。また、〈第一コリント1:25〉には「なぜなら、神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。」とある。

神の知恵で何かの事をつかさどられるとき、人の思いとは全く合わないことがよくあるが、自分の思いを捨てて、そのとおりに従う人は、人としてはできないみわざを見るのである。自分の思いに合わなくても、神のみこころに従うなら神のみわざが見られる。

### a) ペテロの例

ゲネサレ湖の漁師だったペテロは、イエス様に出会った瞬間からこういう体験をした。いつものように魚をとりに行ったペテロは、この日はどうしたのか、夜通し働いたが、何一つとれなかったので、しょんぼりと網を洗っていた。

ところが、イエスという方が群衆に教えるために自分の舟を使おうとされるのだった。ペテロが噂で聞いたのは、このイエスという方は神の力によって不思議としるしを行われるということだった。ちょうど自分の舟で教えているおことばを聞いてみると、本当に神

の人だという信仰が生じた。

さて、おことばを終えたイエス様はペテロのほうに来られ、「深みに漕ぎ出して、網をおろして魚をとりなさい。」と言われた（ルカ 5:4）。小さい頃から魚をとってきたペテロであり、湖のどこに行けば魚がよくとれるのか、いつ出て行ってこそよくとれるのか、誰よりよく知っている。それには専門家というわけである。そのような自分が夜通し働いたが、何一つとれなかったのに、漁師でもないイエス様がこのように指示されるのだった。

夜通し働いて疲れた身であり、面倒な網の手入れもすでに終えたところである。イエス様のおことばどおり出て行って、再び何一つ取れなく帰ってくるなら、どれほど空しくてつらいだろう。自分の思いにこだわる人だったら、「イエス様は魚をとって見たことがありますか？」と確認してみることもある。あるいは「魚をとるのは私のほうがよく知っています。」と無視してしまうこともあり、「きょうは終わりにしたので、後ではいけないでしょうか？」と言うこともある。

しかし、ペテロはそうしなかった。「先生。私たちは、夜通し働きましたが何一つとれませんでした。でもおことばどおり、網をおろしてみましよう。」と、直ちに従って出て行った。すると驚くことに、ペテロの網の中にたくさんの魚が入り、網が破れそうになった。それから、イエス様を信頼するようになったペテロは、イエス様の弟子になり付き従うようになった。

ある日、宮の納入金を集める人がペテロのところに来て、イエス様から宮の納入金をも集めようとした。するとイエス様は「湖に行つて釣りをして、最初に釣れた魚を取りなさい。その口をあけるとスタテル一枚が見つかるから、それを取つて、わたしとあなたとの分として納めなさい。」と言われた。

世の中のどの魚がよりによつてその瞬間に、しかも正確にその金額をくわえてペテロのところに来て、つかまるだろうか？ しかし、思いを働かさず信じて従うとき、みわざが起こつたのである。

筆者の証しを紹介しよう。

私が遠い昔、農村のある教会にリバイバル聖会を導きに行つたことがある。その時もやはり、腰が曲がつた方がまっすぐになるなど、あらゆる神の力が現れたが、聖会中、神が聖徒たちを祝福しようと、こう命じられた。その年は唐辛子を植えなさいということだった。唐辛子を植えれば、豊作になるようにしてくださるとのことだった。

もともとその年は、誰も唐辛子を栽培しようとしていなかった。その前の年に唐辛子が凶作で、全滅だったからである。その教会の方々は一生農業をしてきた農夫であり、私よりはるかに農業をよく知っているのに、肉の思いを働かさずなら、どうして私が言うとおりにできるだろうか？

しかし、聖徒の皆さんはすでに私が現す神の力を見て、神がこのように言われると私が言つたら、ほとんどの方が信じて従つた。従つた方はその年に大豊作になり、とても祝福された。しかし、このように多くの方が祝福されている時も、「去年は凶作だったのに」と思つて従わなかつた方は、何も祝福されなかつた。

イエス様と一緒にいた弟子たちは、このように従えば神のみわざが現れるという体験を数えきれないほどした。イエス様がエルサレムに入る時は、弟子たちを使いに出して、ろばをほどいて引いてくるようにと言われた。「向こうの村へ行きなさい。村に入るとすぐ、まだだれも乗ったことのない、ろばの子が、つないであるのに気がつくでしょう。それをほどいて、引いて来なさい。もし、『なぜそんなことをするのか』と言う人があったら、『主がお入用なのです。すぐに、またここに送り返されます』と言いなさい。」(マルコ 11:2-3)

イエス様がそこに行ったことがあるのでもないのに、そこにろばがいることをどうして知っておられたらどうか？ たとえろばがいたとしても、主人にお金を支払ったのでもないのに、他人のろばをほどいて引いてきなさいなどと、まかり間違えば泥棒に仕立てられることもあるだろう。あれこれ考えるなら従えないことだが、弟子たちにはすでにイエス様への信頼があったので、肉の思いを働かさなかった。

弟子たちが「アーメン」と言って従い、行ってみたら本当にそこにはろばがつないであった。イエス様が命じられたとおりに言うと、主人も素直にろばを渡してくれたのだった。このようにイエス様とともに歩んで従う一瞬が、弟子たちには驚くべき神のみわざを体験する奇蹟の瞬間だったのだ。

こういう体験を通して肉の思いを打ち砕く訓練を積み上げていったので、弟子たちはイエス様から遣わされたとき、自分たちも神の力あるわざを行うことができた。〈マルコ 6:12-13〉に、十二弟子がイエス様に遣わされたとき、悪霊を追い出して、病人をいやす場面があり、〈ルカ 10:17〉には、七十人の弟子が伝道旅行から帰って来て、「主よ。あなたの御名を使うと、悪霊どもでさえ、私たちに服従します。」と喜んでるのが見られる。

## b) ヨシュアとカレブ

モーセの後についてエジプトから出たイスラエルの民は、カナンの地に至るまで数えきれない奇蹟を体験した。全能の神はモーセが祈ることは何でもかなえてくださったのである。あの怖いパロ王が天から下る十の災いに遭って、自分たちを奴隷から解放してくれるのを見た。

葦の海が分かれるのを見て、その海を歩いて渡った。苦くて飲むことができなかった水が甘い水に変わるのを見て、岩を打つと岩から水が出るのも見た。天からマナが露のように降りるのを見て、突然うずらが飛んで来て、宿営をおおうのを集め、満ち足りるほど食べた。雲の柱と火の柱が昼も夜も自分たちを守っているのを見て、神がともにおられる証拠をいつも見ながら過ごした。

それでも約束の地カナンを目の前にして、その地をひどく悪く言いふらして神を恨んだ。また、その地の住民は、力強くて背の高い者なのに、自分たちはイナゴのようなので、戦ってみな死ぬだろうと言って泣いたのだ。

今まで神が十の災いを下されたことも、葦の海を分けてくださったことも、みな忘れてしまった。岩から水が出るようにされたのも忘れて、自分たちが天から降りた糧を食べたということも全く忘れていた。すべての不思議とするしを見せられた神をあっという間に無能な神にしてしまったのである。

その中で、ただヨシュアとカレブふたりだけが肉の思いを働かしたのではなく、信仰の目で望んで告白した。〈民数記14:8-9〉に「もし、私たちが【主】の御心にかなえば、私たちをあのに導き入れ、それを私たちに下さるだろう。あのにには、乳と蜜とが流れている。ただ、【主】にそむいてはならない。その地の人々を恐れてはならない。彼らは私たちのえじきとなるからだ。彼らの守りは、彼らから取り去られている。しかし【主】が私たちとともにおられるのだ。彼らを恐れてはならない。」とある。

この告白のゆえ、イスラエルのすべての民が荒野で死んでも、ヨシュアとカレブだけは乳と蜜の流れるカナンの地に入れたのである。モーセの当時よりはるかに大きくて数えきれない不思議とするしをいつも体験しながら信仰生活をしていても、イスラエルの民がそうだったように、心を変えず、肉の思いを捨てないなら、いくら時間が経っても、従うことも祝福されることもできない。

神に対して反抗する肉の思いを徹底的に捨てて、ただ従わなければならない。それで、決して従わなかったイスラエルの民のようにならないで、ヨシュア、カレブのように大胆に「彼らは私たちのえじきとなるからだ。主が私たちとともにおられるのだ。」と告白できる信仰の子どもにならなければいけない。

人にはどうていできないことも、神の力では可能だという信仰をもって神を信頼するほど、肉の思いを打ち砕くようになる。すると従えないことにも従う行いが伴う。そして、従っても、その行いの程度によって祝福も変わってくる。

### c) 預言者のともがらの妻の例

〈第二列王 4 章〉に出てくるひとりの女を見ると、このようなことがよくわかる。驚くべき力を行った神の人エリシャの時代に、預言者のともがらだったあるしもべが、妻と息子たちに多くの借金を残したまま死んでしまった。これを解決する方法がなくて、ふたりの息子がどちらも奴隷に売られるようになったその妻は、エリシャのところに来て助けを求めた。すると、エリシャは「家にどんな物があるか、言いなさい。」と言った。

この時、彼女に残されたものは、ただ油のつぼ一つしかなかった。エリシャは彼女に「外に出て行って、隣の人みなから、器を借りて来なさい。からの器を。それも、一つ二つではいけません。家にはいったなら、あなたと子どもたちのうしろの戸を閉じなさい。そのすべての器に油をつぎなさい。いっぱいになったものはわきに置きなさい。」と言った。

油のつぼ一つに入っている量はそんなに多くないのに、どうして隣の人みなから、器を借りて来なさいと言うのだろうか？ しかし、彼女は、思いを働かさず、聞き従って、器をたくさん借りてきて、油をつぎ始めた。ところが、驚いたことに、一つ、二つ、つぼの下に置けば、油は絶えず流れ出て、器を満たすのだった。

彼女が思いを働かさず、どれほど多くの器を借りて来たかはわからないけれど、従って借りてきた器の数ほど祝福された。器にいっぱいになった油を売って、借金を返してふたりの息子と生きていく生計費が用意できたのである。

以下は筆者の証しである。

私も、本教会を開拓したとき、このようなことを経験した。当時、聖殿を契約するためには、すぐ 300 万ウォンという大金が必要だったが、私にはたった 7 千ウォンしかなかった。しかし、神にはすでに聖殿のために備えられた計画があった。

聖徒のひとりが、かなり前に 300 万ウォンの献金を神にささげようとしたが、その時までささげていないでいた。それで、その聖徒が今、聖殿のために献金するようにと心に示されたのである。ところが、ただささげなさいと言うのではなく、ささげられる方法を教えてくださったのだ。その時、この方が住んでいた家を売ろうとしたが、二年過ぎても全く売れる兆しがなかったのである。二年の間にだんだん家の価格を下げて、2200 万ウォンから 1500 万ウォンまで下げたのに、相変わらず買う人がいなくて困っているところだった。

ところが、神が聖霊の働きによって教えてくださった。この方が三日断食をささげてから、信仰のとおり家の価格を上げて出せば、その週に売れるようにしてくださると言われたのだ。そうしたら、そのお金から約束した献金をささげなさいということだったのである。現実的に思えば、価格を下げても売れないところなのに、上げなさいと言うなら理解できないことだろう。

このように思いを働かすなら、とうてい話にならないことだったが、この方は神のおことばなので従いはした。しかし、精一杯信仰を見せて、やっと 200 万ウォン上げたのだった。私が「200 万ウォンはあまりも少ないのでは？」と言ったら、それに 100 万ウォンを足して、1800 万ウォンで出した。

結果は、当然、神のおことばどおりになった。正確にその週に家の買い手が現れた。その人はその家がとても気に入って、買おうと前から思っていたが、今までお金が用意できなくて買えなかったと言うのだった。今やっとお金が都合できたので、ひょっとして売れたらどうしようと気をもみながら急いで来たのに、思ったよりずっと安く買えた喜んで、直ちに契約をしたとのことだった。

結果的に、この方は思いを打ち砕いて信仰を見せた分祝福されて、約束した献金をささげることができた。そして、神が備えられたこの献金で、初めての聖殿が契約できた。この時、仮にこの聖徒がもっと信仰を見せて、500 万ウォン以上上げて、十分に売れたはずだった。

しかし、やもめが油で祝福された時も、自分が器を借りて来た分は祝福されたように、この方の祝福もやはり、思いを働かさなかつた分、信仰を見せた分、臨んだのである。すべてのことに思いを働かさない分、聞き従って信仰を見せた分、限界のない神の力が体験できるということをおかなくてはならない。

エリシャの話聞いたやもめが思いを働かさず従えたのは、エリシャを通して現れる数えきれない神の力について聞いたことがあったからである。その証拠によってエリシャが神の人であることと、また、エリシャのことばが神が直接言われたおことばのようだ信じられたので、従えたのである。

## 8. 肉の思いなしに従えば、祝福と神の力を体験する

エリシャを通して現れる神の力を見た人が、思いを打ち砕いて、エリシャの言葉に従っ

たとき、神のみわざを体験したように、イエス様の弟子たちもやはり、イエス様の御力を通して肉の思いが打ち砕かれるほど、だんだん驚くべき経験をするようになった。

特に、性分が特別に大胆なペテロは、思いを働かさず従って、他の人より多くの体験ができた。魚の口からお金を取り出してきたり、イエス様がお乗りになるろばを引いてきたりした。それだけでなく、ペテロはイエス様のおことばなら、どんな条件もつけず思いを働かさず、水の上を歩くことさえした。イエス様が海の上を歩いて来られるのを見たペテロは、イエス様が命じさえすれば、自分も歩けるという気がした。イエスが「来なさい。」と言われると、直ちに従って、ペテロは舟から出て行った。すると、本当に水の上を歩くことができたのである。

ところが、歩いている間に、ペテロはついに思いを働かしてしまった。風が吹いてきて、高い波がのみ込むように立つのを見て、一瞬怖くなり、そのように思いを働かしたらすぐ沈みかけるようになったのだ。

父なる神は確かに全能なる方だが、私たちが肉の思いを働かさない分、その力が体験できるのである。肉の思いを働かさずに従う時は神の力によって水の上でも歩けるが、思いを働かした瞬間、水の中に沈みかけていく。

肉の思いというものは、私たちが肉の世界に縛っておくので、神の力が体験できないようにする鎖になるのである。この肉の思いという鎖さえ捨ててしまうなら、いくらでも神の細やかな導きとみわざが体験できるのである。

筆者の証しである。

私の周りにいる働き人たちはいつもそのようなことを体験している。たとえば、いつかりバイバル聖会の途中、私が「不思議」についてメッセージを伝えながら、海外から来られた牧会者の皆さんが帰国する前に、このようなことが体験できるようにと、働き人たちに頼んだことがある。その時も、それを聞いた働き人たちが肉の思いを働かさず従うと、翌日出国した方であっても、雲はもちろん、虹まで現れるみわざを体験してから帰国することができた。

もう一つの例として、海外宣教に行く時も、何か事情があつてスケジュールが突然変わると、ホテルや交通の便を急いで探さなければならないことがある。ところが、あらかじめ予約しておかないなら、そんなに急に見つからないことがほとんどである。海外まで行ってホテルが見つからないなら、どれほど困るだろうか。しかし、本教会の働き人たちはいつも神の力を体験してきたので、そうようになっても思いを働かさない。確かに神が備えておられると信じて出て行けば、どんな方法でも神が道を開いてくださることが見られる。

<イザヤ 30:21>に「あなたが右に行くにも左に行くにも、あなたの耳はうしろから『これが道だ。これに歩め』と言うことばを聞く。」とある。神は、何としてでもご自身の子どもたちを榮えて祝福される道に導こうと願われる。左にも右にもそれないで、ただ神が喜ばれる道にだけ真っすぐに行って、すみやかに御霊の戦士となり、豊かに祝福されることを望んでおられる。



それで、まだ聖霊が来られなかった旧約時代には、特別に神と交わっていた預言者を用いて、神のみこころが何か教えてくださった。神の民が預言者の言うことを信じて従う時は、そのとおりに神に導かれて、栄えて祝福されることができた。

また、イエス様の時代は、神とお一つであられるイエス様を通して神のみこころを知って従うと、従った人はみな驚くべき神の力が体験できた。

今日は、心の中におられる聖霊が神のみこころを教えてください。誰でも切なる心で聖霊の声に耳を傾けて、その声に従いさせれば、すべてのことに驚く神の力を体験して、力ある人生を送ることができる。

聖霊の声を聞いて導かれることは、信仰が大きい人だけにできるのではなく、救われて聖霊を受けた聖徒のすべてができなければならない。誰でも信仰のある神の子どもならば、すべての思いを打ち砕いて、ただ神のみことばに従って、すべてのことに右にも左にもそれることなく、祝福の道にだけ導かれなければならない。

## 第4章

### 聖霊の声を聞く深さ

#### 1. ふとよぎる思いまで顧みなければならない

今まで「霊、たましい、からだ」をはじめ、多くの説教で肉の思いについて聞いて、それなりに自分にある肉の思いを発見して打ち砕こうと努力してきたと思う。しかし、御霊の歩みに完全に入る前は、肉の思いを全部捨てたとは言えない。日常生活の中でも、自分でも知らないうちに肉の思いが働くことがあまりにも多いからだ。これらのものを発見して捨てるためには、絶えず自分を振り返って祈りながら、ふとよぎる思いまで聖霊に悟らせていただかなければならない。

筆者の周りで起こったことを例に挙げてみよう。

たとえば、ある方は自分の業務に関して、私に報告を確かにしたと思っているのに、私は報告を受けていないと言うことがある。すると、この方は「堂会長先生は確かに報告を受けたが、忙しいから忘れられたのだろう」と思う。しかし、一、二度でなく、このようなことが続いたら、何かおかしいのではないだろうか？ そのたびに私が忘れてしまったのでなく、何かそのように言う理由があるのだ。

働き人が業務で何かの報告をするなら、教会の中には一定の報告様式があって、また、その報告を通して私が知りたい内容がある。ところが、この方は規定どおり様式も備えていないし、私が知りたい内容は報告に入れないうまま、自分のやり方に従って大まかに書いてあるので、私のほうからは報告を受けていないのと変わらない。

数回言っても直さないから、私はただ、報告はを受けていないと言うだけである。その方が本当に神のしもべを信頼するなら、「なぜあのように言われるのだろうか？」と自分を振り返って、また、祈って聖霊の声を求めなければならない。堂会長先生が忘れてしまったとだけ思っているなら、いつもそこからの発展がないのである。

#### 2. 聖霊の声を明らかに聞く例

しかし、絶えず自分を振り返って祈りながら変えられる人は、聖霊の声をもっと明らかに聞いていく。

これも筆者の周りで起こったことである。

ある日、私が堂会長室である方と話しながら、ティッシュ一枚を取って使って、ゴミ箱に捨てないで手の届く所に置いたことがある。しばらく経って話が終わった後、この方が出て行こうとしたが、私が置いたティッシュをゴミ箱に捨てようとするのだった。私が「そのままにしておいてください」と言っても、この方はわざわざ「捨てさせていただきます」

とゴミ箱に捨てた。

私がゴミ箱に捨てなかった理由は、捨てるのが難しかったり、面倒でそうしたのではない。きれいに掃除してあるゴミ箱にそのティッシュを捨てれば、その一つのために掃除の方がもう一度苦勞しなければならぬから、ポケットに入れて帰ってから捨てようとしたのである。ところが、この方は私のために思って、自分が良いと思うとおりにしたのだ。もちろん私のためにする心は知っていたので、私はその方がするままにしておいた。

ところで、しばらく経ってから、この方が祈っているうちに聖霊の声で悟らせてくださった。私のところに来て、「この前、堂会長先生が捨てなくていいと言われたのには理由があったのでしょ、自分の思いが働いて従いませんでした」と悔い改めるのであった。しばらく思いを働かせたけれど、心の底から従おうとしているので、後になっても聖霊が悟らせてくださったのである。その出来事自体はささいなことであり、何かの悪を行ったのではないが、すべてのことに肉の思いを発見して変えられようとする心がどれほど尊いだろうか。このような心なら、それからはずっと心に留めて、同じ過ちは犯さないようにするはずであり、それほど早く霊的に成長できる。

自分なりに聖霊の声を聞くとしても、人によってその程度と水準にはみな違いがある。聖書を読んでも、このような違いが見られる。

ダビデの場合は、すべてのことに神のみこころを伺って、神に導かれた。敵軍と戦う時は「戦うべきでしょうか、そうしないでしょうか」、また「どういう方法で戦いましょうか」と神に伺って戦争に臨んだし、サウルが追いかけてくる緊急な状況でも、どうするのか決める前に、まず神に伺った。そのたびに答えられた神に導かれて、ダビデはいつも危機を逃れて、戦争でも勝利できたのである。

### 3. すべてのことに神に頼ってこそ聖霊の声を明らかに聞く

ところが、ダビデとは違って、〈ヨシュア 9 章〉に、モーセの後継者ヨシュアが神のみこころを伺わなかったので、過ちを犯した場面が記されている。

神はヨシュアにカナンを征服せよと言われ、その地のすべての住民と和を講じないで、戦ってみな滅ぼせと言われる。ところが、ある日、ある民の使いたちがヨシュアのところに来て、盟約を結ぶことを願うのだった。自分たちは遠い国に住んでいる民なので、出た日に準備したパンはみなかわいて、ぼろぼろになってしまい、袋とぶどう酒の皮袋が古びるほど長い旅をしてきたと言う。すなわち、近くの住民でなく、遠い国から来たので、自分たちを滅ぼさないように盟約を結ぼうということなのだ。ぼろぼろになってしまったパンと古びた袋など、彼らが見せる証拠があまりにも確かに思えて、ヨシュアは彼らと和を講じ、彼らを生かしてやると誓った。

しかし、これが間違いだった。ヨシュアが少しでも決定を後にして、神の指示をあおいだなら、この使いたちが実は近くに住んでいるキブオン部族で、戦争を避けるためにヨシュアをだましたことを知っただろう。

ヨシュアが後でこの事実を知った時は、すでに神の御前で和を講じると誓った後だった

ので、彼らを滅ぼすことができなくなった。そのため、カナン征服史で「カナンの住民を全部滅ぼせ」と言われた神のみことばに従わなかった汚点を残してしまった。

もちろん、これがヨシュアには骨の髄まで教訓になり、二度とこのような過ちを繰り返さなかつたらう。しかし、ただ従って、あふれていたヨルダン川をせき止めて、難攻不落のエリコ城を崩れさせた信仰の人ヨシュアでさえ、このような過ちがあったということを知っておくなら、すべてのことにさらに自分を低くして、神のみこころを求めなければならないのである。あせって自分の思いを先立たせるのではなく、静かに聖霊の声に耳を傾けなければならない。このようにすべてのことにおいて神に頼るなら、聖霊の声を明らかに聞いて、何をしても神に守られて導かれることができる。

#### 4. 人によって聖霊の声を聞く深さが違う

聖霊の声を聞くとしても、その深さは人によって違ってくる。心を真理で満たすほど、肉の思いを捨てて従うほど、さらに深くて正確な声が聞けるのだ。

たとえば、〈使徒 21 章〉に、パウロが心に働きかけられてエルサレムへ行く途中、何人かの人が使徒パウロについての将来の事を知って、パウロに勧める場面が出てくる。〈使徒 21:4〉には、ツロという地方の弟子たちが、御霊に示されて、パウロにエルサレムに上らぬようにと忠告した。そこを離れて、カイザリヤに着くと、今度はアガボという預言者が来て、パウロの帯を取り、自分の両手と両足を縛って、『この帯の持ち主は、エルサレムでユダヤ人に、こんなふうには縛られ、異邦人の手に渡される』と聖霊がお告げになっています」と言った。

これを聞いた人々は驚いて恐れ、使徒パウロにエルサレムに上らないようにと頼んだ。彼らが御霊に示されて受けた内容、すなわち、パウロがエルサレムに上ると、苦しみを受けて異邦人の手に渡されるということは、確かに聖霊が教えてくださったことである。しかし、彼らをもっと深く聖霊の声を聞いたなら、パウロにエルサレムに上らないようにとは言わなかつたらう。

使徒パウロに向けられた神のみこころは、たとえ迫害と患難があっても、エルサレムに上り、福音をもっと広く伝えることだったからである。それでこそパウロによってローマまで福音が伝えられて、より大きい神の栄光を現すことができるからなのだ。

他の人々とは違って、聖霊の声を正確に聞いていて、神のみこころを明らかに知っていた使徒パウロは、自分を引き止める人々の話を聞かなかつた。それだけでなく、〈使徒 20:22-24〉を読むと、使徒パウロは彼らが預言する前に、自分が行く道が苦しみの道であることをすでに知っていた。「いま私は、心を縛られて、エルサレムに上る途中です。」また「ただわかっているのは、聖霊がどの町でも私にはっきりとあかしされて、なわめと苦しみが私を待っているとされることです。けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。」と決然として言っている。

同じ聖霊の声を聞いたけれど、その声に加えて肉の思いを働かした人々は、神のみここ

ろと反対になることを言った。たとえ使徒パウロのいのちを大切に思って、彼を愛する良い意図で言ったとしても、これは神に対して反抗する肉の思いなのだ。

しかし、肉の思いを働かさなかった使徒パウロは、もっと正確で深く聖霊の声を聞いたので、神のみこころを正しくわきまえることができた。〈ローマ 8:17〉にも、このように神の御霊に導かれてる人々について「もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人です。」とある。このように、使徒パウロはどんな苦難に遭っても、神のみこころならその通り聞き従える人だったので、いのちを惜しまない従順の行いによって天国で輝く栄光の座につけたのである。

したがって、聖霊の声を聞くとしても、もっと深くて正確に聞けることを求めて、完全に神のみこころに従うことができなければならない。

# 第3部

## 御霊の実

「しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法はありません。」(ガラテヤ 5:22-23)

### 第1章

#### 御霊の実の重要性

##### 1. なぜ御霊の実のみことばを心の糧としなければならないのか

私たちがイエス様を救い主として受け入れて、聖霊を受ければ、神の子どもとされる特権が与えられる。すると、それからは当然、世の人とは聖別された生き方をしなければならない。自分の欲に従って生きてきた、肉にある生き方を捨てて、御霊の導きを追い求める、真理の生き方をしなければならない。

そして、このように御霊に導かれて生きる人には、その証拠として御霊の実が結ばれる。したがって、正しい信仰生活をしていく人なら、当然、御霊の実が結ばれているはずであり、毎日その実が育たなければならない。もし10歳の子どものように行なうなら、それが正常ではないように、信仰歴に応じて信仰の成長があつてこそ、正しい信仰生活になるのである。

ところが、もし足踏みしているなまぬるい信仰生活をしたり、むしろ後退しているなら、それはまことの信仰を持っていないという証拠である。ところで、霊的なまことの信仰は、御霊の実を結んでいくほど与えられる。自分が持ちたいからといって霊の信仰が生じるのではなく、御霊の実を結ぶことによって、心を真理に耕したほど、神が上から信じられる霊の信仰を与えられるのである。

それで、御霊の実を結んだ分、その信仰の量りに応じて働かれるのだ。ところで、御霊の実を結ぶためには、何よりもまず熱心に主を呼び求めて祈らなければならない。そして、聖霊に助けられて、父なる神のみことばを昼も夜も口ずさみ、善の中を、光の中を、義の中を歩んでいなければならない。

その時、心に御霊の実が結ばれるのであり、完全に結ばれるほど聖められて、主のご性質に似せられて、失った父なる神のかたちを取り戻すようになる。したがって、聖潔を目標として走って行く人は、御霊の九つの実のみことばを信仰生活の指針として、毎日自分を顧みて、変えられなければならない。それでこそ、主が再び来られるその日は、しみも傷もない姿で、美しく備えられた主の花嫁として、主を迎えることができる。

御霊の九つの実は、神を信じる子どもの信仰生活においてとても重要なので、これを通してどれほど自分の信仰が成長してきたのか、チェックできるだろう。

御霊の九つの実と〈マタイ 5 章〉にある八つの幸い、そして、〈第一コリント 13 章〉愛の章は、クリスチャンの信仰を顧みるのに重要な尺度になるみことばである。それぞれどれほど霊に変えられて、どの段階の信仰に達したのか、このようなみことばに照らしてみればチェックできるからだ。

信仰生活を長くしたからとか、聖書を知識としてたくさん知っているからといって、信仰が大きいのではなく、自分にこのような霊的な実がどれほど結ばれているのかが信仰の尺度になる。したがって、信仰生活をしていく過程で「はたして自分は神のみことばに照らしてどれほど御霊の人になっているのか」を自分でチェックするように、神がこのように基準になるみことばを下さったのだ。

このようなみことばに照らしてみると、あれほど求めている天国、それも一番栄えある美しい「新しいエルサレム」という最終目標にも、どれほど近づいているのかわかるのだ。御霊の九つの実と八つの幸い、そして愛の章の実が結ばれていてこそ、少なくとも信仰の四段階、すなわち、三天層の天国に入れると言えるからである。

ある所に行こうとするなら、目標地点を知って行くのと、知らずに行くのとでは全く違う。たとえば、全羅南道ムアンで夏のキャンプをしよう。ソウルの本教会から出発してムアンに行くなら、途中通っていく所が多くある。その中にはスウォン、テジョン、クァンジュなどの大きい都市もあり、小さい村、町もあるだろう。

ところが、小さい村の名前までも全部知っている人もいるだろうが、あらかし大きい都市だけ知っている人のほうが多いだろう。しかし、少なくとも大都市だけ知っていても、「ああ、今、どの辺に来てる」くらいはわかるだろう。「今までどれくらい来ていて、今からどれほど行けば着くのか、次に通る都市はどこなのか」まさにこれらがわかるのだ。それだけでなく、自分が今、ムアンという目標地点に正しく向かっているのか、でなければ間違った方向に向かっているのかも知ることができる。このように、目標を確かに知っていて、またその目標に着くために、通らなければならない都市や村をはっきり知っていると、その人は目標地点に正確に到着できるのだ。

天国に行くのもこれと同じである。しかし、天国へ行く道はこの地上でのある場所を訪ねて行くのと違うことがある。それは、この地上では道を探す時は、たとえ自分は全く道を知らなくても、知っている人にさえついて行けば行けることもあるが、天国に行く道はそうではない。天国は、そばにいる人について行くからといって一緒に行けるのではなく、ひとりひとりの信仰によって救われて行くところなので、自分で天国に行く道を知らなければならない。そして、その天国に行く道が神のみことばである聖書 66 巻に入っている。

だが、信仰生活をしていても、皆が聖書 66 巻のみことばをすべて知っているのではない。もちろん、信仰が成長して御霊の歩みに入ってくるほど、66 巻の神のみことばを全部心に耕すようになるが、それをすべて覚えてはいないこともある。

しかし、私たちが目標とする天国、その中でも新しいエルサレムにまっすぐに行くため

には、かりに神のみことば 66 巻を全部覚えておくことはできないけれど、必ず覚えておくべきみことばがある。それは、ムアンに行くとき、正しい道に行くためには、小さい村まではすべて 知ってはいなくても、大きい都市は知っていなければならないことのようにだ。

それで、聖書にも、このように大きい都市の役割、すなわち、目標点に行く途中、大きい停留所のような役割をしてくれるみことばがある。それがまさに先に挙げた御霊の九つの実と八つの幸い、そして愛の章のみことばである。

したがって、天国に行くためにこの地上で信仰生活していく間、これらのみことばは必ず知って悟り、心の糧としなければならない。それでこそ自分が今、天国に行く道でどれほど聖められて、新しいエルサレムに近づいているのか、また、花婿である私たちの主にどれほど似せられているのかをわきまえて知って、信仰生活をしていけるのである。

## 2. 御霊の実を結ぶまで

この地上でも、種を蒔けばその刈り取りもするのが自然の法則であるように、霊の世界でも必ず蒔けばその刈り取りもするようになっていく。しかし、これにも法則があるので、多く蒔いたからといって、必ず多く刈り取るのではない。どれほど良い地に種を蒔いて、また、どれほど心を込めて世話をしたかも大切である。ただ種を蒔いておくだけでは、鳥や動物が来てその種を食べてしまうこともあり、熱い太陽の光に耐えられなくて焼けてしまったり、芽を出してもすぐ枯れてしまったりすることがある。

これは霊の世界でも同じである。聖書を見ると、神はみことばを種にたとえておられる。すなわち、礼拝をささげて、みことばを聞くことが、ちょうど心という地に種を蒔く作業と同じだということだ。

ところが、同じように礼拝に参加して、神のみことばを聞いたとしても、言いかえれば、心にみことばの種を蒔いたとしても、その結果は人によって変わってくる。

ある人は聞いたみことばがしばらく経ったら芽を出して、花を咲かせて実を結ぶかと思えば、ある人は礼拝をささげているその場で、サタンがみことばの種を奪っていくこともある。また、その場では芽を出しているようだが、すぐ乾いてしまったり、芽を出してはいるが、それ以上育てないので実が結べないこともある。また、実を結んでもみな同じなのではなく、人によってそれぞれ違うことが見られる。

もし今まで聞いてきた数多くのみことばを心によく蒔いて、みことばに従って火のように祈りながらよく育ててきたとすれば、短い間にも豊かな実を結んだだろう。まさに御霊の実がたわわに結ばれるようになるのだ。

したがって、神のみことばの種を蒔いて、豊かな実を結ぶためには、どれほど多くの種を蒔いたかも大切だが、もっと大切なのは、種をどれほど良い地に蒔いて、よく育てたかということである。言いかえれば、神のみことばの種が芽を出して、花を咲かせて豊かな実を結ぶためには、まず自分の心という地から石や雑草のような悪はどんな悪でもをすみやかに取り除いて、良い地にしなければならない。

そして、その地に種を蒔いた後も、熱心に水をやって、虫を取って、雑草を抜くなど、実を結ぶまでは一時も油断してはならない。すなわち、永遠のいのちへの水である神のみ



ことばが与えられ続けて、まるで実をかじる虫のような、敵である悪魔・サタンが近づかないように、いつも聖霊に満たされていなければならない。また、みことばの実が結べないようにふさいでしまう雑草のように、まだ残っているどんな悪も引き抜き続けなければならない。このようにしていくと、いつの間にか自分に結ばれている御霊の実を発見するようになるのだ。

ところで、御霊の実の一つ一つが互いにつながっている。たとえば、「愛」の実を結んでこそ真理に従うことができ、真理に従うとき、「喜び」が上から与えられる。その時、「平安」も臨むのである。同じように平安があつてこそ、心の底から「喜び」がわき出る。「平安」があつてこそ、全き「愛」の実も結ばれる。

また、信仰生活をしながら喜びがないならば、つらいだろう。喜びがあるので、それがエネルギー源になって満たされるようになり、もっと熱心に信仰生活ができるのである。それで、このように満たされて走っていくと、他の御霊の実も結ばれるようになる。

このように一つ一つ調べてみれば、結局、御霊の九つの実は互いにつながっていて、このすべてが合わさって一つになるとき、父なる神の初めの心にも完全に似せられることができる。

ところで、このように御霊の実を結ぶまでは、時には越えなければならない峠がある。そのような峠が、実は霊の世界に一段階突き抜けて入る過程だが、その当時は手に余るように感じられることもある。しかし、後で自分を振り返ってみれば、いつの間にか霊的に成熟した姿を発見するようになり、たとえ次に再びそのような峠にさしかかっても、それからは十分に勝ち抜けるという自信を持つようになる。

たとえば、種を蒔いてよく育ち、実を刈り取る時になっていたが、思いもよらなかった台風や暴風雨などで実が地に落ちてしまうことがある。しかし、そのような峠にさしかかったとき、木にしっかりとついている枝とその枝にしっかりとついている実は、風雨に勝ち抜いて、ついに美しい実になる。

このように、実を得るまで苦しい瞬間がないことはないが、その苦しい瞬間に勝ち抜いた時だけ、農夫に収穫の喜びをいだかせる、まことの実になるのである。

同じように、御霊の実を結んでいく過程で、時には峠にさしかかることもある。しかし、その瞬間にも、まことのぶどうの木である主にしっかりと接ぎ木された枝になり、みことばに根を深く下ろして、祈りながら希望をもってしっかりとついていけば、どんな困難にも勝ち抜くことができる。すると、ついに御霊の九つの実が豊かに結ばれた御霊の人になるのである。このような希望と確信の中で、みことばを蜜よりも蜜蜂の巣のしたたりよりも甘く感じて、いのちの糧として毎日霊と魂を豊かに養い、行いとして実を結ぶと、御霊の実がたわわに結ばれた御霊の人になるだろう。

### 3. 御霊の実をどのように結ぶのか

それでは、まず「御霊の実」とは何だろうか？ 「実」とは、種を蒔いたとき、その種が芽を出して、育って花を咲かせて結ぶものだ。同じように「御霊の実」もやはり、神の子どもとされた人の中に聖霊が来られて、その時まで死んだように活動を停止していた霊が生き返り、その生き返った霊がだんだん成長しながら結ぶ実のことである。

私たちの中に聖霊が来られれば、聖霊は私たちに罪と義とさばきとについて悟らせてくださる。また、心に働きかけて、罪と不法などを捨てて変えられ、義の中を歩いていくように助けてくださる。それで、天国に行ける信仰と希望を持って信仰生活をしていけるように導かれるのである。

聖霊は、たとえるなら一つの発電機のようなと言える。発電機が動くことで電気が発生して、この電気が電球に供給されて光を放つ。闇が退いて光が臨むのである。このように聖霊が私たちの中に来られて働かれることによって、闇が退いて、御霊の九つの実という「光」を放つようになる。

しかし、発電機があるからといって、電気が生じて光が入ってくるのではなく、この発電機を稼動しなければならない。神が聖霊という発電機を与えられたが、この発電機を稼動するのは、まさに私たち自身なのだ。私たちが聖霊に満たされると、聖霊という発電機が力強く稼動して、御霊の実、すなわち、光を放つようになる。

したがって、聖霊に満たされるために、いつも目を覚まして火のように祈り、御霊に示されてその喜ばれることを行わなければならない。このように御霊が導かれるとおりに従おうとすると、「御霊の願うこと」に従うようになる。こうして熱心に行っていくと、すみやかに御霊の実を結ぶようになる。

ところが、この御霊の願うことに従おうとすることを妨げるもう一つの願いがある。それは「肉の願うこと」だ。これはまだ私たちの中に残っている真理に逆らう心に従って、さまざまな罪と不正と不法を行おうとする。ところが、私たちがこの肉の願うことに従うと、御霊がうめかれるので、心が悩むようになり、だんだん聖霊に満たされなくなり、御霊の願うことに従うことがもつつらくなるのだ。

このように、御霊の願うことと肉の願うことは互いに相反する方向に私たちを引いていこうとする。御霊の願うことは私たちを光に導こうとするが、肉の願うことは闇に引いていこうとする。それで、〈ガラテヤ 5:16-17〉に「私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。」とあるのだ。

したがって、御霊の九つの実を結ぶためには、ただ御霊によって歩み、御霊の願うことに従っていかなければならない。しかし、反対に真理に逆らう闇の心に従って行おうとする肉の願うことに従うなら、その実は罪と不法である「肉の行い」になるのである。

それで、このような肉の行いという実を結ぶと、聖書はこういう人々について、〈ガラテヤ 5:19-21〉に「肉の行ないは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酩酊、遊興、

そういった類のものです。前にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたにあらかじめ言っておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。」とはっきりと語っている。

結局、〈ガラテヤ 6:8〉に「自分の肉のために蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、御霊のために蒔く者は、御霊から永遠のいのちを刈り取るのです。」とあるように、肉に従って行なうなら、その結果は朽ちる死であり、御霊によって歩むなら、その結果は永遠のいのちを刈り取るのである。したがって、救われた神の子どもとして、当然、御霊のために蒔く者であり、御霊の願うことに従う者となり、毎日、御霊の実を結んでいかなければならない。

それでは、次に御霊の実について、一つ一つ具体的に調べてみよう。

## 第2章

### 御霊の九つの実

#### 1. 愛

〈第一ヨハネ 4:7-8〉に「愛する者たち。私たちは、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。」とある。神はその根本が愛であるので、私たちのうちにも愛があつてこそ、神を知っているとと言えるのであり、愛がなければ神とかわりがない。

ところが、愛といつても、みな同じ愛ではない。愛には、神に属する「霊の愛」と世に属する「肉の愛」がある。もともと神がご自身のかたちに最初の人アダムを創造されたとき、彼に与えられた愛は霊の愛だった。ところが、アダムが神のみことばに聞き従わなかったので、罪が入ってき始めた。それで、霊が死んだように活動できなくなってからは、愛もやはり自己的な愛である肉の愛に変わり始めた。それから永い時間が経った今は、まことに霊の愛を見つけにくい世になってしまった。ただ自分の利益だけを求めて、時間が経つにつれて変わってしまう肉の愛ばかりの世になったのに、多くの方はそれがまことの愛だと思っている。

たとえば、夫婦の愛もそうだろう。結婚する前は、互いに「あなたがいなければ生きられない」と言つて、その愛が変わらないように言うけれど、いざ結婚したらどうだろうか？ほとんどが時間が経つにつれて、だんだん変わってしまうことがわかる。自分の思いに合わなくて、自分の言うとおりに従わないなら相手を苦しめて、簡単に離婚までしてしまうのだ。

親子の愛も同じである。もちろん、子どものために自分の命までも与えるような親の愛もあるが、だんだんこのような愛は見つけにくくなっている。親と子どもの間も、互いに背を向けて嫌つて、自分の利益だけを追う姿がよく見られる。この他にも、兄弟や友だちの愛もやはり、環境と条件に応じて変わる自己中心の愛が多いし、自分の利益に合わなければ、いつでも変わることが見られる。

また、愛していると言いながら、相手から愛されようとする人がいるかと思えば、そうでなくても、ほとんどは自分が愛した分、相手からも愛されようとするのが一般的である。自分が満たされている時は愛されようとしなくても、時間が過ぎればさびしくなり、自分が愛した分もらえないと悔しいと思うこともあるので、結局これも愛されるために愛するのだ。まさにこのようなすべてが「肉の愛」なので現れる現象である。

しかし、真理に属する「霊の愛」はそうではない。〈第一コリント 13:4 節〉以下に、神が言われる愛はどんなものなのか、よく書かれている。〈4 -7 節〉に「愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反すること

をせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。」とある。これがまさに霊の愛である。

ところが、御霊の九つの実の「愛」は<第一コリント 13 章>の「愛」よりも一次元高い愛である。それは、自分のいのちまで与えられる犠牲が含まれた愛のことである。父なる神のために、また、神の国と義のために自分のいのちまで与えることができ、自分の兄弟のためにいのちを与えることができる、このような犠牲が含まれた愛なのだ。

それで、このような愛は自己中心的なものが全然ない、全き愛である。自分にあるすべてを渡しても、どんな代価も望まない。愛されようとせず、ただ愛するだけでも喜ぶ。神は私たちにまさにこのような愛を与えてくださった。したがって、私たちもやはりこのように愛することが当然だろう。

もし神が祝福されず、厳しい環境に置かれても、相変わらず愛するのであり、持ち物をすべて取り上げられても愛することなのだ。何かの代価を要求したり、自分によくしてくれるからといって愛するのではなく、何の条件もなく、代価なしに、純粋に自分を犠牲にして相手のために与えられる愛がまことの愛である。

ところで、このような愛は、私たちが罪と悪と不法を捨てて、肉の性質から解き放されて聖められるほど心に臨む。まさに罪を捨てて悪がなかった昔の信仰の人々がこのように愛したことが見られる。モーセや使徒パウロは、たとえ自分の名前がいのちの書から消されても、自分の兄弟たちを救ってくださるようにと祈った。また、ステパノ執事は石に打たれて死にかけていながら、自分に石を投げつけている人々のために「主よ。この罪を彼らに負わせないでください。」と祈った。

イエス様をご自分のすべてを渡して下さり、十字架につけられて死なれ、私たちへの全き愛を見せられたように、主に似せられた人も、やはりいのちまで与えて愛で律法を全うされた主の愛を持っていることがわかる。

したがって、私たちはこのような愛を持たなければならない。それは、愛の章に書いてある愛に加えて、いのちまで与える犠牲的な愛、どんな代価も願わないで純粋に与えるばかりの愛、まさにこのような愛を含む愛のことだ。自分の中にはこのような愛がどれほど結ばれているだろうか？ この愛の実がどれほど結ばれているのかを顧みると、どれほど聖められていて、どれほど主の心になっていて、新しいエルサレムに入る資格を備えているのかがわかる。

## 2. 喜び

喜びとは、辞書に「喜ぶこと。うれしく思うこと。」と書いてある。しかし、霊的に、喜びとは、単純に喜んでうれしく思う次元でなく、「どんな状況と環境、条件でも、いつも喜んでうれしく思うこと」をいう。うれしいことがある時だけ喜んでうれしく思うことは、世の人にもできる。しかし、神の子どもたちは<第一テサロニケ 5:16>にあるように、うれ

しいことがある時だけでなく、そうではなくても「いつも喜んでい」なければならない。

それでは、どうしたらいつも喜んでいられるだろうか？ 心のうちに罪と悪と不法などの肉の性質がなければ、自然に喜びだけがあるようになる。

神が最初の人アダムを創造されたとき、アダムに喜びを与えてくださった。いのちの息が吹き込まれて生きものとなったアダムには、肉の性質がなかったので、悲しみ、涙、苦しみ、心配、憂いなど、喜べないようにする要素がなかったのである。

しかし、アダムはエデンの園に生きながら、喜びと反対になることを経験したことがなかったので、自分にある喜びがどれほど良いものなのか、喜びのまことの価値は悟れなかった。

ところが、神に聞き従わなかったので、罪が入ってきて、肉の人になった後は、だんだん喜びの心を失うようになった。そして、罪が入ってくればくるほど、それで肉の人になればなるほど、神が与えられた喜びはなくなってしまったのだ。結局、肉の性質があるので悲しみと涙が出てきて、肉の性質があるので憂い、心配が出てきて、さまざまな問題と苦しみが伴うのである。たとえば、心の中にねたみ、そねみがあるとすると、どれほど苦しむだろうか。それで、〈箴言 14:30〉の後半には「激しい思いは骨をむしばむ。」とまで書いてある。

また、心にわだかまりがあつたり、争いがあつたりして、誰かと気まづくなっているなら、これもやはり苦しいだろう。相手にわかってもらえなくてさびしいと思っても、これもやはり、本人が悲しくてつらくなるだろう。この他に、他人のものをむさぼる心があるので、それが得られなければ苦しくなり、自分の利益だけを求めようとすると、そうでない時はつらくなるのであり、憤りや癩癩を起こすのも、結局は自分を苦しめることなのだ。

また、憂いや心配があるのも同じである。本当に神を信じているなら、憂い、心配があるはずがない。もし、その日すぐ食べる糧がなくても、神を信じて頼って、父なる神の国と義を求めていけば、神は必ず私たちに必要なものを満たしてくださると約束された。

しかし、神がこのように約束されたのに、神を正しく信じられないので、自分の思いと計画に従って行っていくから、憂いて心配するようになるのである。

また、事業をする人も、聖霊の声だけを正しく聞いていくなら、何をしても栄えて祝福があふれるはずなのに、自分の中にある欲と理論、思いなどのゆえ聖霊の声が聞けないから、問題が生じるのだ。

このように、結局は私たちの中にある肉の性質によって憂いと心配と苦しみ、悲しみなどがやって来て、心からはだんだん喜びがなくなるのだ。だから、すみやかにこのような肉の性質を捨ててこそ、神が最初の人アダムに与えられた喜びが取り戻せるのである。

そして、この時に感じる喜びとは、アダムのように全く相対性を知らないのではなく、すでに相対性を知って体験した後で得た喜びなので、心の底からわき出るし、永遠に変わらない。天国でもこのような喜びがあるので、とこしえに喜びと感謝が変わることなく、永遠に幸せに生きることができる。

実際、神の子どもたちには、感謝と喜びの条件があまりにも多い。神の愛を感じて、真理を悟って、小さい問題一つに答えられる時も、どれほど感謝なのか。しかし、何よりうれしくて感謝なことは、まさに救いの喜びである。途方もない苦しみの地獄でなく、天国に行けるといふそのこと一つだけを考えても、私たちはどんな状況でも喜ばなければならない。

この地上でいくら肉的には乏しいことなく、幸せな人生だったとしても、その結末が地獄ならば、その人はどれほどかわいそうなのだろうか。だから、この地上ではちょっと乏しくても、神を見つけて、イエス・キリストによって救われたということを本当に悟って信じるなら、救いの喜びがいつもあふれるしかないのである。

また、この地上でイエス・キリストのために迫害と苦しみにあっても、これもやはり私たちから救われた喜びと感謝を奪うことができない。〈マタイ 5:11-12〉に「わたしのために、ののしられたり、迫害されたり、また、ありもしないことで悪口雑言を言われたりするとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。喜びおどきなさい。天においてあなたがたの報いは大きいからだ。あなたがたより前に来た預言者たちも、そのように迫害されました。」とある。

したがって、このようなみことばを信じるなら、たとえ信仰を守るために迫害されたり、または主の御名によって苦しみにあつたりしても、かえって喜びと感謝が加わるだろう。今、自分が歩んでいる道がまことであり、本当に神のみこころに従って歩んでいることを信じるなら、どんな苦しみの中でも喜んで勝ち抜くことができる。

このように、心から喜びがあふれる人はその顔にも喜びが現れる。誰かが見ている時だけ満たされていて笑顔になるのではなく、いつ、どこでも満たされて喜んでいるから、霊的な光が出るのである。もちろん、時に応じて、神の国の働きのためや滅びに向かっていくかわいそうな魂たちのために大変悲しむ時もあるけれど、その時もやはり心の底からは喜びが離れない。

したがって、問題がやって来て、肉的にはどうも解決しにくい事が起こったら、その瞬間、「今、自分が心から喜んでいるのか」、自分の心を一度顧みなければならない。そして、その瞬間、自分の顔を鏡に写してみよう。その姿がまさにどれだけ喜びの実が結ばれているのかを見せてくれる、一つの尺度になれるだろう。

神の子どもはこの地上でなく、天国に希望を置いていく天国の民である。そして、天国はいつも喜びだけがあふれている所なのだ。〈ルカ 17:21〉には「神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。」とある。したがって、天国の民はその心の中からまず神の国を実現すべきであり、その時、心の中には当然喜びの実が結ばれるのである。

〈ピリピ 4:4〉に「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。」とあるように、すべてのことを肯定的に見る心と、いつも美しく良いことを追い求めようとする心が増し加えられたとき、心の中には喜びの実がたわわに結ばれるだろう。

### 3. 平安

平安とは、辞書では「安らかで変わったことのないこと。無事平穏なこと。また、そのさま。」とある。誰ともぶつかることなく、心配やもめごともなく過ごす、これが平安を保っていることであり、当然心も安らかになる。しかし、誰かと平和を保っていないなら、心の平安も破られる。その原因を霊的に調べれば、二つの関係がもっとはっきりする。

人の心に分けるなら、いくつかに分けられるが、ここでは大きく二つに分けてみよう。一つは「真理の心」である。聖霊はこの真理の心に働きかけて、神のみことばどおり生きるように導かれる。もう一つは「真理に逆らう心」である。敵である悪魔・サタンが支配する心であり、結局、神のみことばから外れて、暗やみの中に生きようとする。

この二つのうち「真理の心」に従って、聖霊が働きかけるとおりに行う時は、平安を保つことができる。聖霊が働きかけるのは、相手のために犠牲になること、仕えること、自分を低くして相手を高めることである。また、礼儀に反することをしないで、たとえ自分のほうが正しくても、真理に逆らうものでなければ、相手に合わせられることである。すべての人の益を追い求めることであり、自分を目立たせないことである。それだけでなく、自分の信仰にだけ合わせるのではなく、相手のほうを先に思って、合わせることなのだ。

これに加えて、偏ることがなく、これも正しくてあれも正しいと思える、真理にあって両面性を持つ心だ。まさに聖霊はこのような真理の心に働きかけられるので、私たちが御霊に導かれるなら、すべての人との関係で平安を保つことができる。

しかし、反対に敵である悪魔・サタンはどういう心を支配するだろうか？ 自分のことだけを主張して、自分の利益だけを追い求め、自分の立場だけを考えようとする、真理に逆らう心を支配する。自分を目立たせようとして、偏っていて、他の人は苦しんでいようがいまいが、ただ自分だけを主張しようとする、このような欲と高ぶりと争いなどの悪い心に働きかけるのである。だから、このような真理に逆らう心に働きかけるとおり従うなら、平安が破れて、争いと葛藤、対立だけが起こるのだ。

家庭でも社会でも、国家でも、そして教会でも、どこでも平安がなくなると、試練や患難がやって来て問題が生じる。たとえば、教会の中でも、いつも他の人とぶつかる人がいる。そのような人は、皆が賛成しても自分だけ最後まで我を張って、すべてにおいてひっかかるのだ。また、いつも他の人の欠点に目をつけて、これを周りに伝えるので、争いを呼び起こす人もいる。人をさばいて罪に定め、自分の思いに合わせて陰口をたたいて、悪口を言う。不平、不満の声を作り出して、党派心をかきたてて教会を困らせるので、サタンの会衆に属する者になるのだ。まさにこのようなことによって平安が破れるので、そのような教会はリバイバルできず、敵である悪魔・サタンの餌食になるのである。したがって、神の子どもなら、当然、平安をもたらす人になければならない。ところで、平安にも順番がある。

### 1) まずは、神との間に平安がなければならぬ。

いくら周りの人とぶつかることなく、平安があっても、神との間に平安がないなら、何の役にも立たない。他の人と平安を保つのも、主にあって、神のみことばに従って保つ



ていなければならない。

もし、家族と平安を保つために世と妥協することによって、真理に逆らって神に申し訳ないことをするなら、その人は本当に大切なことが何かわからないのである。神との間にまず平安があって、神に喜ばれたとき、神が周りの人々の心もつかさどられ、すべての人と関係でも平安を保つようにしてくださる。まさに〈箴言 16:7〉には「主は、人の行ないを喜ぶとき、その人の敵をも、その人と和らがせる。」とある。

ところで、神との間に平安があるためには、何より神との間に罪の隔ての壁があってはならない。心の根にある悪をすべて捨ててこそ、神との間に完全に平安がある。しかし、罪によって隔ての壁があると、神との間に平安がなくなるので、神を見つけて体験することができない。

まさにイエス様がなだめの供え物としてこの地上に来られた理由も、このように神と私たちの間にあった罪の壁を打ちこわすためだった。それで、〈エペソ 2:14〉には「キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、」とあるのだ。

したがって、私たちのすべての罪を贖われたイエス・キリストを信じて、その時から心の罪を捨てていくことが、神との間にまことの平安がある第一歩になるのである。

## 2) 次に、自分自身が平安でなければならない。

ところで、自分自身が平安であることも、やはり悪はどんな悪でも避けて聖められるとき必要であって、聖められると完全になるのである。人が心の悪を捨てない以上、状況と条件次第であらゆる罪と悪が動き出すようになるので、心に平安がなくなって、自分でも苦しむようになる。したがって、自分自身が平安であるためにも、罪による心の戦いを終えなければならない。

真理に逆らう心をすべて捨てて、完全に聖霊の働きに従って、真理の心を求めていくとき、自分自身が平安になり、その心が穏やかな湖のようで、綿毛のようにやわらかくて柔和になるのだ。

そして、このように自分が平安であると、自然にすべての人々との関係でも平安をもたらすようになる。湖のようで、綿毛のような心なので、誰ともぶつかったり、ひっかかったりするはずがなく、すべてをいだいて受け入れることができる。

このように、まずは神との間に平安があって、次に自分自身が平安であり、また、他のすべての人々と平安を保つようになると、これが完全な平安の実を結ぶことなのだ。

完全な平安の実を結ぶと、神の子どもと呼ばれるだけでなく、〈ヘブル 12:14〉のみことばのように、すべての人と平和と追い求め、また聖められることを追い求めるようになり、主を見ることができるようになる。

## 4. 寛容

〈第一コリント 13 章〉愛の章にも、「寛容」がある。この時の「寛容」とは「愛を心に実践するための寛容を尽くす」ことを言う。一方、御霊の九つの実の「寛容」とは「すべてに対して寛容を尽くすこと」という意味で、愛の章の寛容より一次元深いものである。

それでは、すべてに対して寛容を尽くすとは、何だろうか？ 人々はこの世を生きていく間、あることに対して「寛容を尽くすのか、そうできないのか」によって、幸か不幸かが決まったりする。親子の間、あるいは夫婦や兄弟、友人の間にも、何かのことに寛容を尽せず、一生背を向けて生きることもある。この他に、事業の問題も、寛容を尽くすのか、そうできないのかによって、その結果が大いに変わってきて、何より神から答えられる時も、寛容を尽くすことによって答えの有無が決められたりする。

ところで、もしこの世に肉の属性がなくて、霊的なことだけがあるなら、「寛容を尽くす」という言葉は必要がないだろう。人が肉にあるので、何かに対して寛容を尽くさなければならぬのであり、御霊の歩みに入るなら、何かに対して寛容を尽くす必要がないからだ。したがって、「神が寛容を尽くされた」という言葉も、実は申し訳ない表現であり、単に人のほうから理解できるようにそう表現したのである。

しかし、どれほど多くの人がささいなことにも寛容を示せないでいるだろうか。自分が受け入れにくいことがあると、いろいろ苦しんでいるのではないのだろうか？ 布団をかぶって口をきかなかったり、歩きまわって嘆いて、眠れないこともある。しかし、もしこのように自分なりに努力して、あることに寛容を示したとしても、これは肉的な寛容であり、神のほうからご覧になる時は寛容になれないのだ。

たとえば、何か受け入れにくいことが起こったなら、ある人は「神のみことばに寛容を示しなさいとあるので」と言いながら、無理やりに受け入れようとする人がいる。しかし、これは寛容を示すとはいえ、悪を持ったままでうわべだけ寛容を示しているのである。心の中では受け入れられなくて、ぐらぐら煮え返っていても、うわべだけ表れないように抑えているのである。だから、このような姿を決して寛容であるとは言えないし、神は相変わらず「悪だ」と言われるのだ。

私たちの神が願われるのは、霊的に寛容を尽くすことであり、善と真理に満たされていて、寛容を示す必要もない心のことである。

このような次元は直接体験してこそわかる。人に全き愛が臨んでいるなら、どんな人に接しても理解していただくようになり、すでに心に何のわだかまりもないので、「赦す」とか「寛容」とかの言葉そのものがいらなくなる。

それでは、このように霊的な寛容について、大きく三つに分けて調べてみよう。

### **第一に、心を変えさせるための寛容がある。**

私たちの心に神のみことばが臨んだ後、過ぎた日々を振り返ってみれば、ささいなことにも寛容を示さず、憤ったり、わだかまりを持ったりしたことがどれほど愚かでおかしいだろうか。肉の人だったとき、世で積み上げてきた悪と真理に逆らうものが多かったほど、ささいなことでも受け入れるのが難しかったし、無理に寛容を示そうとしていたことがわかる。また、受け入れられず、心からあらゆる悪が出てくる時は、結局、さまざまな真理に逆らうことをしてしまった。

しかし、心を真理に耕すために、寛容を尽くしながら悪を一つ一つ捨てていくと、ついに美しい真理の実が結ばれる。これが真理に逆らうものを捨てて、心を変えさせていくための寛容であり、この過程を通して、毎日悪はどんな悪も避けていき、結局はキリストの

満ち満ちた身だけにまで達することができるのである。

### 第二に、人と人との間の寛容がある。

主にあつて、すべての人間関係で寛容であることを言う。相手が自分の意見や思い、性格に合わなくても、いつも善をもって理解して、相手の利益を求めながら寛容であることだ。

たとえば、夫婦の間でも、互いに育った背景と環境が違うので、何かのことについて意見が違うことがある。この時、互いに理解しようと善をもって思うなら、夫婦げんかをするということもないし、穏やかで幸せな家庭が作れる。

「稲は実るほど頭を下げる」という言葉がある。これを霊的に適用してみれば、心から真理に逆らうものを捨てて、御霊に導かれるほど、さらにへりくだるという意味である。すなわち、主の心になり、自分のほうから先に赦して、理解して愛でいただくので、すべての人との平和を追い求め、また、聖められることを追い求めるようになり、人と人との関係でも寛容であるようになる。

### 第三に、神と私たちとの間の寛容がある。

これは、私たちが神の御前にささげた、祈りと求めの答えに対する寛容のことを意味する。人の思いではすぐ答えられるはずのことであっても、一寸先もわからない人とは違って、父なる神はすべてをご存じなので、一番適切な時に答えてくださるのだ。

したがって、信仰によって祈ったことに答えられるためには、必ず寛容を尽くさなければならない。そして、寛容には忍耐と自制が伴わなければならない。〈マルコ 11:24〉に「だからあなたがたに言うのです。祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。」とある。したがって、本当に「すでに受けたと信じる」なら、寛容をもって待つことは一つもつらくないだろう。

しかし、寛容を尽くせないなら、祈りを熱心にしていても、答えが遅ればあきらめてしまったり、疑って恨んだりするので、まことの信仰ではないし、結局は答えられなくなる。それで、〈ヤコブ 1:6-8〉にも「ただし、少しも疑わずに、信じて願いなさい。疑う人は、風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようです。そういう人は、主から何かをいただけるとはなりません。そういうのは、二心のある人で、その歩む道のすべてに安定を欠いた人です。」とあるのだ。

したがって、神の御前に祈ったなら、答えられるまで疑わずに信じて待ちながら、その過程さえも耐え忍ぶ寛容の実も必要である。自分の心と思いに合わせるのではなく、神の心とみ思いに合わせて、答えを待たなければならない。

農作業をする農夫も、春に種を蒔いて実を刈り取るまで、寛容を尽くして待っている。もちろん、ただ座ってひたすら待っているのではなく、熱心に育てて世話したとき、秋になって実を刈り取るようになる。ところが、もし農夫が春に種を蒔いてから、「これがいつ育って実を結ぶだろうか」とあせって、度々土を掘ってみるなら、種はしっかり育たなくて死んでしまう。

〈ルカ 18章〉には、絶えず祈って、失望せずにいるべきことを言われたイエス様のたとえ

がある。ある町に、神を恐れず、人を人とも思わない裁判官がいた。その町に、ひとりのやもめがいたが、彼のところにやって来ては、「私の相手をさばいて、私を守ってください。」と言っていた。彼は、しばらくは取り合わないでいたが、後には心ひそかに「私は神を恐れず人を人とも思わないが、どうも、このやもめは、うるさくてしかたがないから、この女のために裁判をしてやることにしよう。でないと、ひっきりなしにやって来てうるさくてしかたがない。」と言った。

これについて、私たちのイエス様は<ルカ 18:6-7>で「不正な裁判官の言っていることを聞きなさい。まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけないで、いつまでもそのことを放っておかれることがあるでしょうか。」と言われた。たとえ不正な裁判官であっても、夜昼来て求めるのがうるさくてやもめの願いを聞いてあげるのに、まして善なる父なる神が、信仰によって最後まで求める子どもたちの祈りに御顔を背けられるはずがないということである。

したがって、私たちは祈るけれど、信仰によって祈り、そして、一度信じたなら最後まで信じるまっすぐな心をもって、寛容を尽くして祈り、答えられて神に栄光を帰さなければならぬ。

<ガラテヤ 6:9>にも「善を行うのに飽いてはいけません。失望せずにいれば、時期が来て、刈り取ることになります。」とある。寛容を尽くせない人は、善を行っても、すぐ目に見える補償がなければ、「善を行っても帰ってくるものがなく、かえって損だ、やめようか」と飽いてしまう。それで、一時熱心に善を行っても、結局、罪と不法を再び行って、世と友になっていくのだ。

そして、善を行いながら「失望する」とは、すでにその善行が完全でなかったということの意味する。愛をもって善を行えば、喜びと幸せが臨み、決して飽いたり失望したりしないからである。

したがって、寛容の実が結ばれると、善を行うことにおいても、まことの愛をもって、信仰によって行い続けるようになり、結局、時期が来て、刈り取ることになる。

私たちが天国に行くのも、寛容があつてこそ行ける。ある人は天国は行きたいけれど、真理が受け入れられないので、若い時は世で思う存分楽しんで、年を取れば教会に行くと言ったりする。しかし、明日のことは誰も知らないし、いつ神がその魂を召されるかわからない。

また、ある人は教会に通っていても、「主がすぐ来られると言ったのに、なぜ来られないのか」と言って、再び世に向かたりする。しかし、<第二ペテロ 3:8-9>には「しかし、愛する人たち。あなたがたは、この一事を見落としてはいけません。すなわち、主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。主は、ある人たちがおそいと思っ

ているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」とある。

このように千年を一日のように寛容を尽くして、ひとりでも多くの魂が悔い改めて救われることを望んでおられる父なる神の心を少しでも推し量るなら、決して主が来られるのが遅いとは言えない。また、このような神のしもべである牧会者なら、聖徒に対しても、

良い牧者の心をもって、彼らがついには真理に変えられることを信じて、どんな試練がやって来ても、どこまでも寛容を尽くさなければならない。全世界より尊い魂を愛するので、何としてでも聖徒に寛容を尽くして、理解していただき、天国に導かなければならない。

寛容を示しても、悪をもって示すなら、ますます悪だけが積まれる。しかし、善をもって寛容を示すなら、結局、悪はその根の根まで抜かれるのだ。赦すために、理解するために、愛するためになど、このように善をもって、真理をもって寛容を示すなら、結局は寛容も必要なくなり、心にはただ愛と憐れみと赦しなどの真理だけが残るようになる。

悪はどんな悪も完全に引き抜くまでは寛容を尽くすべきであり、時には寛容であることがつらいこともあるけれど、そのようにして悪を全部捨てるなら、その時は寛容を示す意味がなくなり、心に天国が臨み、喜びと幸せだけが満ちあふれるのである。

## 5. 親切

「親切」という単語を辞書で見ると、「相手の身になって、その人のために何かをすること。思いやりをもって人のためにつくすこと。また、そのさま。」とある。

しかし、神が言われる「親切」とは、霊の愛をもって行うことである。神が望まれる親切の心とは「人間的に赦したり、理解して愛することができなくても、真理にあって思いやりをもって相手のために尽くす心」のことである。

「あの人だけはとうてい赦せない」「あの人だけはとうてい理解できない」などの心が全くないし、仮にそのような人がいても、赦して理解し、さらに愛することさえできる心である。自分が本当に相手の立場になってみて、そうするしかなかった相手の心を押し量ってみるなら、結局はどんな人であっても受け入れるようになる。

父なる神はまさにこのような心から、御子イエス・キリストを私たちのためのなだめの供え物として渡して、今まで私たちに寛容を尽くして期待しながら待ってくださったのである。とうてい赦せない人も理解して待ってくださり、その人が立ち返る時は、赦しに赦してくださったのだ。

ひょっとして私たちが真理の中に入ってくる前、利己的に生きていた時は、とうてい赦せなかったこともあったかもしれない。自分の思いに合わせて、とうてい赦せないこと、とうてい理解できないことに遭って、「あの人はどうてい理解できない。あれだけは絶対赦せない」と言う。しかし、神はこのように「赦せない」という心も「悪だ」と言われる。

もちろん、相手があまりにも常識はずれの行動をしたり、ひどく悪を行ったりすることもあるけれど、霊的に親切の実を結んだ人は、このような状況でも相手を赦して、理解して愛する心である。とうてい理解できないと思われることも理解して愛する心、一歩進んでむしろそのような相手を助ける心、これがまさに霊的な親切の心である。

だから、親切の心を持っている人は、誰かを憎んで嫌うはずもないけれど、もしいくら憎くていやな人であったとしても、恵みが施せるのだ。罪は憎いけれど、人は決して憎まない心である。したがって、親切の実を結ぶためには、自分のほうから先に赦せる心になるべきであり、自分が先に理解して愛する心にならなければならない。

〈コロサイ 3:13-14〉に「互いに忍び合い、だれかがほかの人に不満を抱くことがあっても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい。そして、これらすべての上に、愛を着けなさい。愛は結びの帯として完全なものです。」とあるように、主に似せられようとする聖徒なら、主が私たちを赦してくださったように、互いに忍び合い、どんな人であっても理解して赦して、愛する親切の心になりたいだろうし、またなるべきである。

ところが、この親切の心にならないように妨げる要素がある。それは自己中心の思いと自分が正しいという思いが固まった心だ。相手の立場は考えないまま、自分の立場だけを考えて、自分の利益だけを求める人は、自分の思考の枠から外れている人は受け入れられない。また、生まれてから今まで、育ちながら自分なりに正しいと思って固めてきた利己的な心にすべてを合わせようとするので、自分の心に合わないことは受け入れられないのだ。

それなら、このように自分が正しいという心が本当に正しいだろうか？ 自分の中にあるすべての肉の性質を捨てて、完全に御霊の人になり、父なる神の深い心にまで及ぶまでは、決して自分で正しいとは言えないことを悟らなければならない。

もちろん、生まれてから今まで、真理そのものであられる主から直接教わって、主をみならって真理だけを見て聞いて育ったならば、その人は心が真理だけで満たされている完全な真理の人になっているだろう。しかし、ほとんどは真理に逆らうものを見て聞いて、肉に属する人々に教わるようになる。それも、互いに知識が違って、教養が違って、思いが違う数多くの人々に教わって、彼らの影響を受けて「自分」を作っていくのだ。だから、ますます真理である神とはかけ離れている「自我」が作られるのである。

まことと偽り、真理と真理に逆らうもの、正しいか正しくないのかがわきまえられるのは、ただ聖書 66 巻に記された、真理である神のみことばだけだ。したがって、世の知識と理論に基づいて教わって、真理でない人々を見て聞いて教わった人は、実際に神のみことばに自分を照らしてみれば、「自分」として作っておいた姿から多くの真理に逆らうものを見つけるようになる。

だから、このように真理に逆らって生きながら、自分が正しいと思いこんでいるなら、相手を理解することも、赦すことも、愛することもできないので、親切の心になれないのだ。それで、父なる神の心である親切の心になるためには、何よりもまず、相手の立場で理解しなければならない。

たとえば、まだ信仰が弱くて真理に逆らって行っている人がいるなら、その人をさばいて罪に定めるのではなく、その人の立場で理解しなければならない。真理に変えられる前は、私たちにもそのような姿があったはずであり、もしその時、誰かが理解してくれなかったなら、それでさばいて罪に定めて遠ざけたなら、私たちが今どうやって真理の中に入ることができたのだろうか。このように、すべてを自分のことのように広く受け入れて、愛の心をもって相手を顧みるとき、はじめて相手の立場が理解できて、相手の心になれるのだ。

ところが、今日、どれほど多くの人が、自分も罪を犯していながら、相手の罪は赦すま

いと後ろ指を指しているだろうか。また、自分の心に合わなければ、憎んで遠ざけているのだろうか。

しかし、親切の心がある人はむしろ後ろ指を差されている人を憐れんで、苦しんでいる人を見れば「どうすれば力になれるのか」と、まるで自分のことのように考えて顧みるのである。

だが、私たちが誰かを助けたり施しをしたりする時も、聖霊に働きかけられて賢く行わなければならない。たとえば、熱心に努力しているのに生活が貧しい人がいるなら、施しをするのが当たり前だが、罪の中にとどまっているので、いつも訓練ばかり受けている人に施しをするのは正しくない。まずその人が罪の中から抜け出るように助けなければならない。

聖書を見ると、ヨナが神のみことばに逆らって、【主】の御顔を避けて、タルシシュへのがれるとき、【主】が大風を海に吹きつけたので、ヨナが乗っていた船は難破しそうになった。この時、くじを引いて、その暴風の原因がヨナにあることを知っても、水夫たちはヨナを助けようとした。しかし、その結果は海がますます荒れてきたから、より大きい困難に遭うことが見られる。神のみこころにわざわざ逆らっていく人を助けるので、彼と一緒に試練と訓練を受けるようになったのだ。

したがって、親切を現す時も、神のみことばでよく見分けて、すべてのことに賢く行っていかなければならない。また、神のみこころに逆らったり、神の栄光を遮る人がいる時は、その人がすみやかに立ち返るように真理をもって諭さなければならない。

ところで、親切の実の中身はまきに行いである。愛して憐れむ心で終わるのではなく、その心を行いで表さなければならない。モーセは鋳物の子牛を造り、それを伏し拝んだので、断ち滅ぼされる危機に置かれた民に対する心を、神の御前に「今、もし、彼らの罪をお赦しくださるものなら——。しかし、もしも、かないませんなら、どうか、あなたがお書きになったあなたの書物から、私の名を消し去ってください。」という切なる祈りで表した。このように切なる愛の心で相手をして愛して赦す親切の心を持って、いつも相手を顧みて助ける親切な行いで、相手に力と慰めを与えなければならない。

## 6. 善意

善意を辞書で見ると、「良い心。他人のためを思う親切心。好意的に相手の言動などをとらえること。」と書いてある。ところで、神が言われる「善意」の霊的な意味は、単に良い心だけを意味するのではない。

世の人々は良い人の基準を「良心」に置く。自分の良心に照らして善と悪を分けて、良心に基準して「あの人は良い」、または「悪い」と判断する。自分に対しても、自分の良心に呵責を覚えないなら、善良に生きていると思う。

しかし、この良心というものも、人によってみな違うことがわかる。それで、この人の善悪の基準とあの人の善悪の基準が違ってくるのだ。だから、「良い」と思う判断基準も違うのである。

だが、たとえ真理を知らない人であっても、それでも良心というものがあるので、それ

なりに判断して善のほうを選んでいこうとする。このように、肉の世界では、善を行える心である良心があるように、主にあつては、御霊によって霊を生んで真理の心になり、善だけを追い求めようとする心がある。これを「善意」と言うのである。

そして、全く聖なるものとされて、心が真理だけで満たされると、その時はただ善だけを追い求めるので、心が善そのものになるのである。

それでは、具体的に善意の心はどんな姿で現れるだろうか？ その善意の心を教えてくれるみことばが、〈マタイ 12:19-20〉である。「争うこともなく、叫ぶこともせず、大路でその声を聞く者もない。彼はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともない、公義を勝利に導くまでは。」とある。

### 第一に、善意の心は争うことがない。

イエス様は、自分を殺そうとあらゆる悪い話をでっち上げて、策略を立てる人々にも、決して立ち向かったり争ったり議論したりされたことがなかった。ただ善の心で彼らを悟らせて、善の知恵をもって彼らに対したし、避けるべき時は避けられたのである。

私たちもこのように行えば争いが起こらないはずなのに、実際にそのような状況になると、そうしないことがたびたび見られる。たとえば、誰かを諭す時も、善の心から悟らせようとするより、自分は目に梁があるのに、相手のちりだけを見ようとしてそれを指摘するので、争いが起こる。

だから、まず自分の目から梁を取り除けなければならない。それで、このように自分の梁を取り除けるなら、その時は、もし相手のちりが見えても、それを取り立てて指摘するよりは覆おうとするし、諭しても、本当に愛の心で相手のためにするようになる。すると、この時は相手もそれに含まれている愛の心を感じるので、感謝して受け入れて、争いが起こらないのである。

次に、相手の話に議論を吹かけたり、いくら良いことでも相手が受け入れようとしないうちに続けて与えようとするなら、これもまた争いを起こす。議論は議論を生む。したがって、私たちのイエス様のように、相手が言い争いを起こそうとすると、善の知恵で相手がそれ以上言わないように遮ることができるのでなければ、いっそ議論をやめて、その場を避けることが賢い。

また、いくら良いものでも、相手が受け入れない時は与えてはいけない。それで、私たちのイエス様も、真理のみことばを受け入れないで、かえってそれをもって正しい正しくないを議論しようとする人については、〈マタイ 7:6〉で「聖なるものを犬に与えてはいけません。また豚の前に、真珠を投げてはなりません。それを足で踏みにじり、向き直ってあなたがたを引き裂くでしようから。」と言われた。このように、まずは善の心をもって相手をいだいて、また、善の知恵を追い求めて行うなら、いつも争いを避けて平和を保つことができる。

### 第二に、善意の心は叫ぶことがない。

イエス様は全知全能の神のひとり子であり、神の力をそのまま持つておられる方だった。また、その方がこの地上で行われたことがどれほどすばらしく、その威厳と権威もどれほ



ど立派だったことだろうか。しかし、イエス様は、それらを目立たそうとされず、誰かにわかってもらいたいと思われなかった。ただ父なる神にだけ栄光を帰されたし、そのようなイエス様を神が認められたので、いつもともにおられる証拠を現してくださった。

ところが、ほとんどの人は他の人が自分をわかってほしい、認められたいと願う。それで、争いが起こったり、人をねたんでそねんだりして、自分より優れている人の悪口を言うなど、何としてでも自分が認められるために、他人を抑えつけようとする。

しかし、たとえこのようにしていくら認めてくれても、父なる神が認めてくださらないなら、何の役にも立たないのだ。〈第二コリント 10:18〉には「自分で自分を推薦する人でなく、主に推薦される人こそ、受け入れられる人です。」とある。

したがって、人によく見せようとして、認められようとする、このような叫ぶ心をみな捨てて、ただ神だけに頼って、神に認められる人にならなければならない。私たちの神が認めてくださるならよいのだ。そして、神が認めてくださるなら、自然に人々からも認められるようになる。

たとえば、聖書にも、モーセや使徒パウロが神のように思われる場面がある。決してモーセやパウロが自分で「私は神だ」と言っただけで、そうなのではない。神が彼らを認めてくださると、彼らに驚くべき力を授けられ、それによって人々にも、まるで神のように思われたのである。

神に認められるなら、神がすべてを守ってくださり、また、認められる証拠として神の力を授けられるので、人々からも「あの人は神の人だ」と認められる人になるだろう。

### **第三に、善意の心はいたんだ葦を折ることがない。**

人が木や花を育てているとき、もしいたんだ葉があるなら、美しさを損なうので、折り取ってしまうのが見られる。しかし、善意の心はそれまでも折らず、生かそうとする心である。

私たちのイエス様がまさにこのような心だった。「いたんだ葦」とは、靈的に「世の罪と悪でぎっしりになっている人」のことである。イエス様の時は、ただ善だけを行われるイエス様を見ても、むしろ悪をもって対応する人が、まさにいたんだ葦のような人だった。このような人であっても、私たちのイエス様は捨てられずに、何としてでも真理で悟らせようとして耐え忍ばれた。

これは今日も同じである。私たちの主は、少しでも救われる信仰があれば、少しでも主を受け入れる良い心があれば、決して捨てられないのだ。どんな罪の中にいたとしても、それが死に至る罪でない以上は、最後まで悔い改めて立ち返ることを望んで、寛容を尽くして耐え忍ばれる。このようにいたんだ葦でも折らない善意の心が臨んでこそ、完全に主の似せられるようになる。

### **第四は、くすぶる燈心も消さないことが善意の心である。**

いくら悪くて死の道に向かっている魂であっても、救われそうなのかな可能性でもあれば、それをご覧になって、その魂を消されない主の心のことだ。ある面では本当に可能性がなく、すべてをあきらめているような人であっても、「どうすればあの人を生かそうか」

と工夫するのである。結局は、相手が悪くて自ら死に向かっている、私たちのほうからは「ここまで」という限界を引くのではなく、最後まであきらめずに生かそうとする心が善意なのだ。

このように善意の実を結び、争うことも、叫ぶこともなく、いたんだ葦を折ることも、くすぶる燈心を消すこともないならば、すでにその心には悪はどんな悪もないので、言葉一つ、行い一つにも決して悪い姿が現れることはありえない。まさに、決心したとおりにたましいとからだも聞き従うので、ただ心にある善だけが現れるようになる。

ところで、聖書には、善そのもののイエス様も怒られる場面がある。〈ヨハネ 2:14-15〉で、イエス様が、宮の中に、牛や羊や鳩を売る者たちと両替人たちがすわっているのをご覧になり、細なわでむちを作って、羊も牛もみな、宮から追い出し、両替人の金を散らし、その台を倒されたことがある。

しかし、これは何かの悪があつて、悪い感情をもって憤って怒るのとは全然違う。たとえば、自分を生んでくれた両親にある人が唾を吐いて、呪いの言葉を口に出して、無礼なことをするなら、どうすべきだろうか？ 「私は善意の心を持っているから、決して憤ったり争ったりしない」と傍観しているだけだろうか？ しかし、これはまことの善意の心だと言えない。もちろん、このような状況で悪い感情を持って相手を嫌って、憤って争いなさいということではないが、子どもとして親が侮辱されているのを何としてでも防ぐのが、当然の人の道である。

まして父なる神の宮が汚されて、一步進んで悪い人々によって神の教会が倒されるようになるなら、神の子どもとしてどうすべきだろうか？ 父なる神を愛して聖殿を愛するなら、当然、いのちをささげても守らなければならないだろう。そうでなく、ただ見ているなら、これはむしろ卑怯な心であり、神を愛する心もないのである。

まことの善意の心は、こういう状況でも静かなのではなく、神である主をなぶるゴリヤテを退けたダビデのように大胆に出るべきなのだ。善意の実を結ぶことにおいて、このようなことはよくわきまえなければならない。

## 7. 誠実

辞書を見ると、「誠実」について「私利私欲をまじえず、真心をもって人や物事に対すること。また、そのさま」と書いてある。それでは、神が言われる「誠実」とは、どんなものだろうか？

**第一に、自分に任されたこと以上をやり遂げることである。**

たとえば、ある人を雇って、給料をあげて仕事を任せるとき、その人が任されたことだけをよくやり遂げたからといって、それを「誠実」とは言えない。「よくやった」とは言えるけれど、代価をもらってしたことなので、「誠実だ」とまでは言えないのだ。しかし、たとえ代価をもらって働く人であっても、いやいやではなく、にじみ出る心から「私がこれ以上をしなければ」という姿勢で、自分の時間と物質と身を惜しまず、与えられたことを

やり遂げると、これは誠実だと言えるだろう。

結局、神から「誠実だ」とほめられるためには、自分に任された以上をやり遂げて、神の国に益になるようにしなければならない。〈マタイ 25 章〉のタラントのたとえを見ても、主人からもらったものを倍以上もうけたしもべたちは「よくやった。良い忠実なしもべだ。」とほめられた。しかし、一タラントをもらって、そのまま地の中に隠しておいたしもべは主人から「悪いなまけ者のしもべだ。」と責められたし、主人は彼の一タラントまで取り上げて、それを十タラント持っている者にやるようにした。

したがって、私たちも主から任された使命をあふれるまでにやり遂げた時だけ、主から認められる、まことの誠実になることを心に留めなければならない。聖書にある昔の信仰の人々を見ても、皆が心と思いと力といのちを尽くして、神の国のために誠実に働いたことがわかる。そして、そのような人がまた、神からも特別に愛されたことが見られる。

歴史的にも、国と民族、そして王のために誠実に仕えた人々のことを考えてみよう。韓国のチョン・モンズ（訳注・14世紀、高麗末期の儒学者）、イ・スンシン（訳注・16世紀、朝鮮水軍を率いて日本軍を破った将軍）、ユ・ガンスン（訳注・日本植民地時代、独立運動に身を投じた女性）のような方々は、身と心と思いと最善を尽くして死ぬまで忠誠して、任されたこと以上をやり遂げる誠実を現した。そして、死六臣（訳注・李氏朝鮮時代前期、世祖によって王位を追われた端宗の復位を図って処刑され、後年忠臣として顕彰された6人の政治家）または生六臣（訳注・世祖の即位を認めず官職を辞してその後も一切官職につかなかった忠臣たち）のような方々も、自分に与えられた職務だけを果たしたのではなく、国と王のためにあらゆる苦しみに耐えながら、いのちをささげて任されたこと以上をやり遂げた。

神はまさに神の国と栄光のためにこのように行う人々を誠実だと言われるのである。さらに私たちが主にあって誠実に仕えて犠牲になることは、結局、何のためだろうか？ 朽ちないまことで永遠のものを得るためである。そして、数多くの魂を救うための誠実なので、どれほど尊くで価値あることだろうか。

## 第二に、全家を通じて忠実な者であることだ。

〈民数記 12:7〉には、神がモーセについて「しかしわたしのしもべモーセとはそうではない。彼はわたしの全家を通じて忠実な者である。」とほめられたことが記されている。したがって、神が言われる誠実とは、全家を通じて忠実な者であることで、その時、神も喜ばれるのだ。

それでは、「全家を通じて忠実な者」とはどういう意味だろうか？ 私たちがすべきことを分けてみるなら、神の子どもとして神の御前にささげるべきこと、教会に対すること、働き人と務めをもっている者としてすべきこと、兄弟の間、家庭ですべきことなど、それぞれの持ち場ですべきことがある。このうち、ある一つ、二つだけをよくやるのではなく、あらゆる分野で誠実に仕えることが、全家を通じて忠実であることなのだ。

「どうやってすべての分野で誠実に仕えられるのか？」と思う人がいるかもしれないが、肉の性質を捨てて、御霊に変えられるほど、全家を通じて忠実であることは決して難しく

ない。私たちが御霊によって変えられるなら、たとえ時間を少しだけ投資しても、すべてを御霊に導かれてするので、必ず実を刈り取るようになっている。

また、御霊の人に変えられた人は、自分の利益と安らかさを追うよりは相手の利益と立場を優先にするので、自分を犠牲にしても、与えられたすべての分野を顧みるのである。これに自制の実まで結ばれるなら、どの分野にも偏らないで、すべてを顧みる心になれる。

ところで、これらのすべての「誠実」は、必ず主にあつてのものでなければならない。真理から外れてはいくら誠実であっても、何の役にも立たないからだ。たとえば、ある人が犯罪組織に入り、その親分にいのちをささげて誠実に仕えたからといって、神がその人を誠実だと言われるだろうか？

したがって、ささいなことに誠実に仕えても、それが必ず真理にあつて、主にあつてのものにならないといけない。それでこそむなしいこの地のもので終わるのではなく、天国に報いとして積まれるようになる。したがって、〈第一コリント 10:31〉に「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい。」とあるように、それぞれの持ち場で、ただ神の栄光を現すために誠実を尽くさなければならない。

### 第三に、霊的な誠実である。

〈黙示録 2:10〉に「死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。」とある。ところで、ここで「死に至るまで忠実である」とは、単に肉の命をささげるまで誠実を尽くすという意味ではない。これは、罪を戦って血を流すまで抵抗して、神の戒めを守っていくことと、主にあつて与えられた使命をよく果たして、すべての持ち場でキリストの香りを放つことを意味する。「私にとって、毎日が死の連続です。」と告白した使徒パウロのように、自分の肉を徹底的に殺して、聖められていきながら誠実を尽くす時でこそ、それが神が望まれるまことの誠実である。

しかし、ここで知っておくべきことは、罪を捨てるからといって、それが報いになるのではないということだ。神を愛する子どもならば、当然、罪は戦って捨てるべきものなので、罪を捨てること自体が報いになるのではない。しかし、罪を捨てて聖められ、父のかたちに似せられるほど、将来、永遠の天国で父なる神のもっと近くで生きられる資格が与えられる。

## 8. 柔和

辞書を見ると、「柔和」について「性質や態度が、ものやわらかであること。また、そのさま」と書いてある。ところが、霊的な柔和とは、このようにやわらかい心に徳があることを言う。それで、霊的には、すべての人がいだけで、多くの人宿って休める暖かい心を持っている人を「柔和だ」と言うのだ。

だから、このように柔和な人はどこの誰にもぶつかることもなく、すべての人と平和を追い求めることができる。すべてのことに悪をもってさばいたり、罪に定めたりせず、理

解して受け入れていただける寛容の心を持っている。

聖書には神がほめられた人がいる。それは、非常に謙遜だったので柔和の実を結んだモーセである。〈民数記 12:3〉に「さて、モーセという人は、地上のだれにもまさって非常に謙遜であった。」とある。モーセはイスラエルの民を連れたエジプトから出て、40年間、彼らをカナンの地に導く過程で、本当に苦しくてつらいことを多く経験しなければならなかった。

神がモーセとともにおられたので現された数多くの不思議とするしを見ながらも、民は困難に遭うたびに、モーセにあらゆる恨みとつぶやきを口に出した。そして、男だけでも60万人に、女と子どもを含めればゆうに200万人はいたであろう多くの民を導いていく過程で、本当に人としては耐えがたい、さまざまなこともあっただろう。それに、神の御前に罪と悪を行って、ひどくは恨んで立ち向かうことまでする民を導いて、40年間も荒野で暮らしたということは、モーセが地上のだれにもまさって非常に謙遜であって、すでに柔和な心を持っていたからできたことである。

それでは、どうすればこのような心になれるだろうか？

〈マタイ 13章〉を見ると、人の心を地にたとえて説明している。そこで柔和な心は良い地にたとえられる。ところが、いくら荒地であっても、熱心に耕していけば、結局、良い地になれるように、人の心も、主にあってはいくらでも良い地のような心に変えられることができる。

それは、イエス・キリストを受け入れれば、聖霊が私たちの心に来られて、私たちの心を耕してくださるからである。石があれば取り出して、いばらと雑草があれば引き抜いて、固い土をやわらかく崩して、良い地にしていかれるのだ。それで、荒い心、すなわち、相手とぶつかって敵同士になり、ねたみ、そねみ、争いがある良くない心が、だんだんやわらかい心に変えられるのである。

しかし、この時、必ず自分の努力が必要なのだ。自分の意志と努力があるとき、神がそれをご覧になって、上から恵みと力を与えられるのであり、聖霊に助けられて、もっとすみやかに良い地に変えられることができるからである。そして、心を耕すことは一瞬にしてできるのではないので、自分の固い意志と努力があつてこそ、途中で「つらい」とあきらめられないでやり抜けるのだ。

ところで、柔和には、肉的な柔和と霊的な柔和がある。霊的に柔和な人は、その心が良い地なので、良い地には何を蒔いても、すみやかに実が結べる。すなわち、祈ることにすみやかに答えられるのだ。

しかし、もし「私は柔和なのに、なぜ祈っても答えられないのだろうか？」と思うなら、自分の柔和が肉的な柔和ではないか、顧みなければならぬ。人には優しくしておとなしく見えても、神が望まれる柔和は決してそういうものではない。

また、柔和なようだが、親切の心がなかったり、柔和なようだが喜びがなかったりするなど、他の御霊の実が結ばれていないなら、これもやはり完全なものにはなれない。柔和

な心になって、心が良い地になるなら、そのような人は自然に他の御霊の実も一緒に結んでいくようになるからだ。それほど柔和の実を結ぶことは大切であり、聖潔の近道になる。

それだけでなく、〈マタイ 5:5〉に「柔和な者は幸いです。その人は地を相続するからです。」とあるように、柔和な者は、この地上で多くの人をいさぐので、天国ではそれに対する報いとして、永遠の相続である天国の地を受けるようになる。

この世ではいくら広い地を所有したとしても、それを天国に持って行くことはできない。しかし、天国で与えられた地は大きい誇りであり、永遠のものであり、そこで愛する人々ととこしえに幸せな時間を送るのである。このような天国の地を相続するために、熱心に心の地を耕して良い地にし、多くの人を受け入れていただける柔和の実を結ばなければならない。

## 9. 自制

「自制」という単語を辞書で見れば、「自分の感情や欲望を抑えること。」とある。この自制については「自制の徳」という言葉があるほど世でも重要な徳目とされている。この自制がよくできる人はいろいろな面で益をもたらすのが見られる。自制することによって、自分を守ることができるだけでなく、自分の分と道を守るので、相手にも失礼なことはしないのだ。また、感情や雰囲気巻きこまれないので、正しく見分けることができる。これに自制された生き方をして、一つの分野に偏らないで、あらゆる分野に調和を遂げていける。

しかし、自制できない人は度を超える行いをしたり、自分の好きなおりに行ったりする。それで、他の人とぶつかったり、失敗を犯したりすることもある。また、自制できなくてある分野に偏るので、人生の調和とバランスが崩れるようになる。それだけでなく、してはいけないことをしたり、越えてはいけない線を越えるので、ひどい場合は自分の人生を台無しにしたりすることもある。

このように、世でも自制する人と自制できない人とでは、その人生において大きい違いが生じることが見られる。この自制は信仰生活をするということにおいても、かなり重要な役割をする。何よりも自制できないことによって、多くの罪を犯すようになる。「真理に逆らうことをしない」と堅く決心しても、自制できないのでまたしてしまうのだ。このように続けると、ますます真理に逆らうものに染まっていき、結局は救いさえ受けられなくなることもある。

それで、〈ローマ 8:13〉にも「もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御霊によって、からだの行ないを殺すなら、あなたがたは生きるのです。」とある。ここで「肉に従って生きる」とは、自制できなく情欲に引かれて生きるということを使う。そして、「御霊によって、からだの行ないを殺す」とは、御霊に導かれて自制することを使う。したがって、救われた神のまことの子どもになるためには、御霊によってからだの行ないを殺していくべきであり、そのためには自制の力が必要なのである。

たとえば、人は自制できなくて、口でどれほど多くの罪を犯しているだろうか。自制で

きない人は他人の過ちや欠点を何としてでも他の人に伝えようとする。自分が知っていることは、正しくても正しくなくても、ひとまず言いたいなら言ってしまうのだ。それが結局はさばいて罪に定めることになり、それによって人との間に争いを引き起こしたりする。

また、自制できなくて不平、不満をこぼすなら、自分の心が傷つくだけでなく、神の御前にも大きい隔ての壁になってしまうのだ。そして、悪い意図をもってするのではないといっても、一度話を始めたら終わらない人もいる。こういう人もやはり過ちを犯すようになる。それで、〈箴言 10:19〉に「ことば数が多いところには、そむきの罪がつきもの。自分のくちびるを制する者は思慮がある。」とあるのだ。

このように、聖められていく過程で、人を欺く情欲によって滅びて行く古い人を脱ぎ捨てて、真理に基づく義と聖をもって神にかたどり造り出された、新しい人を身に着るためには、自制の力が必要なのだ。

ところで、御霊の九つの実にある自制の実は、単に罪を犯さないための次元でなく、御霊の九つの実が美しく調和をなした「全く聖なるもの」とされるために必要である。「主にあってなら、すべてがあふれるほどあればよいだろう」と思うかもしれない。しかし、霊的なことであるほど自制して、もっと秩序と調和が必要である。

だからこそ、御霊の実に「自制」があるのであり、この自制があるので、他の御霊の実が調和をなして美しく結ばれるのである。たとえば、いくら「愛」が多くても、自制できないなら、その愛がかえって害になることもあり、相手に負担を与えることもある。「喜び」の場合も、心はいつも喜んで幸せでなければならぬが、時と場所をわきまえて表現する知恵が必要だ。

それでは、具体的に、自制する人と自制できない人とはどんな違いがあるだろうか？

まず、主にあって自制する人は、すべてのことを自分の気が向くままにするのではなく、秩序に従って自制しながら、御霊に導かれていく。それで、前に出るべき時と静かにいるべき時、そして、話をすべき時としてはいけない時をわきまえる。

そして、何かの事をする時も、どの線までが自分の立場ですべきことなのか、わきまえるようになる。他の人の立場も考慮して、自分の行いによって周りに及ぼす影響なども考慮して行う。自分が見ていくら良く見えて、たとえそれが御霊に属することであっても、決して自分の分を越えることはしない。だから、秩序が乱れるはずがなく、周りの人とも調和をなして、他の人とも平和を保つことができる。

しかし、自制できない人は、無分別な行動によって秩序と規則を壊して、そのため多くの人にも被害を与えることがある。「私は良い意図でしているから」と思って、相手のことは考慮しないで度を超えるなら、それが結局は秩序を壊し、他の人にも被害を与える結果を生むようになる。

筆者は金曜日や主日には、数多くの聖徒と握手をして話をしている。その時、ある方があまりにも恵みに満たされていて、自分の証しばかりしているとしよう。もちろん、本人は神に栄光を帰して、牧者に喜ばれようとしてそうしているのだ。すると、自分が今どれ

ほど貴重な時間を独り占めしているのか悟れない。多くの聖徒が私と握手を一度でもしたがって、ひと言でも分かち合いたがっているのに、自分が恵みに満たされているからといって、他の人を考慮しないで自制できないので、結局は多くの人が分かち合える恵みを妨げる結果になる。

したがって、自制があるとき秩序が守られるのであり、その秩序が維持されるとき、すべてが美しく調和をなすことを悟らなければならない。また、自制できない人はあせって事を仕損じたり、他の人と気まづくなったりして、苦しむようになることが見られる。自制できないだけ、間違いを犯して、事がうまくいかないようにするし、あせると分別力が落ちて、いろいろさばいて罪に定めることまでする。

たとえば、自制できる人は、ある人と話をするとき、相手の話を最後まで聞く。最後まで聞いていると、相手が心の深いところにあることまで話すようになって、さらには心の底まで打ち明けるようになる。このように相手の話を全部聞いた後、正確に見分けて答えるなら、ややもすれば間違った判断に基づいてアドバイスしてしまうことを防げるのだ。そして、これが結局は霊的な権威となり、相手を真理に導いていく力になれる。

主にあつて自制が必要なもう一つの理由は、何が何でもあふれるように与えるからといって、それがいつも相手に得になるのではないからである。

たとえば、それぞれの人によって信仰が違うので、もしこれが見分けられず、何でも御霊に属することだからといって与えようとするなら、相手が受け入れられないことがある。

筆者がいくら霊の世界についてたくさん知っていても、それを全部聖徒にお話しできない理由がまさにこれである。それで、全体的に講壇で言える内容があつて、また、少人数のグループや個人に言える深い内容もある。したがって、霊的な話だからといって、何が何でも知っていることを全部言うのではなく、言うべきなのか、言うてはいけないのか、よくわきまえなければならない。

もう一つたとえるなら、愛は与えるものだからといって、いつも施すことだけが良いのではなく、この時も必ず自制が必要である。最近、青少年の中には、親の過保護のため、成長してぐれてしまう姿が見られる。小さい頃からあれこれただをこねても全部聞いてあげて、ほしいと言うことは全部聞いてあげたので、わがままになってしまったのだ。

もちろん、このような愛はまことの愛とは言えないが、それも自制できなかったことによって、愛だと思って与えたことが、むしろ子どもに良くない結果をもたらしてしまったのだ。また、本人は霊の愛のつもりでも、時間と場所などを考慮しなければならないし、与えるものと与えてはならないもの、すべきこととしてはならないことがある。

まだ全く聖なるものとされる前は、自分は霊の愛だと思つていても、その中に肉の愛が含まれることもあるので、自制することによって、肉に落ちるのを防ぐことができる。

この他に、祈りも自制の力が必要である。神のみこころが主を呼び求めて祈ることだからといって、自制できず、時と場所にかかわりなく、どこでも主を呼んで祈るなら、これは多くの人に被害を与えることであり、神の栄光を遮るようになる。

また、信仰の兄弟どうし恵みを分かち合うことも同じだ。たとえば、相手に信仰を植えつけるためにみことばを伝えたり、ある人に恵みを及ぼそうと、熱心に自分の証しを聞か



せることがある。ところが、この時、もし相手に急な用事があるのに、自制しないで話をし続けるならどうだろうか？ 相手は失礼にならないように、とても言いだせなくて我慢しているが、このような場合、恵みになるのではなく、むしろ困らせることになる。

また、主にあって何かの集まりを持ったとき、あまりにも恵みに満たされて、予定された時間をかなり超えることもある。すると、その次に計画された他のことに当然、支障をもたらすようになる。もし話をしながら夜遅くまでいたとすれば、翌日の日課に支障をきたすだろう。そして、主婦だったなら、ひよとしてでも家事をおろそかにして、家族に対して徳にもならないこともある。

また、ある人々は祈祷会の時間に会って話をして、祈りができないこともある。「ちょっとだけ」と思って始めた話が自制できないので、祈祷会がほとんど終わるまで続くのである。

このように自制できないことで起こるさまざまなことによって、結局は自分のためにも、神の国のためにも、益にならないことがたくさんある。

それなら、このように重要な自制の実を結ぶためにはどうすればよいだろうか？ 「自制」とは、すなわち「自分で自分を治める力」という意味である。心が真心になるなら、決心したとおりに自分を治めることができる。偽りのない心、ずる賢さのない心、すなわち、真実な心になるなら、自分の心に決めたことがそのまま行えるのである。

しかし、初めからこのようになるのではないので、とりあえず小さいこと一つから自分が決心したことを守っていく訓練をしなければならない。「私はここまでだけはする」と一度決心したら、その心を変えずに守らなければならない。そうする時、これらが一つ一つが積まれて、自制の力になれるのだ。

したがって、朽ちない永遠のものを受けるために、きょうも勇敢に信仰の戦いをしていく人は、〈第一コリント 9:25〉に「また闘技をする者は、あらゆることについて自制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。」とあるとおりに、あらゆることに自制の実を結べば、御霊の実が完全に結べるのである。

## 終わりに

### 聖霊の声を聞くまでは訓練期間が必要である

〈ヨハネ 16:13〉に「しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。」とある。

イエス様がこの地上におられたとき、ご自身で話されたり行われたりせず、ただ神のみこころに聞き従われたように、私たちのうちにおられる聖霊もやはり、神のみこころを完全に教えて、私たちがそれに従って行うようにされるのである。それで私たちが聖霊の声に聞き従えば従うほど、すべてのことに栄えるように導き、必要ならば将来のことまでも教えてくださるのだ。

しかし、自分の思いを働かさず聞き従うためには、それだけ心から真理に逆らうものを捨てるべきであり、同時に従順の行いを積み上げなければならない。これらは、一瞬にしてできるのではないので、聖書の昔の信仰の人々も、長い歳月、訓練を経たことが見られる。長い間、さまざまな体験をして、神を信頼して従う方法を学んで、肉の思いを徹底的に打ち砕くように神がなさるのである。

祈る時も、ただ神のみこころに従って祈り、思いと言葉、行い、その足取り一つまでも、神の心にかなうように変えさせられるのだ。それで、ついに完全に聞き従う人になると、聖霊の声を完全に聞くだけでなく、神の権威と力が臨み、いつも認められて守られる人生を歩むようになる。

エノクが 65 年間訓練を受けた後、神のみこころに完全に従うようになると、神は、三百年間エノクとともに歩まれ、その後は、彼をあまりにも愛されたので、この地での寿命が尽きる前に、天に移されるほどだった。

モーセが 40 年の訓練を受けて、完全に聞き従うようになると、彼は全能の神の友のように愛されて、神が彼とは口と口とで語られた。また、その口から出すひと言までも神が直接聞いて答えられ、広い葦の海でさえ信仰によって分ける、驚くべき神の力を行うようにされたのである。

彼らは完全な祝福の中に入ってくるまで、40 年あるいは 65 年間訓練を受けたが、旧約時代とは違って、今日、聖霊の時代は、そのように数十年間訓練を受けなければならないのではない。そして、まだ完全にはなれなかったとしても、私たちが努力して従うほど、神は祝福を体験させるのである。

ひょっとして聖霊の声を全く聞いていない人であっても、まさに今日、この時間から火のように祈りながら、真理に聞き従っていくと、たった 1 年でも、その姿は全然変わるようになる。みことばをただ聞き流してしまった人とは途方もない違いが生じるのだ。

霊の信仰が変わり、祈りが変わり、与えられた使命での実が変わってくる。顔に現れる霊の光が変わり、敵である悪魔・サタンが恐ろしくて震える権威が臨むようになる。このように霊的な祝福を受けていくなら、肉的な心の願いがかなえられることは言うまでもな

い。神がこの上なく喜ばれるので、その人の人生のすべてのことに干渉してくださり、どんなことにでも直ちに答えられるので、何をしても栄えるように導かれる。

それで、本当に聖霊の声を明らかに聞いて栄える道に導かれるので、家庭、職場、事業の場どこにも決して困難がないし、「あなたの名は祝福となる」と言われたアブラハムの祝福が臨むのである。

### 御霊の実を結んだ幸いな人

御霊はすなわち神の心である。したがって、神の心である御霊の実が私たちの中に臨むと、それほど父なる神の心に似せられていくのだ。また、聖霊の声を明らかに聞いて御霊に導かれるので、何をしても栄える道に行ける。全知全能の神の深みまで及ばれる御霊が導かれるので、どんな障害物が現れても避ける道を教えて、栄える道に導かれるからである。

したがって、「御霊の実」は私たちをこのように幸いな道に導く尊いみことばである。人生のからまった問題を解決する、鍵のようなみことばであるのだ。しかし、鍵を持っていても、それを鍵穴に差し込んで回してこそドアが開かれるように、神のみことばを聞いたなら、それを行うとき、祝福のドアが開かれるのだ。

<ヤコブ 1:22-25>には「また、みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。みことばを聞いても行なわない人がいるなら、その人は自分の生まれつきの顔を鏡で見る人のようです。自分をながめてから立ち去ると、すぐにそれがどのようであったかを忘れてしまいます。ところが、完全な律法、すなわち自由の律法を一心に見つめて離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならないで、事を実行する人になります。こういう人は、その行ないによって祝福されます。」とある。

また、<マタイ 7:20>には「こういうわけで、あなたがたは、実によって彼らを見分けることができるのです。」とあるが、このように、各人は結局、その実によって見分けることができ、いくら葉が多くて枝が生い茂ったとしても、実がなければ何の役にも立たないのだ。

したがって、誰でもみことばに照らして、熱心に自分を顧みて発見して変えられ、自分の中に御霊の実を毎日結んでいかなければならない。すると、そのように御霊の実を一つ一つ結んでいくたびに、その生活の中でも神がともにおられる証拠が霊肉ともに美しい実として現れるようになる。

「寛容」を尽くして心のすべての罪を捨ててしまえば、心に「愛」と「喜び」と「平安」と天国の喜びが臨むはずなので、どれほど美しいだろうか。そして、霊的に「親切」の実が結ばれているなら、どんなことでも受け入れて理解できるので、どれほど安らかだろうか。

このように御霊の実が結ばれていくほど、もっと幸せで喜びあふれる信仰生活ができるのだ。実が結ばれるまでは、忍耐と訓練の時間もあるけれど、実が結ばれ始めれば、過ぎてきた時間とは比べられない幸せと美しい時間が目の前に広がるのである。

そして、愛と喜びと平安、寛容と親切と善意、誠実と柔和と自制がうるわしく調和をな

して結ばれると、神のかたちに造られたまことの子ども姿を取り戻すようになるのだ。

その時を望んで、みことばを心によく植えつけて、火のような祈りと行いを通して実を結ぶその瞬間まで、絶えず育てていかれるように。それで、〈詩篇 1:3〉に「その人は、水路のそばに植わった木のように。時が来ると実がなり、その葉は枯れない。その人は、何をしても栄える。」とあるように、豊かな御霊の実を結んでいき、何をしても栄えるように、そして主が来られる時まで、神の国を大いに実現していく御霊の戦士として、思いきり神に栄光をささげられるよう、主イエス・キリストの御名によって祝福して祈る。